

越谷市郷土研究会会報第十号

古志加具谷

平成十一年六月刊

## 卷頭言

越谷市郷土研究会

会長 谷岡 隆夫

ここに「古志賀谷」十号が刊行されるのは誠によろこばしい。

二年ごとの会報が号をおうたびに充実してくるのはうれしい。日ごろ、郷土の歴史・文化に関心を持ち、幅ひろく調査し、研究を重ねられた皆さまの目標が十号でみのった。その努力に敬意を表する次第である。越谷市郷土研究会は昭和四十年三月に発足し、三十四年をかぞえる。

「そんなに長く続いているのですか」との声がかかれる。行事の柱の史跡めぐりは二六〇回をこえる。このほか研究発表・古文書教室・展示参加と多彩な活動を行っている。

平成十年九月、市内では最古・最大の建長板碑の造立七五〇年にあたり、板碑の講演会と法要を主催し、特筆する行事となった。これは役員の支援と会員の理解により実現したもので感謝をしている。

人間の価値観はますます多様化・個性化し、ゆとりが求められている。

これらから生じる余暇に当会の催しを通して、一人でも多くの仲間とすごしたい。

会員の増加にともない、活躍していただける役員をふやし、皆さまのニーズに対応したい。

越ヶ谷の宿場町、越谷の水辺、歴史と自然に恵まれた郷土に愛着をもち、郷土研究の推進に取り組んでいただきたい。

目次

巻頭言

谷岡 隆夫

会報「古志賀谷」創刊のころ

谷岡 隆夫 1

大沢きき書き

郷土研究会 3

蒲生きき書き

郷土研究会 9

越谷市の狛犬

調査グループ・野村 勝八 18

大袋地区に散在する石仏・石塔について

加藤 幸一 29

越谷でキリスト教をひろめた吉田兼三郎翁

高橋 清 58

越谷寺院思考(一)

高橋 正輝 61

安国寺の古文書

鈴木 秀俊 67

明治二年(一八六九)蒲生村・学校規則

西田 茂 71

「大山道中記」のこと

高橋 正澄 73

藤原庚申

高島 英一 75

文書にみる寺家の食生活「精進料理献立」考

一色 英子 79



大聖寺山門（越谷市相模町）

◆ 史跡めぐり一覽・研究発表会一覽	136
◆ 文化祭展示出品	137
◆ 会則	138
◆ 会員住所録	144
◆ 役員名簿	145
◆ 年会費のお払込について	146
◆ あとがき・編集委員	147
表紙	金子 泰岑
越谷養鶏のあゆみ	森屋 英龍 83
一山一寧書の板碑	山本 鉄也 87
生涯学習との出会い	高山 はつ 90
史跡めぐりがおわるまで	郷土研究会 92
会員アンケート	郷土研究会 95
史跡めぐりの記録	郷土研究会 103

## 会報「古志賀谷」創刊のころ

谷岡 隆夫

◆創刊号は……

昭和四七年三月に発行されました。

越谷市郷土研究会が発足して七年目に会員念願の創刊号が出されました。人生でいえば結婚して七年目で待望のこともが生まれたことになりません。

当時の越谷は東武線が地下鉄線の乗り入れにより新住民が急増し、人口が十五万を超えたころです。

創刊号は五十三ページの全てが「がり版」印刷で、表紙は久伊豆神社の藤の写真で飾られています。

内容は会員の研究発表が六作品と、感想文三作品が中心で、会員名簿もあり、当時の会報としては評価できます。

編集は当時の幹事長の木村信次氏を中心に行われ、苦心の作です。昭和五二年に増刷したほど好評でした。

◆当時の会員で現在でもご健在の方は……

当時、会員は百三十名登録されています。

現在もご健在の会員は次の方々です。(敬称略)

会田 俊 有瀧龍雄 木村信次 木原徹也 小島 誠

高崎 力 谷岡隆夫 本間清利 星野昌治

の九名です。

◆当時の研究会の活動は……

史跡めぐりや研究発表会は当時から行われていました。実施回数は現在より少なく、発足から七年間で、史跡めぐりは四十五回、研究発表会は三十二回でした。

最初の何回かの史跡めぐりの集合時刻は、決めてあっても、越谷時間(ルーズ)と称し、遅刻者がおおく、出発がおくれ、愛好家ののんびりしたスケジュールでした。

当会に入会して越谷時間をはじめて教わりました。

史跡めぐり当日の案内者は前もって決まっているものの、有識者が現地で説明の弁をはずさみ、小人数の参加による利点もありました。

研究発表会の会場は適切な場所がなく、苦労しました。今のような立派な市民会館は当時ありません。

校長の小島誠氏(現当会顧問)にお願いし、越ヶ谷小学校の教室を何回か利用させていただきました。

小さな机、小さな椅子には閉口しました。

のちに、福祉会館や市役所の会議室が利用できるようになった。



当時の研究発表会の会場「越ヶ谷小学校教室」

◆当時の会長は……

初代会長の**大野伊右衛門氏**（宮本町）が創刊号の発行責任者です。昭和五二年八月二十七日に九十二歳で亡くなられ、お墓は迎授院にあります。

久伊豆神社の総代役員で、伊勢神宮の遷宮委員として昭和二八年には神職の最高位の着衣「黒縫（くろぬい）」を授けられました。地元の名士で、人あたりがよく、行動力もあつた方です。



初代会長  
故 大野伊右衛門氏

会長のほか、当会の進展に貢献された故人の存在は忘れられません。おおぜいの内、一部の方しか紹介できないのが残念です。

- |     |         |      |            |
|-----|---------|------|------------|
| 副会長 | 石塚吉男氏   | 市役員  | 越谷御殿の研究    |
| 副会長 | 山崎善司氏   | 自営業  | 古志賀谷氏の研究   |
| 理事  | 小泉市右衛門氏 | 自営業  | 越ヶ谷の生き字引   |
| 理事  | 三原善太郎氏  | 会社役員 | 神社の研究      |
| 監事  | 瀬尾哲太郎氏  | 市役員  | 大林・萩島の生き字引 |

◆会報のあゆみ……

号名	発行年月	サイズ	ページ数
創刊号	昭和四七年三月	B5	五三頁
二号	昭和五三年五月	B5	五十頁
三号	昭和五五年五月	B5	六九頁
四号	昭和五八年三月	B5	四四頁
五号	昭和六一年五月	B5	六七頁
六号	昭和六三年八月	B5	八八頁
七号	平成 四年六月	B5	一一二頁
八号	平成 七年六月	B5	九九頁
九号	平成 九年六月	B5	一三八頁
十号	平成十一年六月	B5	一五〇頁

会報は原則として二年ごとに刊行予定です。会員には無料配布されます。新規入会された会員にもその都度送付しています。会報には会則や過去の実施行事や、会員名簿が記載されています。

新会員は、会報により会の運営を理解していただけると期待しております。会員による手作りです、会員の皆様が読みやすい会報をめざしております。

一人でも多くのご投稿をお願いいたします。

# 大沢きき書き

谷岡 隆夫

小原勤三郎

大沢町が集落として形成されたのは、いつのころか詳らかではない。大沢町の旧家福井家に伝わる古文書「猫の爪・瓜の蔓」などから考えられることは、江戸時代のごく初期のころではないかと推測される。

大沢町の鎮守香取神社は、鶯後の香取神社を現在の地（大沢三丁目）に移したもので、寛永（一六二四〜四三）のころではないかと「猫の爪」に書かれている。

日光街道が整備されるにつれ、それまで鶯後や高畑に居住していた百姓たちが、往還はたへ、追々移り住むようになり、町屋をなしていったものと考えられる。

承応・明暦時代（一六五二〜五七）、大沢町が越谷宿へ加宿となったときは、町屋になっていたらしい。

大沢という地名については、この辺り一帯が江河沢沼であったころ、大いなる津という意味が、いつしか大沢と唱えられるようになったという。

「猫の爪」には、開発の残池と考えられる「七っ池の事」が記されている。七っ池というのは、内池・外池・浅間池・八郎兵衛池・観音坊池・嘉右衛門池・しじめ池の七っで、昭和中ごろまで現存していた。内池というのは、通称、学校の池といわ

れた一ヘクタールちかい大きな池であった。

池の表に菱が一面に浮いていて、シーズンには田船や盃船で菱の実を取った思い出を持つ古老も多いはずである（土地の人はこの実を・ナツコブシ・と呼んでいた）。

この池は、埋め立てられて現在は第二体育館になっている。浅間池・八郎兵衛池はマンションに、観音坊池は公園になっている。昭和三十年代後半からの人口の急増と、バブル期の開発によって、大沢の地名の由来を物語っていたこれらの池がすべて姿を消してしまったことは寂しいことである。

「猫の爪」には、日光街道に面した町割り図が書かれている。「元禄八検地名所・文化九所持之名を記す」と書かれた屋敷割図をみると、現在それとわかる家は、ほんの数えるほどしか残っていない。

農村部では、開拓の初期から現在まで続く家が多数あるのにくらべ、町屋で何代も続くことの難しさを、如実に教えられた気がした。

## 大沢を語る

大沢に以前からいらっしゃる方々にあつまっていたいただき、むかし話をしていただいた。

・井上和夫氏（大沢三丁目） ・鈴木徳治氏（大沢三丁目）

・江原清治氏（大沢三丁目） ・鈴木秀俊氏（宮本町二丁目）

——今日はお忙しいなかをご参加いただきまして、有難うございます。

## 大沢と越ヶ谷

——大沢と越ヶ谷の気風、風土の違いはありますか。

——こども同士が喧嘩した話も聞きますが？

▼ 川をはさんで集団でね。がき大将に率いられて、高等科から小学二、三年生までいれてよくやったな。神明の出羽村のガイド渡った向こうや、あちこちで。

——川で向かい合ってやったんですね？

▼ 私たちのこどもの時には、気風がちがう。村は排他的です。それにたいして、大沢はもともと宿場町で、他から来た人にはオープンだった。

▼ 旧日光街道の沿線は、旦那衆がおおかった。

近郷近在の方が正月に買い物に行くと、タオルの一本も貰えるというので。

それだけで商売が成り立つわけです。そんな関係で資産家がおおかった。

▼ 一杯飲み屋は越ヶ谷より大沢の方がおおかったです。

昔者の置き屋も二軒あった。見(検)番もありました。

▼ 東武劇場はおおきくてね。電車からよく見えたんです。

▼ そのころは無声だったですよ。枝敷席があったてね。

▼ 幕間には「おせんにアンパン」なんてきたりして。

▼ 向かって左側に弁士が立ってね。見た覚えがある。

そのうちトーカーになって。

▼ どき廻りの芝居がひと月くらい来ました。

——戦時中は劇場どうしてました。

▼ 映画専門みたいでした。

## 武州大沢駅

——交通のことで、古い話でござんたのは、鉄道馬車とか。

▼ 千住からの鉄道馬車は、赤字続きで、次に草加から粕壁まで鉄道馬車が通るといふ話があって、やがて東武鉄道が線路を敷くというんですよ。

▼ 駅ができたのは、越ヶ谷より武州大沢の方が早いです。

——こちらの人が、そのころ町長をやっていた。

▼ うん、おじいさんがね。

▼ 今の北越ヶ谷の駅の土地は、この家で寄付した。

▼ 当時、東武鉄道としては、荷物が主で、人を運ぶ目的ではなかった。これだけの敷地を提供してくれるなら、駅をつくらうという話だった。

越ヶ谷と大沢で話し合ったらしい。越ヶ谷は川に近いし、船便のが安いということで、駅は要らないといった。

大沢に駅をつくるなら、越ヶ谷はなん年間、駅をつくらないと、東武鉄道はいったらしい。

大正年間になってから、鉄道にはかなわないということで、署名運動をはじめ、東武鉄道に土地を提供して、越ヶ谷に駅ができた。越ヶ谷駅の名は、大沢の方につけていたんですけど、

越ヶ谷に返して、もともと大沢だからということ、武州大沢とつけた。こどもの時には、駅の近くに碑があったんです。

▼ その碑は久伊豆神社にあると思います。

▼ 大正九年に越ヶ谷駅ができたときに駅前にあった。

——今は久伊豆神社に置いてあるんです。

——郷土研究会では、その碑を越ヶ谷駅前にもってきてくださ



いという要請をしたんです。越谷駅の工事ができあがった時に考えましようということでした。

▼ たしか、大きな倉庫、屋根だけあって、そのころの主な貨物は、わら製品、農家の肥料にする丸い鉢をかためた。

▼ 豆粕を固めたもの、あれは満州からきたものだ。

▼ 遊び場だった。みんなで積み替えて穴をつくったりして。蔵方という荷物を担ぐ人に怒られた。

▼ 大沢の駅には、ふだんは全然つかわない貴賓室があった。

▼ 鴨場があるんで、宮様が来る時に馬を貨車で運んで、あとから特別列車で宮様が来て、貴賓室で休んで、馬にまたがって。パカパカ御獵場へ行くわけです。

▼ 貴賓室の床は、コンクリか石だな。テーブル一つだけ、簡素な机だけど物はよかったんですよ。

▼ あの頃じゃ、東武線の沿線では立派だった。

▼ 桜の木の大きなのが何本かあってね。貨物と一緒に客車が二両か三両つながつてきた。だからホームが長かったですよ。

▼ 何年ごろだったか、私はあの待合室で酔っ払って寝込んでいた。二人の駅員が私を抱えてうちまで送ってくれたこともありました。駅と周りの人との接点がけっこうありました。

▼ 蒸気機関車だから、石炭の詰め換えや、ガラを捨てる広い土地が必要だった。

▼ 大沢は桐箱の生産がおおかつたから、半分くらいは桐材が積んであった。

▼ 泳ぐときには、浮き袋がわりに桐材を抱えてた。

▼ 当時の武州大沢駅で、乗り降りするのは地元の人しかい

ない。顔を見ると大体わかるんですよ。むかしは、一時間に二本くらいだから。

洪水のとき

— 水害はどうですか。キャスリーン台風のときなどは？  
大沢が水につかったのは？

▼ 明治四三年と昭和二二年のときはすごかった。

▼ 昭和のときには、新方村、弥十郎新田は海みたいだった。弥十郎には家が十軒くらいしかなかった。

あそこの農家は舟が吊してあった。

▼ うちにも天井に舟がつるしてあったね。

年寄りに聞いたたら、明治二三年と四三年の経験があったから。  
▼ 昭和二二年のときは、栗橋が決壊したんですけど、水がくるまでに一週間くらいかかるね。

田んぼが次々と水で埋まって、幾日もかかるんですよ。

▼ 元荒川とか利根川を伝わってくるのは早いんだ。

田んぼにくるのは時間がかかるけど。

▼ 旧道に面しているも床上浸水はあったね。

— 神社や寺は小高い所にあるから、つからないでしよう？

▼ 私の家は神社のそばですけど、水はこなかった。

▼ 昭和二二年のときは、越谷は全然、水がこない。

川の向こう側までです。こっちはからからに乾いていた。

## 桃と梅の里

昔、桃や梅が有名だったとききますが？

▼ 北越谷、大袋、大房、大林あたり、いまの梅林公園あたりが梅林だった。頭の尖ったテンシンといていた。

▼ 北越谷の浄光寺の近くにも梅林があったんです。

東京から俳句をやる人が梅見にくる。

私たちは梅の枝を売ったもんだ。

▼ その時期になるとお店がでて、饅頭だの売っていた。

▼ ごさを敷いて宴会していた。こどものころ、売店の人から「あそこへ行って芸者を二人呼んできて」、見番へ呼びにくいと、いくらか小遣いになった。

▼ 桃どろぼうもやったしな。がき大将がおしえるんですよ。逃げるときには蜘蛛の子を散らすようにとか、雨が降ったあとは土の上を走らないで、滑らない草の上を走れとかね。

▼ 浄光寺のまわり一帯が梅で、寺の裏に雲龍梅とか臥龍梅があった。

▼ カメラを持っている人がいると、写真をとってもらって送ってくるのが楽しみでね。

## 香取神社

香取神社にまつわる話を教えてもらえますか？

▼ 芸者は、今日、お客がつくようにと、お化粧してお参りにいくんですよ。

▼ こどもが生まれたときとか、七っのお祝いでお参りにくる。近くのこどもに赤飯の振る舞いをするんです。社務所のお

ばさんが箸で配ってくれる。こどもには楽しみだった。

▼ 天王様は七月十五日だった。あれはいつごろやめたる。

▼ 三十八年くらいが最後と思う。

▼ 白い装束で香取様の御輿をかついだ。二丁目から一丁目、地藏橋、鷲後、高畑をまわる。あれが最後じゃないかな。

香取神社の社殿の裏に立派な彫刻がありますが、染物関係と関わりがあるんでしょうか？

▼ この辺には染物屋があったんですよ。

▼ 紺屋の屋号のつく家は、みんな染物屋だ。

▼ 川の近くで洗えた。地場産業だったんじゃないかね。

▼ 最近までやっていたのは、御殿町の。

▼ 紺屋があると、型屋だとか関係する職人がいた。

## 大沢の習慣や風習

葬式とか結婚の風習はどうですか？

▼ 葬式はちよっと田舎にはいるとちがいがあある。

▼ われわれの代になってからでも、随分かわった。

若いころは土葬だった。

▼ 穴を掘ったり、棺をかつぐ順番があったんだ。

知らない家の葬式するときにも穴掘りにいかなくちやならない。

担ぎが四人、穴掘りが一人、五人は出なくちやならないんだ。ロクドウといっていた。

▼ 自分の家で出られないとか、手がないと人を頼んできてもらう。

▼ おばあさんたちが、まくら念仏をやっていた。仏の前で

鉦や太鼓たたいて、念仏あげるんですよ。今は解散した。やる人がないんだ。お通夜とか初七日にやるんだ。

▼ どこそこがいくらくれたの、浴衣をくれたの、先にいうんだって。お宅はむかしから暮らしているから、何万くらいっていわれる。

それでは普通の家では頼めないことになる。自然消滅になった。

結婚式はどうですか

▼ 昔は嫁さんの家で宴会やって、こちらで結婚式やるという二重ですよ。

— 自分のお宅でやるのがたてまえですか。

▼ 今そういう家はないでしょう。大広間がある家はないでしょう。

▼ 派手でしたね。お嫁の家へいって行くときには兄弟たちへ土産をもっていく。挨拶がわりにするわけです。

向こうで一回宴会やって、貰うほうへきてやる。

▼ 親戚のおひろめがあって、次が近所の人でしょ。その家の跡取りになる人はそういう手順を踏んでいますからね。

— 結納金はどうですか？

▼ 大体、家格できまっちゃいますからね。

▼ むかしはよく聞きましたよ。嫁さんをあれだけの家へくれるんだけど、結納金が少ないからもめている話。

かわる大沢

— 戦前、戦後の大沢の変化はどうでしょう？

▼ 私が思うのは、あれだけ大きな池がつぶされて、第一、

第二体育館ができたが、びっくりしてますよね。

▼ 大きい小学生のこどもがシャベルで大八車で運んでね。今なら簡単にトラックで。

▼ 今はキャンベルタウン公園になっている。

▼ 八郎兵衛で沼みたいな、かなり広がったんですよ。今、マンションになっちゃっています。

▼ この前、香取神社建て替えのときにね、池の管理は香取神社ですから、文部省なんですってね。あれを手放して予算があまり少なかったんです。金いっぱい入って、寄付とったでしょ。寄付が余っちゃってね。

— 落成式は豪華だったですよ。香取神社は土地持ちだったですよ。新道ができたころはどうでしょう？

▼ あれは戦後だよ。大東亜戦争が始まったために、大沢交差点でストップしちゃった。杭打ちで終わったわけ、小学校の脇の道を広げるためというんで。

▼ 橋をつくるのに何年もかかったと思うんですけどね。丁度、二二年に大水のとき。

— 今の消防署のこの小学校、皆さんはこの小学校ですか。

▼ 消防署のところ、役場があったでしょ。

▼ 体育館の方が学校ですね。裏の第二体育館は池の中です。大沢小学校に明治天皇がいらしたという石がありますね。

— あれは福井さんの前にあったんですか。

▼ 私たち、こどもの頃は福井さんの前にあった。

▼ 福井さんの都合で、どこかへ持っていこうじゃないかてんで、じゃ学校へもってけ、になったんじゃないですか。

▼ 今の小学校と消防署の間、杉林だったんです。

▼ あそこは「ふのり」工場だったですよ。

▼ 私ども、小学校のときには、まだ、校舎なかったんだね。運動場だったんだからね。

— そのころビルはなかったですか。

▼ なかった。ぼくらのときは、香取神社でね。夏になると相撲大会があって、昔でいう七輪・竹ぼうきもらったり、盛んだったですよ。バケツもらったり、実用的な物だった。貴重品でした。

▼ 鈴木さんの家のそばに香取神社ありますよね。

あれから今の神社に移ったのはいつごろなんですか。

▼ 日光街道ができて宿場ができたときに、周りから町をつくるんで集まったという。それが大沢古馬宮にでている。

▼ 江戸時代のごく初期ですかね。

— 「猫の爪」と「瓜の蔓」の二冊、よくあったもんですね。

▼ あれは貴重です。

▼ 火災がでると、むかしのことだから一軒ですまなかったんですよ。

▼ 越ヶ谷の町も何回か大きな火事があって、大沢でも何回かあったらしいです。

— いろいろ貴重なお話をきかせていただき、お蔭さまで今日の座談会は和やかに終わりました。ありがとうございました。

平成十年九月三日

越谷市中央市民会館

収録



大沢三丁目  
江原 清治氏



大沢三丁目  
井上 和夫氏



大沢三丁目  
鈴木 徳治氏



宮本町二丁目  
鈴木 秀俊氏



大沢座談会

# 蒲生きき書き

谷岡 隆夫

小原勘三郎

## ■蒲生のようす

江戸の昔より、蒲生・登戸・瓦曾根の村々は、日光街道や荒川（元荒川）、綾瀬川とともに生きた農村であった。明治二十二年、三村合併による蒲生村誕生のあとも農業主体の産業構造は変わらず、戦後まで続いた。

蒲生地区の様相が大きく変わるのは、昭和三十年代にはじまる経済成長による急速な住宅造成からで、地下鉄日比谷線（昭三七）、武蔵野線（同四九）の開通は、さらに拍車をかけた。かつての田園地帯はまたたく間に住宅街や商店街となった。南越谷、新越谷駅まわりの開発はすすみ、コミュニティセンター（昭五四）、スーパーダイエー（同）をはじめ大型店舗が進出し、東武地区の流通、文化、交通の中心として発展した。

## ■地名の由来

「蒲生」は古綾瀬沿いの集落で、蒲など、水辺の草が多く生えていたことから名づけられた地名という。

「登戸」は古い時代、「登津戸」（ノポット）とよばれ、大きな川、または沼の渡し場があった里と伝えられている。

また、江戸への登り口から名づけられた説もある。

「瓦曾根」は、天正十九年、家康が照蓮院に賜った朱印状に

「武蔵国腰ヶ谷郷瓦曾根」と記されている。

当地は、もともと、荒川（元荒川）の河原がある小高い土地で

「川原曾根」と名づけられたという。

「川原」が「瓦」になったのは不明である。

明治八年（一八七五） 田畑は

蒲生……一九七町七反二七步 登戸……四十町四反四畝七步

瓦曾根……六六町九畝七步

に達し、米、大麦、大豆、小豆などが生産された。

## ■年中行事

一月 ・初詣 ・大盤振舞 ・蔵開き

二月 ・マエダマ ・小正月 ・二十日コガシ

三月 ・初午 ・ひなの節句 ・大師送り ・彼岸

四月 ・大般若経

五月 ・端午の節句 ・照蓮院祈祷会

六月 ・サナブリ ・百万遍

七月 ・虫追い ・天王様の祭礼 ・愛宕様の祭礼

八月 ・七夕祭り ・盆 ・菘入り ・施餓鬼

九月 ・瓦曾根最勝院奉納相撲

十月 ・十五夜様 ・彼岸

十一月 ・お日待ち ・ルスイギョウ

十二月 ・トウカンヤ ・エビスコウ

・すすはらい ・茶屋市 ・餅つき

参加者

- ・中野健蔵氏 (蒲生南町)
- ・中野桃子氏 (蒲生本町)
- ・白木重雄氏 (瓦曾根)
- ・高橋正澄氏 (蒲生西町)
- ・関根正男氏 (登戸町)
- ・金子次男氏 (蒲生西町)
- ・植竹 勇氏 (蒲生三丁目)
- ・浜野邦彦氏 (パコム館長)

日光街道と蒲生

蒲生茶屋通りのたたずまいはどうでしたか。

▼ 蒲生片町焼き米茶屋といまして、日光街道の西側だけにいろいろな商店が並んでいました。

むかし、名物の焼き米を売る茶屋が何軒かあったことから名づけられたといわれています。

茶屋通りはいつごろから、栄えたのでしょうか。

▼ 江戸時代、草加、越ヶ谷宿の中間にあり、旅人が一服するのによほどよかったのではないのでしょうか。茶屋は少なくなりましたが、戦後まで蒲生いちばんの繁華街でした。

▼ 桶屋・建具屋・仕立屋・どうこ屋・付け木屋・恵比寿屋

・豊島屋・提灯屋・竹屋・豆腐屋・瀬戸物屋・湯屋などが屋号として残っています。生活用品はほとんどありました。

茶屋通りには、当時の茶屋や店は残っていますか。

▼ ほんのわずかで、豊島屋・恵比寿屋・木村・金子肉屋ぐらいでしょう。綾瀬川の改修工事で、下茶屋の家屋は全部移転され、寂しくなっていました。

▼ 付け木屋さんも店を閉じてしまいました。

焼き米屋は、最近まで残っていたのでしょうか。

▼ 戦前、「定どん」という菓子屋で買ったことがあります。

▼ 茶屋通りには、茶屋市が開かれました。

▼ 戦後もしばらくの間、十二月二十四日には、市が開かれました。正月用のごぼうが並んだことから「ごぼう市」ともいわれていました。

▼ 正月用品が主で、しめ飾り・大神宮様・ごぼうなどの野菜・ざる・餅網などの日用雑貨も売っていました。

▼ おもちや菓子、おでんやどんどん焼きなどの屋台も出ましたので、子どもたちは楽しみにしていました。

▼ 二期期の終業式の日でしたね。

▼ 戦前は、モスリン(メリンス)を売る呉服屋も浅草から店を出しました。私はアドバルーンを初めて見ました。

▼ メリンスは貧乏人には、なかなか買えなかったですよ。

▼ うちの年寄りには市で、餅網や、経木で作った「めだま」、よしで作った「めだま」のお膳を売っていたんですよ。

▼ 付け木屋さんでは、大きな大福餅を焼いて売っていました。

茶屋通りには、ぎょうだい様という珍しい神様が祀られているそうですね。

▼ ぎょうだい様は、旅人の道中の安全を願って建てられたそうです。足を痛めている人は、わらじを供えて快気を祈っています。

ぎょうだい様とは、どんな字を書くんですか。

▼ わかりません。ぎょうだい様とか、おかま様とか、行者様とかいわれています。どれが正しいのかわかりません。

▼ 空想の神様かな。正しく伝える人がいないんですよ。

▼ 蛙みたいな、河童みたいな、不思議な姿ですね。

▼ 「帰る」を「蛙」にもじって、「無事に帰る」ようにと祈願した道祖神という説もあります。

▼ 台石には、「砂利供養」、宝暦七年（一七五七）建立の銘が刻まれています。街道に砂利を敷いて修理したのを記念して建立されたのだと思います。

造塔者には、常州・野州・総州・江戸などの奇特者、蒲生村の名主をはじめとする近隣名主の銘も刻まれています。

▼ ぎょうだい様には、当時の人々の、旅人に対する温かい思いやりがこめられています。

——草加の松原は、この辺まであったのですか。

▼ 松原はありませんが、現在の蒲生温泉付近に松土手という地名があります。むかし、松が五、六本ありました。

▼ 松原の松は、江戸を守るためだと聞いています。敵が攻めてきたときには、松の木を倒して道をふさぐんだそうです。

▼ 松土手は瓦曽根河岸にもありました。

むかし、土手に松を植えて地崩れを防いだようですね。

——登戸には「たてば」があったようですが、どこですか。

▼ 南越谷から足立越谷線に突きあたった所、森田さんの家です。

▼ むかしの茶屋、旅人の休み処ですよ。

▼ 明治二十二年に敷かれた鉄道馬車の駅がありました。

▼ むかし、鶏の休憩所もありました。鳥屋が鶏に餌や水をやって、目方をつけてから、千住まで運んだらしいですよ。

▼ 運送馬車のさかんな頃は、馬に餌や水を与えたり、馬方もここで休憩をしたそうです。

——新道（足立越谷線）ができたころはどうでしたか。

▼ 瓦曽根の照蓮院の所までは、昭和十三年に開通しました。

▼ 私は昭和十三年に、蒲生小学校へ入学しました。

入学式の日には、コンクリートの上にもが、まだ、敷いてありました。

▼ そのころ、旧道を通って越ヶ谷、草加へ行く乗合バスがありました。茶店の軒先に赤い旗をたてて休んでいると、バスが止まりました。成田山詣でのバスも通りました。

▼ 新道は東武鉄道とおなじように、家の移転などがあると大変ですから、田んぼを埋めたてて造りました。

草加は町の東側、蒲生も茶屋の西側を通っています。

茶屋通りから瓦曽根までは、沿道沿いに人家が少ないため、旧道を活用して新道を造りました。

トロッコと「もっこ」による人力による作業でした。

▼ この新道を造ったのは、昭和恐慌による失業者対策の一環として行われたようです。

▼ 当時、職人はまったく仕事がなくて、大工さんはのこぎりやかんなを質にいれて縄ないをしたそうです。

▼ むかしは、貧富の差が大きかったからね。行政に対して何もいえず、ただ、行政の指示に従うだけでした。

▼ 開通した当時は、交通量が少なく、自転車も道路の真中

を通過しても平気でした。

▼ 蒲生は日光街道ができてから発展したようです。

日光街道のような真直ぐな道路は、人が造ったもので、中川や元荒川沿いのような自然堤防を利用した古道は少ないね。

▼ 瓦曾根の元荒川沿いや、下茶屋から岩槻へ通じる綾瀬川沿いの道は、古いのではないでしょうか。

### 鉄道と水運

—— 蒲生駅はいつごろできたのでしょうか。

▼ 千住馬車鉄道（草加馬車鉄道）が日光街道を利用したのに対して、東武鉄道は、町や集落をさけて敷設されました。

▼ 明治三十三年、東武鉄道が開通した当時は、千住・西新井・草加・武州大沢・粕壁・杉戸・久喜に駅がつくられました。蒲生駅は六ヶ月おくれて、現在のスーパードライエー付近にできました。

▼ むかし、宮田さんという民家が近くにありましたね。

▼ 旧停車場とっていましたね。

▼ 蒲生駅が現在地に移転したのは、八年後の明治四十一年だそうです。当時は、蒸気機関車で客車と貨車が連結されていたそうで、乗客は少なかつたようです。

みな顔見知り、駅は社交の場でもあったそうです。

▼ 子どものころ伯父の話によると、当時、蒲生の地主の中には、手を挙げて、汽車を途中で止めて乗ったことがあったそうです。

▼ 土地を安く売ったか、寄付したかで鉄道の敷設に功績が

あったのでしょうか。

—— 東武鉄道ができる前はどうかだったのでしょうか。

▼ 江戸時代の旅は、馬や駕籠もありましたが、徒歩が主流だったんでしょう。荷物は人や馬で運びましたが、米などの大量輸送は舟です。元荒川や綾瀬川を利用した水運です。

▼ 当時は、定めによって、街道では車の使用や、舟に人を乗せることは禁じられていたようですね。

▼ 宿場の経営を守るための規制でしょう。

▼ 馬車や大八車・大六車が使われ、舟で人を運ぶことができるようになったのは、明治になってからですよ。

▼ 明治二十二年から東武鉄道ができるまで、鉄道馬車が通っていません。当時の様子を伝える人はいません。

—— 藤助河岸の水運や陸運は、どうだったのでしょうか。

▼ 藤助河岸は、今でいう物流のターミナルだったのでしょうね。越ヶ谷・粕壁・岩槻方面の産物を馬車で集め、舟で東京方面へ送られました。その逆もありました。最盛期には年間の出荷・着荷が二万余駄といわれています。

▼ 大正三年に株式会社武陽水陸が設立されましたが、昭和の初めに倒産してしまいました。

—— 倒産の原因は、鉄道や自動車の進出のためでしょうか。

▼ 会社設立当時、鉄道による輸送はすでに行われていました。直接の原因は越ヶ谷駅の開設にあたって、越ヶ谷町と東武

鉄道とで取り交わした契約で、越ヶ谷町の荷駄は東武鉄道を利用することになったからです。

▼ 戦後もしばらくは、舟による下肥の輸送はさかんでした。



▼ 船頭さんは隅田川・綾瀬川をさかのぼって大間野や岩槻の方まで運んでいきました。堤で綱を引いている人もいました。

▼ 下茶屋には「肥直」という屋号の下肥を商う家がありました。下肥は重いけど安いからね。下肥も不足して、米と交換までしたんです。

▼ 戦後は農家が牛車で、東京へ下肥をとりにいきました。むかしは、油粕や干鰯なんかつかいませんでしたか。

▼ 干鰯は二十五貫ぐらいあるんです。米一俵とおなじくらいの価格でした。貧乏人にはとても使えませんよ。

▼ 農家の次・三男が分家するときには、土地のかわりに舟一艘を与えて、自活の道をつけさせた家もあったとのこと。

▼ よほど裕福な農家のことでしょうか。当時、舟一艘は田んぼ一反や二反では買えないでしょうから。

▼ ほとんど借舟ではないでしょうか。

▼ 戦中・戦後の食料難の時は、増産・増産で下肥は貴重でした。保有米を残して全部供出でした。今では減反です。

食料難で餓死者もいるというのに。

▼ 農業政策は、現在も徳川時代も基本的には同じですね。

## 地名の由来

地名のおこりについては、いかがでしょうか。

▼ 瓦曾根は、古くは「瓦」ではなく、「河原」だったようです。「曾根」は出っばり、曲り角をいったらしいです。

大阪の曾根崎みたい。

▼ 登戸は江戸へ上る入り口ともいわれているようです。

神奈川にも登戸という地名があります。

▼ 蒲生は、蒲生氏郷で知られる琵琶湖のほとりや、新潟県や鹿児島にもあります。品川の先の蒲田。湿地帯や湖沼の近くで水草が生えている所から名づけられたらしいです。

▼ 秋山先生の話によると、京都から、こちらに来た人が蒲の実を落としたとか、京都から来たので加茂といったそうです。

▼ この辺は、武蔵野台地と下総台地の間にあった入江で湿地帯ですよ。むかし、井戸を掘ると貝殻が出てきました。

いま消えつつある地名はどうでしょうか。

▼ 奉行地でしょう。現在の蒲生二、三丁目です。

むかし、地主同士の土地争いがあり、勘定奉行による蒲生一村検地がおこなわれました。検地の結果、不正が発覚し、地主は罰をうけました。名主まで罷免させられました。

その際、勘定奉行の出張所がこの地に設置されたことから、奉行地と名づけられたと伝えられています。

道沼という地名はどうでしょうか。

▼ 地名のとおりだと思います。沼、湿地帯を通過して伊原方面へ行く道があったからだと思います。

道沼は蒲生の中でも最も低い所で、今でも海拔三m、いちばん高い所でも四mぐらいいすから。

▼ 江戸時代の五街道分間延絵図によると、出羽橋の所から道沼へ向かう道がありますよ。

▼ あの道は曲りくねっていて、農道とは違いますね。

▼ むかしは道を利用しやすいように、家の近くを通したの

でしょう。無理に道を曲げたみたいです。

東組、西組はどうですか。

▼ 東組は現在の蒲生本町、西組は蒲生西町です。

日光街道をはさんで東組、西組に分けられていたのでしょうか。

▼ 東組は、もとは、古河藩の堀田領だったようで、元禄年間に天領になったと聞いています。西組はもとから天領でした。

▼ 蒲生には字地として、前谷・東前谷・へらなし・打訳・

会野谷・村添・天神・東高野・中通・訳内・五丁目・荒神・西

浦・神明・堤外があります。

▼ 登戸には、西耕地・塚田・街道向・瀬戸口・本村・前・

新田・南向と名づけられた字地がありました。

▼ 瓦曾根には、本村・後谷・野尻・木ノ下・新田・大町切

・柳田の小字がありました。字地として、大境・田向なども記

録のこっています。

▼ 現在、公的につかわれているのは、蒲生・登戸・瓦曾根

くらいになってしまいました。

▼ むかしの地名には、それぞれ意味が含まれていて懐かし

いですね。

## 行事

お祭りなど年中行事はどうでしょう。

▼ むかしは生活に余裕がなかったのでしょうかね。古くから伝わる歴史や行事について、書き残そうとする考えはもって

なかったのでしょうか。資料がないんです。

▼ 七月十四日、十五日には、天王様のお祭りがありますね。茶屋通りで神輿をもんだり、お囃子にあわせてお神楽もあります。

した。現在も続いています。今は、お囃子はテープで、カラオケ大会などもあるようです。時代は変わったんですね。

▼ 子どものころ、浴衣を着て夜店をみるのが楽しみでした。

▼ 七月二十三日、二十四日にも、一里塚の上にある愛宕様のお祭りがあります。

▼ 奉行地では、百万遍をやりましたね。

▼ 私は子どものころ、二、三回参加したことがある。

若い衆が中心でした。鉦と太鼓にあわせて大きな数珠をもみながら歩くんです。五穀豊饒・悪魔払い・家内安全を祈願する行事で、婿いじめともいわれていました。

「この土地に早く親しみなさいよ」という理由をつけて、新参者を田んぼに落とすんです。家々をまわってご馳走になり、田んぼに入り、葛西用水で体を洗って終りになります。

まるで、一心太助のような格好でした。六月四日でした。

▼ 登戸も六月四日でした。最後は報土院の前でもむんです。

やはり、婿いじめでした。

▼ ナイダ、ナイダという掛け声でまわるんです。百万遍のことをナイダ祭りという人もいます。今はやっていません。

▼ 奉行地の場合、大きな太鼓は光明院に飾ってあります。

今は破れ太鼓ですがね。鉦は戦争中、供出してしまいました。

▼ 奉行地の百万遍は、初めに、みんな、久伊豆神社で清めてもらってから出発します。

▼ 神仏分離令の前は、久伊豆神社は光明院が別当寺でした。

その名残でしょうかね。

—— オヒマチとは、どんな行事なのですか。

▼ 十月十五日、稲刈りが終つて、一休みになるんでしょう。  
▼ 新米がとれたということで、神様への感謝する行事です。  
▼ 私の方は小さい集落ですが、オヒマチは今でもやっています。氏子は七十軒ぐらいですが、新米を持ち寄つて餅をついて祝っています。神様への感謝なんですよ。  
▼ 私の方でもやっています。久伊豆神社のオヒマチは十月十五日、当番に決まった家へご馳走をさげていき、みんなで餅をついて、飲んだり食べたりします。  
次の当番を決めて終りになります。  
▼ 私の方では、皆さんから会費をいただいて、ご馳走をつくって、みんなで一日楽しみます。  
会費は今でも、初代といひます。  
▼ むかしはお金がないから、粉を寄付してもらい、それを売って経費にしていました。最近はお金を集めて仕出し屋からご馳走を取り寄せる所もあります。  
▼ 十月十五日は小学校の運動会で、農家から職員室へあんびん餅が食べきれないほど届きました。登戸がいちばんでした。  
▼ 運動会は村じゅうの行事でしたからね。  
—— ルスイギョウというのは。  
▼ 十一月は神無月、神様が出雲へ行って留守ということ、ご馳走をつくって頂きます。私の方は荒神様でした。  
▼ これが変じて、いつも、うるさい親父がないから、内緒でご馳走を食べちゃおう、ということなんですよ。  
神様がないから悪たれても罰があたらないといつて、大騒ぎすることもあったそうです。

▼ どっちにしても、米どころですから、米にまつわる祭りと思ひます。  
—— トウカンヤというのは。  
▼ あれはもぐら叩きですよ。藁を束ねた「つつっぱ」をつくって、土（畑）を叩いて歩くんですよ。もぐらの害がそうとうあったようです。  
—— 退治できるんですか。  
▼ いや、脅かすだけです。お祭りですから。  
▼ むかしはもぐらと鼠が、農家にとって大敵でしたから。  
—— おこもりはどうですか。  
▼ おこもりは、初午の日に行われる子どもの行事です。いまは、蒲生地区ではやっていないでしょう。  
▼ 子どものころ、中尾医院のお稲荷さんの所に、むしろで小屋をつくり、夜、「お稲荷さん、万年講、お稲荷様のお初……蠟燭代おくれ、一銭でも二銭でも、ご勝手次第……」と唱えながら、一軒々々まわつてお金をいただきました。  
▼ むかしの行事をつづけるのも大変ですよ。  
私の方では、毎年、鳥居にしめ縄を飾るでしょう。しめ縄を作る人がだんだん減つてしまつて、藁もないので、三郷の早稲田の農家と契約して、毎年買っているんですよ。  
—— 大般若経六百巻とは。  
▼ 清蔵院や照蓮院でやっていました。  
大般若経の經典の虫干しですよ。施餓鬼のとき、みんなで担いで家々をまわつて歩きました。  
▼ 夏場の風を入れて、經典の保護を図つたんですよ。

——大師おくりという行事はどうですか。

▼ 明治十七年、奉行地の大熊治右衛門さんによってはじめられました。大師様のお姿を掲げて、西新井の大師様を出発して、足立区・川口・草加・鳩ヶ谷・浦和・越谷の真言宗の寺をめぐってあるのです。

▼ 大師様がその日、お泊まりになると、その地域は豊作だといわれていました。地元の年寄りの娯楽だったんでしょうね。

——参拝講はどのような感じでしたか。

▼ 私どもが一人前近くなったころ、サクガミ、作神と書くのでしよう。農家の神様のことです。

群馬県の榛名山と神奈川県の大山は、それぞれ、水の神様、出世の神様として講が組織されていました。

▼ 大山は阿夫利神社ですが、男山といわれていました。

講の抽選によって参詣者が選ばれました。出発は午前一時です。地下足袋をはき、北千住まで歩いて行っただけです。

蒲生から北千住までは、運賃が二十五銭、その二十五銭は濁り酒代です。そういうことには、労力を惜しまなかつたんです。

### 蒲生の将来

——蒲生地区の将来の展望はいかがでしょう。

▼ 今は南越谷が蒲生の中心になりました。将来は越谷市の中心になるかもしれません。瓦葺根の北の方は旧越ヶ谷町と生活圏が一緒なんです。蒲生とは離れています。これからは、生活圏を基礎とした町づくりも必要になってきます。

——館長さん、新旧住民のコミュニケーションはどうですか。

▼ 新旧住民が一緒に輪のなかで楽しみたい、というこ

とで「地域コミュニケーション」づくりが盛んになっています。

▼ 参加したい、という気持ちをお持ちの新住民の方もいると思います。なんらかのきっかけを公民館がつくってあげられたいと思っています。

▼ 私の方では、家々を持ち回りの当番制はやめました。年中行事は、すべて、自治会館でやっています。

新しい人のセンスを生かしながら、いろいろと切り替えていく必要があります。

▼ その土地の歴史を知っている土着の人々が、新しい人々に温かい手を差し伸べていかなくてはなりません。

この土地の良さを、皆さんに知ってもらわなくてはなりません。

▼ これから高齢化社会を迎えます。公民館活動も単なる文化活動だけではなく、障害者・高齢者・防災・環境対策を通してコミュニケーションづくりができればよいと考えています。

——むかしのことから今後の展望まで、バラエティに富んだお話をありがとうございました。

これからも地区ごとにお話をうかがって、記録に残したいと考えております。

平成十年九月二十五日 越谷市蒲生公民館「パコム」 収録



蒲生南町  
中野 健蔵氏



蒲生本町  
中野 桃子氏



瓦首根  
白木 重雄氏



蒲生西町  
高橋 正澄氏



登戸町  
関根 正男氏



蒲生西町  
金子 次男氏



蒲生三丁目  
植竹 勇氏



パコム館長  
浜野 邦彦氏



蒲生座談会

越谷市の狛犬

「越谷の狛犬」調査グループ 野村勝八

「越谷の狛犬」調査グループ

- 池田 仁 ○岩瀬静江 ○加藤宣士代 ○菅波昌夫 ○高山はつ
- 林 和江 ○宮川 進 ○森田三郎 ○山口美津江 ○山崎政隆
- 武井福三郎 ○竹谷フミ子 ○中道 康 ○中村林也 ○野村勝八

「狛犬」がいま、話題になっています。京都府宇治市の、ねずてつや氏が同市内の狛犬の研究で「紫式部市民文化賞」を受けられたり、落語家の三遊亭円丈氏も狛犬を研究、「THE狛犬！コレクション」という本を出されたりで、ちょっとしたブームです。

それが気になって夜も眠れなくなった私たち「調査グループ」は手わけして市内を探しまわりましたが、狛犬の見つけた狛犬は合計三九匹でした。市内の全神社を調査しましたが、狛犬のいないところが多く、グループメンバーの半分は自分の担当したところで、一匹も見つけられませんでした。しかし、こういう調査もあって「三九匹」が確定したことを明記したいと思えます。

出来たてホヤホヤの、まだ湯気のたっているような狛犬もありますが、一番古いのは、越谷久伊豆神社の享保七年のもの。一七二二年ですから、二七五年も前です。

日本最古の石造狛犬は奈良市・東大寺にある建久七年（一一九六）のもの。

参道にある石造狛犬で東日本最古は、寛永十三年（一六三六）の日光東照宮のもの。

これ以後、参道に狛犬を寄進する風習ができたともいわれており西日本での参道にある石造狛犬は大阪の住吉神社、元文元年（一七三六）のものが最古のようで、越谷市のももの、けっこう自慢できるのではないのでしょうか。

また、大沢香取神社は三組も狛犬があり、しかも、それぞれ古いものばかりで「さすが」です。

そして、おまけ「御神燈」を支える狛犬が一匹います。

三遊亭円丈の本によると、京都伏見稲荷神社には二匹のきつねで支えられた、「御神燈」があるが、この対戦は大沢神社の勝ち。理由は、自分は一人芸の落語家、二人でやる漫才は嫌いだからとのこと。

詳細な研究はこれからとして、とりあえず、越谷市の狛犬、

「現在三九匹」とご報告いたします。

(平成九年十一月記)

狛犬全リスト

久伊豆神社 川柳町二一九六

※ 制作年 平成二年

◎ 右側の狛犬

持ち物

正面に書いてある文字

右側・側面に書いてある文字

左側・側面に書いてある文字

後側面に書いてある文字

その他・特記事項

左側の狛犬

持ち物

正面に書いてある文字

右側・側面に書いてある文字

左側・側面に書いてある文字

後側面に書いてある文字

その他・特記事項

左手下に手まり

納 贈 有限会社 大熊工務店  
代表 大熊 晃 有一

右手下に子狛犬

平成二年十二月吉日

奉

狛 二

女體神社 川柳町五十二八四

※ 制作年 大正九年

◎ 右側の狛犬

◇ 持ち物

◇ 正面に書いてある文字

◇ 右側・側面に書いてある文字

◇ 左側・側面に書いてある文字

◇ 後側面に書いてある文字

◇ その他・特記事項

◎ 左側の狛犬

◇ 持ち物

◇ 正面に書いてある文字

◇ 右側・側面に書いてある文字

◇ 左側・側面に書いてある文字

◇ 後側面に書いてある文字

◇ その他・特記事項

面手下に子供狛犬

伊勢参拝記念

奉納

人名十四 解説不可

右手下に丸石

大正九年五月十八日

人名十八 解説不可

奉納

世話人八名 解説不可

石工 草加町 青木吉宋

狛 三

久伊豆神社 大成町一十二五九

※ 制作年 明治十二年

◎ 右側の狛犬

◇ 持ち物

◇ 正面に書いてある文字

◇ 右側・側面に書いてある文字

◇ 左側・側面に書いてある文字

◇ 後側面に書いてある文字

◇ その他・特記事項

◎ 左側の狛犬

◇ 持ち物

◇ 正面に書いてある文字

◇ 右側・側面に書いてある文字

◇ 左側・側面に書いてある文字

◇ 後側面に書いてある文字

◇ その他・特記事項

阿迦獅子の左足を上げた下に庇えられた

子獅子

左足に足止めの一重巻きの麻縄

寧安村

石工 松伏 伊藤平蔵

明治十二年 十二月吉日

氏子総代・大塚氏のお話し

毎年二月八日の祭典には古い時代より六才

男子による「弓射り」の行事が続行されて

きた。

阿迦獅子 右足にまり

総氏子

発起 宮元

狛 四

日枝神社 相模町六一四八一

※ 制作年 昭和五六年

◎ 右側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字

玉 奉

総代 野口茂太郎 昭和五六年十月吉日  
齋藤龜太郎

◎ 左側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

子供 奉

総代 池の谷千之 石塚慎一

狛 五

稲荷神社 恩間新田五五九

※ 制作年 〈不明〉

◎ 右側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字

親の左前足で子供をおさえている 奉

福田正治 原田邦治 山崎喜一  
山崎重治 新汲進 小島右門  
根岸□ 原田盛孝

平成元年 十月吉日建立  
神社の鳥居のそばに大きな碑が立っており、そこに恩田稲荷と書いてある

◎ 左側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

親の背中に子供がつかまっている 納

現在の狛犬は二代目のもので、四月十一日の祭礼はとても賑やかである



狛六

大道神社 大道九五  
※ 制作年 天保十三年（一八四二）

◎

右側の狛犬  
持ち物

◇ 正面に書いてある文字

◇ 右側・側面に書いてある文字

子供  
奉納

天保十三壬寅年

九月 吉祥日 大道村

◇ 左側・側面に書いてある文字

世話人 鈴木 栗原 井上 他多数  
名前多数あり

◇ 後側面に書いてある文字

◎

左側の狛犬  
持ち物

◇ 正面に書いてある文字

◇ 右側・側面に書いてある文字

◇ 左側・側面に書いてある文字

まり

狛七

香取神社 大松一一五  
※ 制作年 昭和四九年

◎

右側の狛犬  
持ち物

◇ 正面に書いてある文字

◇ 右側・側面に書いてある文字

◇ 左側・側面に書いてある文字

納

岡安春一 他二十名

◎

左側の狛犬  
持ち物

◇ 正面に書いてある文字

◇ 右側・側面に書いてある文字

◇ 左側・側面に書いてある文字

奉

昭和四九年十月

長野虎雄

◇ その他・特記事項

狛 八

香取神社 大吉一〇五五

※ 制作年 不明

◎ 右側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

子供  
献

高橋  
進

◎

左側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

玉  
奉

染谷七郎

狛 九

川崎神社 北川崎一〇七

※ 制作年 安政二年(一八五五)

◎

右側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

氏子中  
當村 奉納

氏子中  
當村 奉納

◎

左側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

氏子中  
當村 奉納

外九名  
彌助 二上 十一月吉日 外 安政 小林彦八

狛 十

久伊豆神社 蒲生一七二二

※ 制作年 昭和五三年

◎

右側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

◎

左側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

狛 十一

香取神社 増林四三三二

※ 制作年 慶応二年(一八六五)

◎

右側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字

◎

左側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

阿迦獅子 持ち物なし

関根又兵衛 他七名

氏子中

慶応元年 九月吉日

中嶋惣右エ門 他十一名

寅□民 氏子中

阿迦獅子 持ち物なし

関根又兵衛 他七名

須加長右エ門 他九名

氏子中

百木平右エ門 他九名

風化が進み記名が明確に読み取れず

香取神社 大沢三一三三三八

※ 制作年 文政二年(一八一九)

◎ (変則) 灯籠の下にある一匹のみ

- ◇◇◇◇◇ 右側の狛犬
  - ◇◇◇◇◇ 持ち物
  - ◇◇◇◇◇ 正面に書いてある文字
  - ◇◇◇◇◇ 右側・側面に書いてある文字
  - ◇◇◇◇◇ 左側・側面に書いてある文字
  - ◇◇◇◇◇ 後側面に書いてある文字
  - ◇◇◇◇◇ その他・特記事項
- .....
- 狛犬の上が御神燈になっている  
御神燈・仲勢太之講中
- .....
- 維持文政二年 巳卯五月吉日

※ 制作年 宝暦六年(一七五六)

◎ のもの

- ◇◇◇◇◇ 右側の狛犬
  - ◇◇◇◇◇ 持ち物
  - ◇◇◇◇◇ 正面に書いてある文字
  - ◇◇◇◇◇ 右側・側面に書いてある文字
  - ◇◇◇◇◇ 左側・側面に書いてある文字
  - ◇◇◇◇◇ 後側面に書いてある文字
  - ◇◇◇◇◇ その他・特記事項
- .....
- 寶暦子□ 九月
- 尻尾あり

◎

- ◇◇◇◇◇ 左側の狛犬
  - ◇◇◇◇◇ 持ち物
  - ◇◇◇◇◇ 正面に書いてある文字
  - ◇◇◇◇◇ 右側・側面に書いてある文字
  - ◇◇◇◇◇ 左側・側面に書いてある文字
  - ◇◇◇◇◇ 後側面に書いてある文字
  - ◇◇◇◇◇ その他・特記事項
- .....
- 寶暦□ 九月
- 尻尾なし

※ 制作年 天保六年（一八三五）

◎ のもの

- ◇ 右側の狛犬
- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

(上) 奉納 (下) 氏子中  
 下組  
 天保六歳乙未九月建立  
 拝殿のすぐ前にあり

◎ のもの

- ◇ 左側の狛犬
- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

(上) 奉納 (下) 氏子中  
 下組  
 天保六歳乙未九月建立  
 世話人 出羽屋平右衛門  
 岩槻村 石工 兵衛 他に文字あり  
 拝殿のすぐ前にあり

道町

武

※ 制作年 安永九年（一七八〇）のもの

◎ のもの

- ◇ 右側の狛犬
- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

天下泰平  
 越谷町 石工 半兵衛  
 當町 願主 上原源兵右衛門 源五右衛門  
 深野照左衛門 所左衛門  
 上原清兵衛  
 上原清右衛門

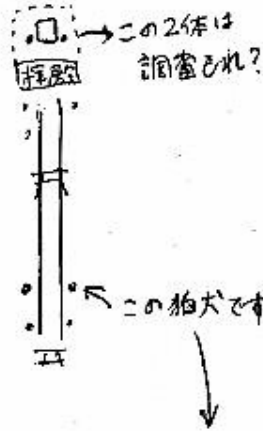
参道入ってすぐ、対で二基あるうち

奥のもの

◎ のもの

- ◇ 左側の狛犬
- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

納 國土安全  
 安永九年庚子十月吉日  
 参道入ってある内、奥にあるもの



市神神明社 越ヶ谷本町八一〇

※ 制作年 △不明

◎ 右側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

脚下に邪気  
本町壹番組  
贈 高元建設株式会社

◎ 左側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

脚下にまり  
本町壹番組  
贈 高元建設株式会社

中島諏訪神社 中島一五六?

※ 制作年 平成五年?

◎ 右側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

阿迦獅子 右足をのせている左向きの子獅子

奉  
改築 平成五年四月吉日

◎ 左側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

阿迦獅子 左足をのせている花模様のみ

献

久伊豆神社 越ヶ谷一七〇〇

※ 制作年 享保七年（一七二二）のもの

◎ 右側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

享保七歳 奉納 □ヶ□  
池田 本町

◎ 左側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

享保七歳 奉納 □ヶ□  
会田 □ など

※ 制作年 文政一〇年（一八二七）のもの

◎ 右側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字
- ◇ その他・特記事項

子供 奉納  
江戸京橋大 □ □  
石工 藤兵衛 彫工 永熊  
文政十歳次丁夾八月吉日

◎ 左側の狛犬

- ◇ 持ち物
- ◇ 正面に書いてある文字
- ◇ 右側・側面に書いてある文字
- ◇ 左側・側面に書いてある文字
- ◇ 後側面に書いてある文字

まり 奉納  
武州埼玉郡越ヶ谷  
会田出羽源資清孫  
会田平兵衛資武  
会田秀太郎資美

◇ その他・特記事項

大聖寺

相模町六一四四二

※ 制作年 不明

◎右側の狛犬

◎左側の狛犬

◇ 持ち物  
 ◇ 正面に書いてある文字  
 ◇ 右側・側面に書いてある文字  
 ◇ 左側・側面に書いてある文字  
 ◇ 後側面に書いてある文字  
 ◇ その他・特記事項  
 ◇ 持ち物  
 ◇ 正面に書いてある文字  
 ◇ 右側・側面に書いてある文字  
 ◇ 左側・側面に書いてある文字  
 ◇ 後側面に書いてある文字  
 ◇ その他・特記事項

※ 追記

新しい「狛犬」の発見  
浅間神社(越ヶ谷一五七九)  
したがって「狛犬の総数は四匹」になりました。

制作年 平成九年  
調査者 竹谷フミ子





# 大袋地区に散在する 石仏・石塔について

加藤 幸一

越谷の信仰や生活などを解明する貴重な石仏類が最近開発の波にのって葬られつつある。そこで今のうちに詳細に、かつ正確に記録し残しておきたいと大袋地区にある江戸時代の旧村、三野宮村・大道村・大竹村・恩間村・袋山村・大林村・大房村の石仏類について調査した。

各石仏類の石塔型式、造立年号や石仏類に刻まれた文字等の歴史解明に必要な詳細については三野宮の一乗院（旧三野宮村・大道村・大竹村の石仏）、大林の大林寺と大房（北越谷）の浄光寺（以上、旧恩間村・袋山村・大林村・大房村の石仏）に資料を置いておくのでご請求（無料）願いたい。

## 1. 旧三野宮村

### (1) 一乗院

山号は稲荷山という。参道入り口付近北西側奥に稲荷社があるのはそのためである。この稲荷社そばに二基の

石塔がある。加賀国の白山信仰を示す『白山権現文字塔』（図2）と紀伊国の長者が天長九年（八三二）の子歳の十月子日子刻に生んだ子であるとの信仰のある『子聖権現文字塔』（図3）がある。

また本堂向かって右側の入り口付近には不動堂があり、その堂中に『不動明王三尊像』（図1）が安置されている。かつてこの地でも成田山の不動信仰が盛んであったことがうかがえる。

参道の左側に、庚申塔、普門品供養塔、出羽三山供養塔があるが、中でも『六十六部回国塔』（図9）は元文二年（一七三七）に相模国の三浦郡に住む女性が法華經をわが国の六十六カ国すべてに奉納しようとして巡り回る途中でこの地で亡くなったが、その回国記念のために建てたものである。さらに本堂近くにも貴重な石仏類がみられる（図12から16）。

### (2) 三野宮香取神社

三野宮の香取神社は三野宮村の鎮守で、神社の境内には三基の力石が残されている。うち二基は日本一の力持ちとして知られる三野宮卯之助（向佐卯之助）が幕末に持ち上げた大石である。

北斗七星（北極星）を信仰の対象とした秩父の妙見信仰と筑波山の信仰の二つの信仰を合わせ持つ図18の石塔がある。また、和歌山県にある本宮の熊野坐神社、新宮の熊野速玉神社、那智の熊野那智神社の熊野三山信仰の

「熊野三山文字塔」もある。

(3) 坂巻家(三野宮二四六) 南西の路傍  
ここには、六十六部回国塔(図24)や庚申塔(図25と26)がある。

(4) 森田家(三野宮二四八) 前の路傍  
元文五年(一七四〇)の「いわつき道」、「ぢおんじ道」と刻まれた道しるべの観音菩薩像石仏(図28)と庚申塔(図27)がある。

(5) 森田家(三野宮一九四) 入口

天保十年(一八三九)の庚申塔がある。向かって左側面を見ると、この地は三野宮村の高砂組という小村落に属しているのがわかる。

(6) 森田家(三野宮二九一) 邸内

図30の「妙見大菩薩」と刻まれた文政四年(一八二二)や「妙見宮」と刻まれた年代不詳の石塔がある。かつてこのあたりでは妙見信仰が盛んであったことが伺える。

(7) 森田家(三野宮四四七) そば橋脇

庚申塔(図31と32)や地藏尊を浮き彫りにした石橋供養塔(図33)が見られる。なお、図32の庚申塔は神道系の猿田彦の神を祭る。

(8) 榎本家(三野宮一九一二) 祭祀地

このあたりは次に紹介する須賀家とともに三野宮村の新田の地である。

図34の『稻荷大明神文字塔』の向かって左側面には

「幾歳や 五穀の種子を 稻祭り」との歌が刻まれている。また八坂神社(祇園社)の神である牛頭天王の石塔(図35)や屋敷を守る土公神の石塔(図36)がある。

(9) 須賀家(三野宮一九七一) 前の新方川

ここにはさまざまな石仏類(図37から41)がみられるが、その中でも幕末の嘉永五年に建てられた道しるべの石塔(図41)が貴重である。碑面には「手引石」という文字が見られ、「東 かすかべ一り半、西 のしま廿丁 西 しおんじ二り」、向かって左側面には、「北 の道(野道)」と刻まれている。

## 2. 旧大道村

(1) 竹屋商店周辺路傍

竹屋商店(大道三五)の前の道路の反対側の元荒川の土手には、貴重な二基の道しるべの石塔がある。図2は越ヶ谷道と間久里を示し、図3は越ヶ谷道、慈恩寺道、間久里道を示している。

(2) 『寮』の墓地南の香取社

一風変わった庚申塔が一基ある(図4)。正面は腕が六本ある青面金剛像が浮き彫りで刻まれているが、その他に向かって右側面に「青面金剛」と文字が大きく刻まれ、左側面にも「庚申塔」と文字が大きく刻まれている。

(3) 鈴木家(大道一〇八) 邸内

荒々しくて崇りの多いとされるカマドを守る神様「三

宝荒神」の石塔(図5)が祠の中に安置されている。

(4) 川島家(大道一六一)そば用水路

天保十五年(一八四四)に川嶋平左衛門が建てた「馬頭観音文字塔」(図6)がある。

(5) 大道香取神社

「猿田彦大神」と刻まれた庚申塔(図7)や「庚申」と刻まれた庚申塔(図8)が見られる。

(6) 川原家(大道一八四)前の路傍

赤塗りの石製鳥居のそばに「土荒神」の石塔がある。土公神をさすのであろう。

(7) 八坂神社そば路傍

道しるべを兼ねた大きな庚申塔(図10)がある。正面は「庚申塔」と文字が刻まれ、向かって右側面には北は野道、右側面には東は間久里、南は岩槻を示している。

(8) 八坂神社

ここには学問の神様である菅原道真を崇める「天神文字塔」(図11)がある。

(9) 川島家(大道二二二)路傍

主尊に青面金剛の梵字「ウーン」が大きく刻まれた珍しい庚申塔(図13)である。

(10) 小林家(大道一四)路傍

大道の新田の地にある小林家は屋号を「観音経どん」と代々呼ばれているが、それは小林家の先祖(市右衛門)が観音経(普門品)を熱心に信仰したからである。図14

の文政六年(一八二三)に建てた「普門品供養塔」はそのことを物語る貴重な石塔といえる。

その石塔のそばに道しるべを兼ねた小さな石橋供養塔(図15)がある。向かって右側面には「右ぢざう道」と刻まれ、正面には「岩付領大道村」との文字が見られる。この周辺は江戸時代に岩槻領だったことがわかる。

(11) 大道新田稻荷神社

ここには庚申塔をはじめ、多くの石仏類が整然と並んで建てられている。図17と図22は普門品供養も兼ねた珍しい庚申塔である。

### 3. 旧大竹村

(1) 大竹香取神社

入口正面の路傍には、猿田彦の庚申塔(図1)が見られる。参道を入ると、左側の参道沿いに多くの石塔が並んでいる(図3、9)。

(2) 東養寺(太子堂)

地元の人からは「太子様」と呼ばれ親しまれている東養寺はかつては境内地に太子堂があったが、現在は本堂のみ。太子堂とは聖徳太子を祭るお堂のことである。

東養寺の墓地の南側道路脇には、道しるべを兼ねた背の高い庚申塔(図11)がある。正面には「南 こしかやへ」、向かって右側面には「東 まくり半道、かすかへ二り」、左側面には「西 のしま半道、いわつき二里、

北のミち(野道)と刻まれている。

境内には、庚申塔や十三仏塔をはじめ、さまざまな石仏類が一塊になって建てられている。

図19は、寺院名の文字が刻まれた石塔で、この地が「太子山龍藏院東養寺」とわかる。

(3) 大袋公民館そば用水路道端

道しるべを兼ねた普門品供養塔(図22)が建っている。石塔正面の碑面には「向いわつ□」、向かって右側面は「南こしがや」、左側面は「東まく□」と刻まれている。

(4) 向佐家(大竹一五三)邸内

この向佐家は屋号が「元名主」と呼ばれる家である。江戸時代に名主を経験した家柄と伝えられている。

邸内に「弁財天文字塔」(図23)がある。以前は現在の真南十五メートルの地点にあった。その東側隣に小さな池があったが、現在は新しく新しい道路となっている。

(5) 島村家(大竹四三八)北東角地

図22は、前市長の島村慎市郎氏宅の北東角地路傍の祠の中にある地藏菩薩像である。地元では「北向き地藏」と呼んでいる。

なお、かつて地元では正月三が日と毎月一日、十五日、二十八日の日に、北向き地藏とこの近くの浅間神社、香取神社の合わせて三カ所、それに吉沢家(大竹四三二)敷地内の伏見稲荷の祠を巡拝していたそうである。

(6) 武藤家(大竹六七七)そば路傍

図23は、武藤家が管理している地藏菩薩像である。かなり摩耗しているが、地藏像の左側(向かって右側)の脇に刻まれた文字は「文化三寅」「三月朔日」と読める。

#### 4. 旧恩間村

(1) 恩間新田稲荷神社

図1は牛頭天王を祭る石塔である。牛頭天王とは、もとはインドの祇園精舎の守護神で、頭に牛頭があることからこのように言われたのである。わが国では、スサノオノミコトとされ、京都祇園社(八坂神社)の神となっている。牛頭天王の信仰がかつてはこの地でも盛んであったことがうかがえる。

(2) 山崎家(恩間新田一一二)前路傍

図2の湯殿山・月山・羽黒山の出羽三山は、羽黒修験(山伏)の修行の中心地で、かつては遠いこの地に恩間新田からも出掛けられた者がいたのである。

(3) 山崎家(恩間新田一一一)個人墓地

図3の8は、現代でも法事などでよく聞かれる呪文である光明真言が刻まれている。特に図3、5の8は上部に二十三個の梵字で下から右回りに円形に並べられ、かつ、その円の中央には大日如来真言の五個の梵字が刻まれて曼陀羅となっている。光明真言とは、

「オン、ア、ボ、キャ、ベイ、ロ、シャ、ナウ、マ、

カー、ボ、ダラ、マ、ニ、ハン、ドマ、ジンバ、ラ、ハラ、バ、リタ、ヤ、ウン」

(4) 恩間新田公民館(能満寺跡地)

ここはかつては三野宮の一乗院の末寺である能満寺が置かれていたところである。この地に「庚申塔」と刻まれた庚申塔(図9)と六本の腕を持つ青面金剛像が描かれた庚申塔(図10と11)がある。庚申塔は必ず「見ざる、聞かざる、言わざる」の三猿が描かれている。特に図10は「日月、青面金剛、二鶏、三猿」を備えた代表的な型式の庚申塔である。図10の青面金剛の手には、輪室と矛、弓と矢、髪のをつかまえてぶら下げられた女性と剣をそれぞれ持っている。

庚申信仰は六十日に一度やってくる干支の庚申の日に庚申講の仲間たちが一堂に会し、徹夜して過ごす行事である。それは、人間の体の中に潜んでいる三尸と言われ、三匹の尸虫が、庚申の日の夜に、人の睡眠中に口から抜け出して天に昇り、その人が日頃犯した罪を天の神に暴く。するとその報告をもとに判断して生命を奪ったり、若死にさせたりする。そのため、その日は三尸虫が身体から抜け出る機会を与えないように寝ないのである。このような庚申信仰はかつては全国津々浦々で見られた。

(5) 勢至堂

図12、16は庚申塔である。図13は普門品を誦読した記念に造立された石塔である。中央には浮き彫りの観世音

菩薩(観音様)が刻まれている。「普門品」は「法華経観世音菩薩普門品第二十五」の略称である。俗に「観音経」とも呼ばれている。図14は聖徳太子が十六歳の時に父である用明天皇の病氣平癒を祈る姿の孝養像である。柄香炉を執る姿に表されている。図18は馬の頭を頭上に載せた観音様を佛像で表した石仏である。一般に観音様はやさしい顔付きをしているのであるが、馬頭観音は例外で、怒った顔付きとなっている。図17は佛像の代わりに文字で表している。

(6) 恩間香取神社

図20は主尊を仏教系の青面金剛とせず、神道系の猿田彦とする庚申塔である。猿田彦は、天孫ニギノミコトが高天原から高千穂に降臨する時、天界からの分かれ道アマノヤチマタ(数多くの道が分かれていた)にいて出迎え、天孫を道案内したという神。「彦」の字が「昆古」として珍らしい。

(7) 恩間業師堂

この地には多くの庚申塔が見られる。また、六人の地藏(図27)や六種類の観音(図28)を描いた石幢も見られる。六観音とは、如意輪観音、准胝観音、千手観音、馬頭観音、十一面観音、聖観音(普通の観音様)をさす。

(8) 恩間地藏堂

地元では「地藏坊」と呼んでいる。図30は、図15と同じ不動明王の石仏である。石仏表面には「阿遮羅」の文

字が見られるが、これは「不動明王」のことである。不動明王は怒った顔付きをし、右手に剣、左手に羅索をもつ像容で、いかなることにも動揺しないという意味で不動と名付けられている。不動信仰がこの地でも盛んであったことがわかる。

## 5. 旧代衣山村

### (1) 袋山観音堂

図1は観音堂墓地の入り口にあるが、側面に「これより左、しんめいみち(神明道)」と刻まれた道しるべを兼ねた石塔である。その他、この墓地には庚申塔が数多く見られる。その中に、鬼は一匹が普通であるのに二匹も描かれた珍しい庚申塔(図8)がある。

### (2) 袋山久伊豆神社

図17の石灯籠供養塔の向かって右側面には「江戸築地の地名が見られ、遠く離れた江戸の地より石灯籠が奉納されたことがわかる。」

### (3) 袋山薬師堂

図18の六十六部回国塔は、当村の円心が、法華経(大乘妙典)をわが国の六十六か国すべてに納めようと徒歩で廻った記念に造立したものである。現代のように便利な交通機関がなかった当時としては全国を巡るのは大変な苦勞であったであろう。

また図19の庚申塔は、両側面に刻まれた文字を見ると

奉納者がすべて女性である。青面金剛が女性の髪の毛をつかまえてぶら下げている庚申塔がよく見られることからわかるように女性は卑しいとされ、庚申待では女性を排除して男性のみの講中で行われるのである。しかし袋山村では何と女性のみの庚申待が行われていたことは特筆すべきことである。なお、女性をぶら下げている袋山村内の庚申塔として次の例があげられる。

図8、図24、図25、図26、図28、図29

### (4) 袋山釈迦堂

ここは末田の金剛院の末寺である「能仁寺」の跡地である。本尊が釈迦如来であった。この墓地には袋山村の名主を代々務めた細沼家の格式高い墓地があるほか、庚申塔が多くみられ整然と並べられている。図21の名号塔に「宏善一の名前と花押(サイン)が見られるが、宏善とは、江戸末期から明治にかけて活躍した大泊村の安國寺の宏善上人を指す。」

図26、30、31、32の庚申塔はすべて男女協力して奉納している。男性優位の時代においては珍しい。

## 6. 旧大林村

### (1) 大林香取神社

図2は、恩間村の香取神社にある図15と同様、彦の代わりに「毘古」の文字を使った猿田彦庚申塔である。

### (2) 飯山家(大林三〇五)邸内

図8は、飯山家前を通る県道大野島・越谷線のT字路の飯山家側の角地にあった貴重な道しるべの石塔で、『野島地蔵尊道三十丁余のじま(野島)道』と刻まれていた。現在はこの地になく、所在不明となっている。誠に残念である。この図は当時の写真をもとにスケッチしたものである。

(3) 大林寺

大林寺は戦前までは尼寺として知られた禅宗寺院である。

図10はこの寺の中興である礎山和尚が造立した石塔である。図11と12は、西国三十三か所、四国八十八か所、秩父三十四か所、坂東三十三か所の巡礼地のすべてを徒歩で巡り終わった記念に造立した記念の石塔である。巡礼の盛んな様子がかがえる。

7. 旧大房村

(1) 元荒川土手そばの路傍

図1は、道しるべを兼ねた庚申塔である。向かって左側面には「左、じおんじ・のじま道」と刻まれている。

(2) 大房稻荷神社

この地にも庚申塔が多く見られる。その中で図3と19は、共に向かって右側面に「岐神」の文字が見られる猿田彦庚申塔である。岐神(くなどのかみ、ふなどのかみ)は、イザナギの神が黄泉国からの逃避の後、禊・祓の時

に投げ捨てた杖から生まれた神で、道の分かれる所に立っていて、種々の災いを退ける神であるという。天孫を出迎えるために天界からの分かれ道で待っていた猿田彦と同一視されたのである。

図4は檮宮文字塔である。檮宮とは、鳥取市にある檮宮神社をさすと思われる。遠方の因幡国からの信仰がこの地に見られるとは驚きである。

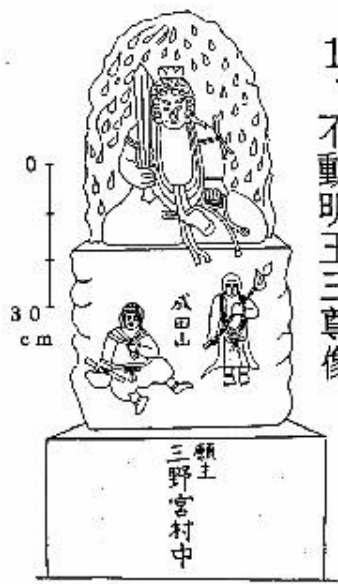
(3) 浄光寺

浄光寺はかつては「越ヶ谷古梅園」で有名な寺院であった。明治末期から大正、昭和にかけて寺院周辺で大変な賑わいを見せたのである。しかし一方でこの寺院の境内には見るべき石仏石塔がないのはなぜであろうか。

図10は元は大房の薬師堂にあった石塔である。埼玉鴨場そばの大房の薬師堂にあった石塔が、平成二年に薬師堂の廃止とともに浄光寺に移されたのである。大房薬師堂は徳川幕府より浄光寺に堂領として与えられた高五石の御朱印地で、かつては「鶴の森の薬師」と称され、大同二年(八〇七)創建と伝えられる由緒あるお堂であった。言い伝えによると、大林村と大房村とがこの薬師堂の所有を目指して相撲で争い、勝った大房村が手に入れたという。図11も旧日光街道沿いの、今はなき大房薬師堂へ通じる通路の入口の南側角地にあったものを浄光寺に移されたものである。

# 三野宮

1. 三野宮 不動明王三尊像



2. 三野宮 白山大権現文字塔



3. 三野宮 子権現文字塔



4. 三野宮 青面金剛像庚申塔



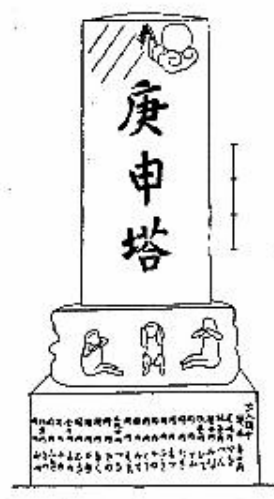
5. 三野宮 普門品供養塔



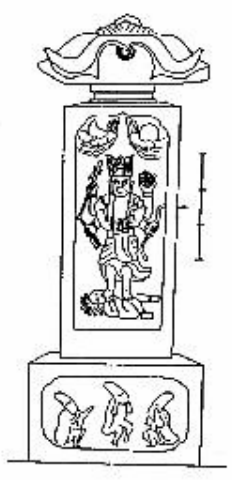
6. 三野宮 文字庚申塔



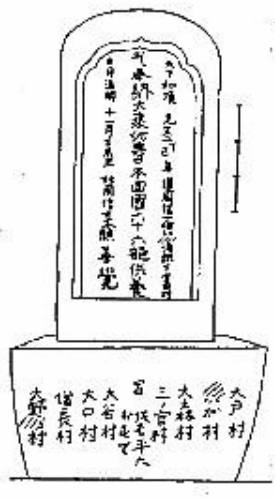
7. 三野宮 文字庚申塔



8. 三野宮 青面金剛像庚申塔

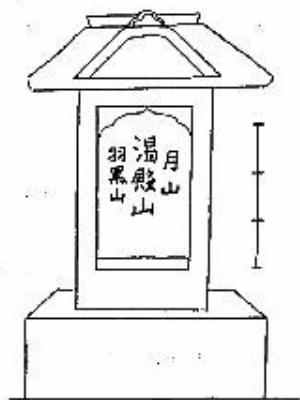


9. 三野宮 六十六部回国塔

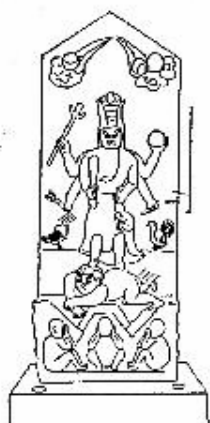




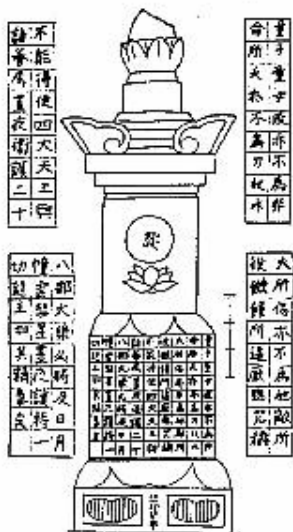
10. 三野宮 出羽三山供養塔



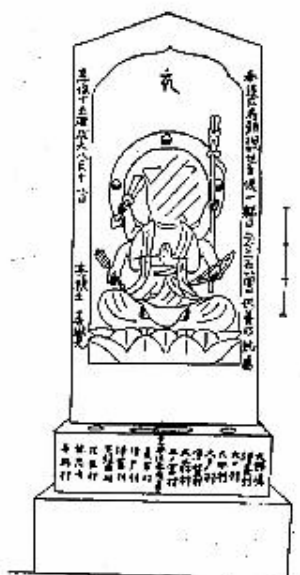
11. 三野宮 青面金剛像庚申塔



12. 三野宮 宝篋印塔



13. 三野宮 馬頭觀音像



14. 三野宮 丸彫り地藏菩薩像



15. 三野宮 光明真言供養塔



16. 三野宮 弘法大師一千年御忌供養塔



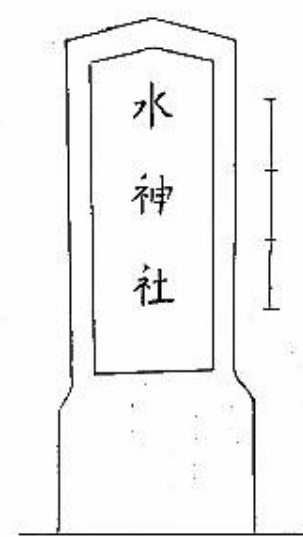
17. 三野宮 天神像



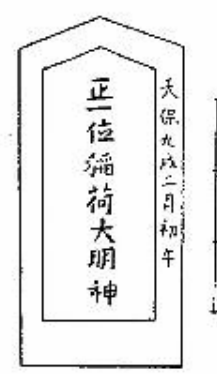
18. 三野宮 妙見菩薩・筑波山両權現文字塔



19. 三野宮 水神文字塔



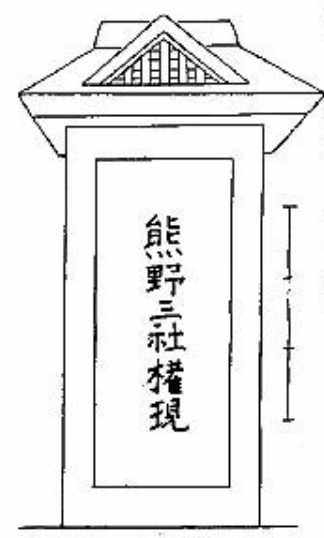
20. 三野宮 稻荷大明神文字塔



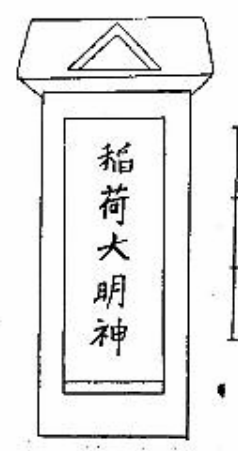
21. 三野宮 稻荷大明神文字塔



22. 三野宮 熊野三山文字塔



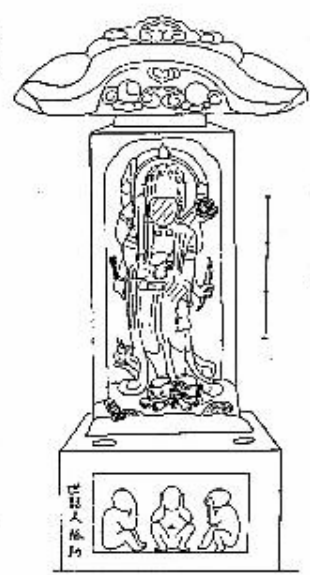
23. 三野宮 稻荷大明神石塔



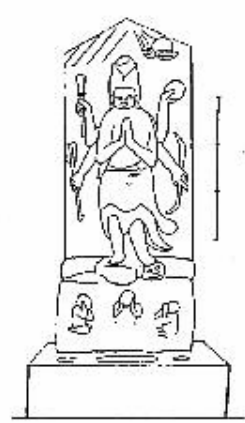
24. 三野宮 六十六部回国塔



25. 三野宮 青面金剛像庚申塔



26. 三野宮 青面金剛像庚申塔



27. 三野宮 青面金剛像庚申塔



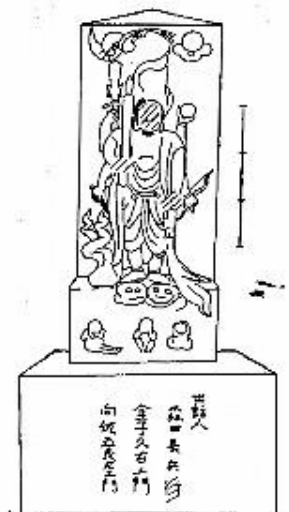
28野宮

道標をかねた観音菩薩像



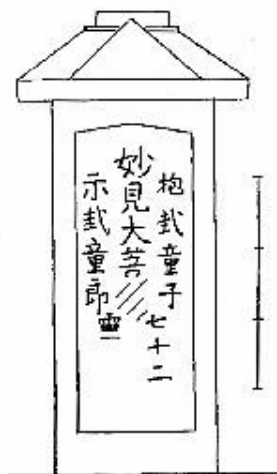
29野宮

青面金剛像庚申塔



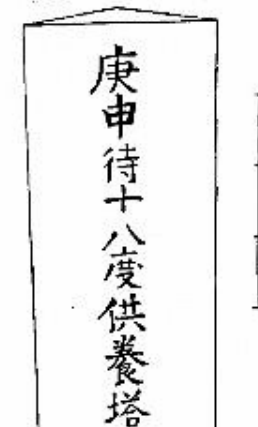
30野宮

妙見菩薩文字塔



31野宮

文字庚申塔



32野宮

猿田彦文字庚申塔

33野宮

石橋供養塔

34野宮

稻荷大明神石塔

35野宮

牛頭天王文字塔

36野宮

土公神文字塔

- 39 -

37野宮

文字庚申塔



40野宮

青面金剛像庚申塔



1大道

地蔵菩薩像



30 cm

大道

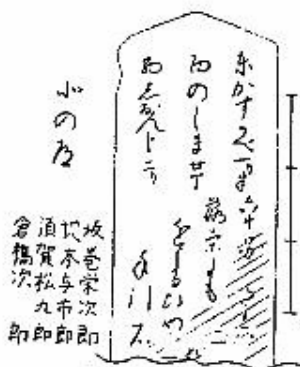
38野宮

石橋供養塔



41野宮

道標石塔



2大道

道標を兼ねた普門品供養塔



39野宮

地蔵菩薩像



3大道

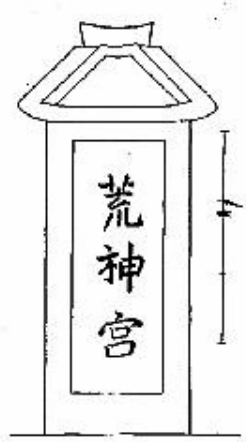
道標石塔



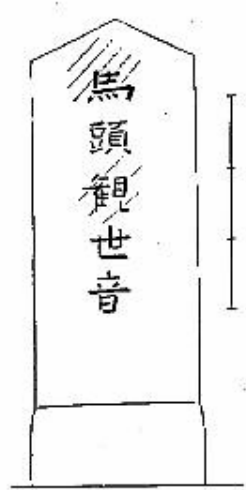
4. 大道  
青面金剛像庚申塔



5. 大道  
荒神文字塔



6. 大道  
馬頭観音文字塔



7. 大道  
猿田彦文字庚申塔



8. 大道  
文字庚申塔



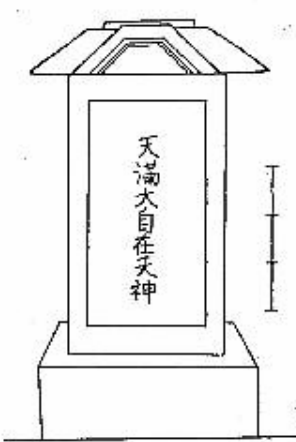
9. 大道  
土荒神文字塔



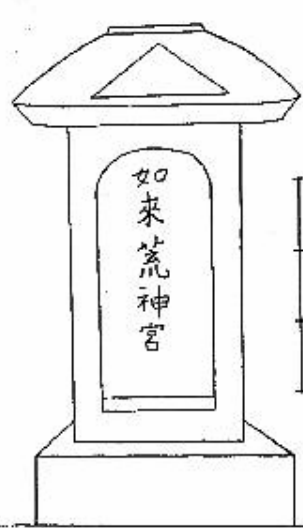
10. 大道  
道標を兼ねた文字庚申塔  
天保四年己卯三月吉日  
北のち



11. 大道  
天神文字塔



12. 大道  
荒神文字塔



13 梵字庚申塔



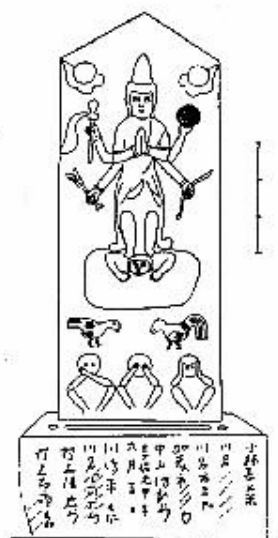
14 普門品供養塔



15 道標を兼ねた石橋供養塔



16 青面金剛像庚申塔



17 普門品供養付き庚申塔



18 文字庚申塔



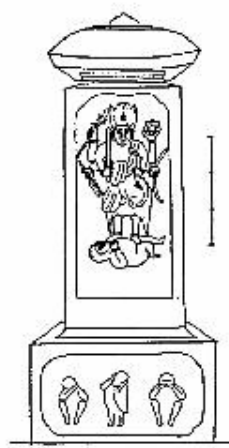
19 文字庚申塔



20 文字庚申塔



21 青面金剛像庚申塔

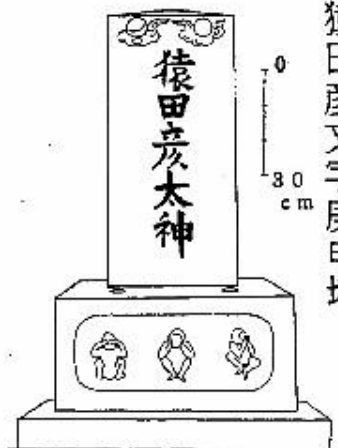


文字庚申・普門品供養塔

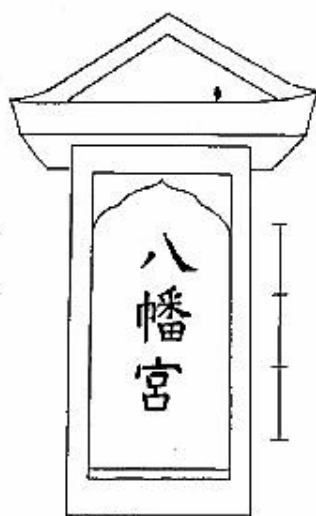


# 大竹

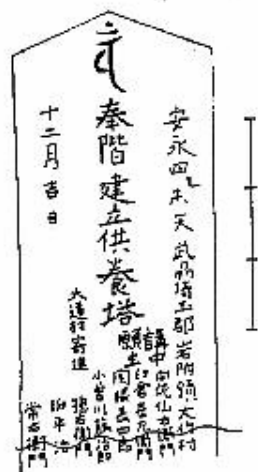
1. 大竹 猿田彦文字庚申塔



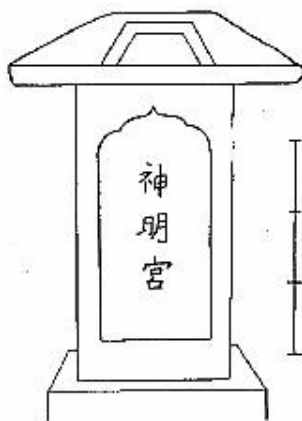
2. 大竹 八幡宮文字塔



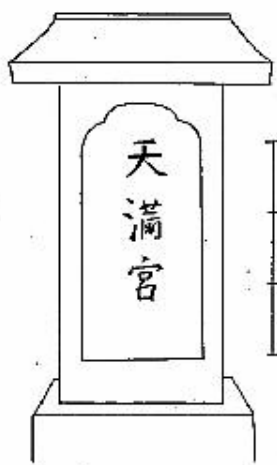
3. 大竹 普請供養塔



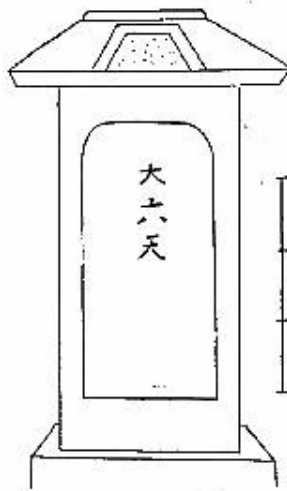
4. 大竹 神明宮文字塔



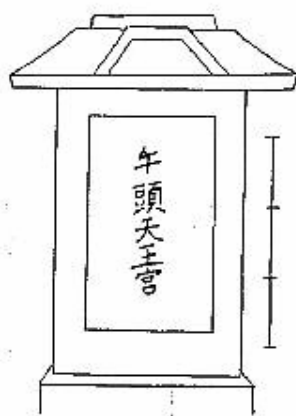
5. 大竹 天満宮文字塔



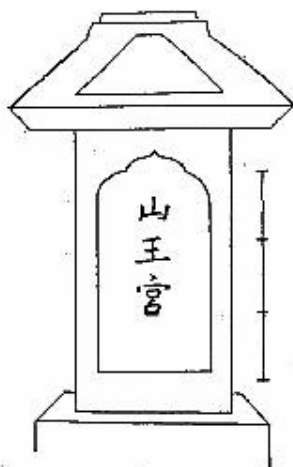
6. 大竹 第六天文字塔



7. 本符  
牛頭天王文字塔



8. 本符  
山王文字塔



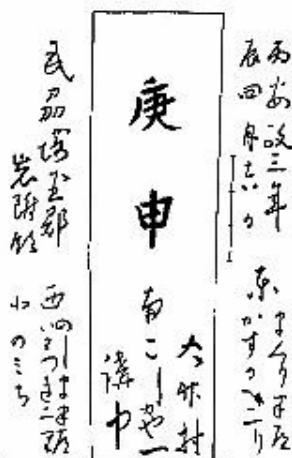
9. 本符  
普請供養塔



10. 本符  
稻荷文字塔



11. 本符  
道標付き文字庚申塔



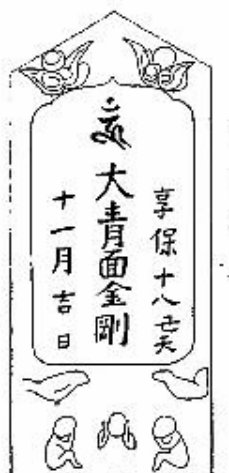
12. 本符  
六十六部回国塔



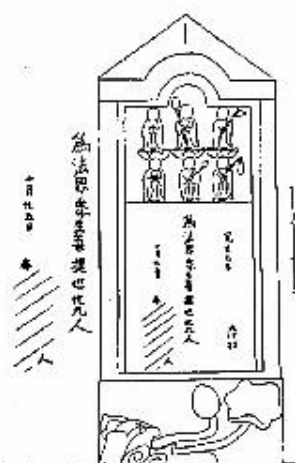
13. 本符  
十三仏塔



14. 本符  
文字庚申塔



15. 本符  
一石六地藏菩薩塔





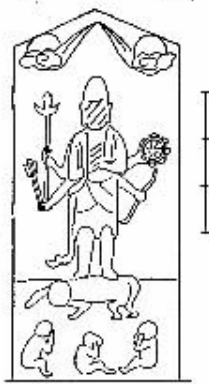
16 青面金剛像庚申塔



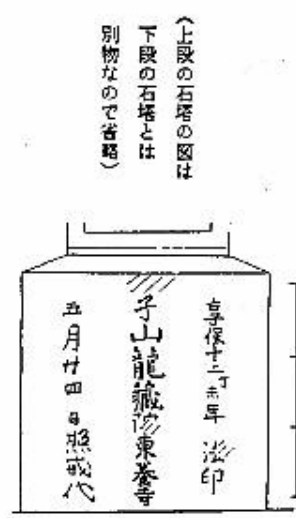
17 青面金剛像庚申塔



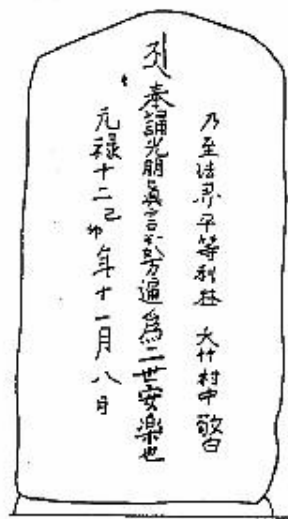
18 青面金剛像庚申塔



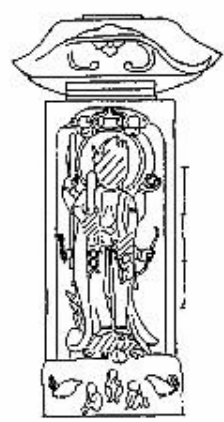
19 寺院名文字入り石塔



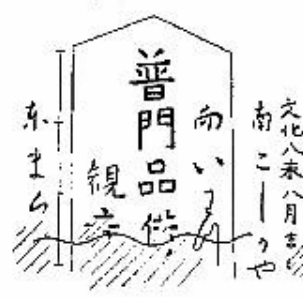
20 光明真言供養塔



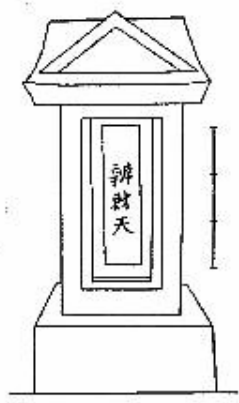
21 青面金剛像庚申塔



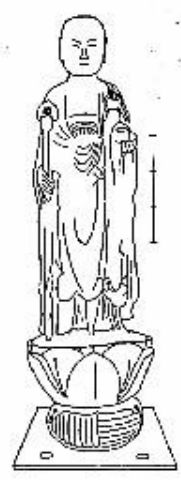
22 道標付き普門品供養塔



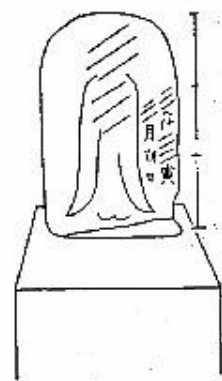
23 弁財天文字塔



24 「北向き地藏」像

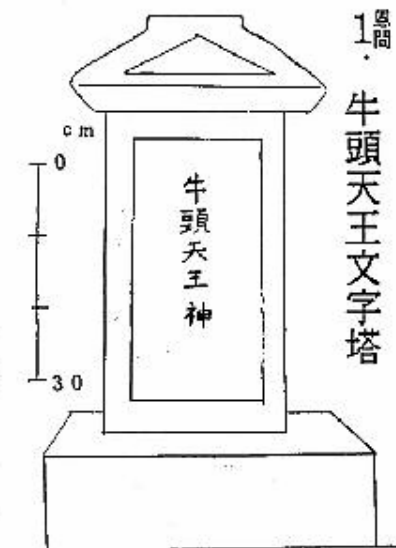


地藏菩薩像



恩間

1. 牛頭天王文字塔



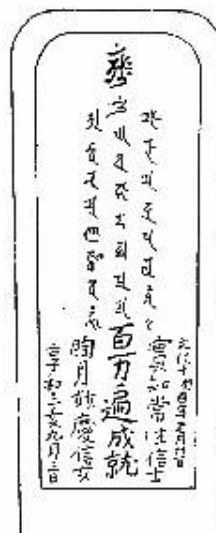
2. 出羽三山文字塔



3. 光明真言曼陀羅塔



4. 光明真言塔



5. 光明真言曼陀羅塔



6. 光明真言曼陀羅塔



7. 光明真言曼陀羅塔



8. 光明真言曼陀羅塔



9. 文字庚申塔



10. 青面金剛像庚申塔



11. 青面金剛像庚申塔



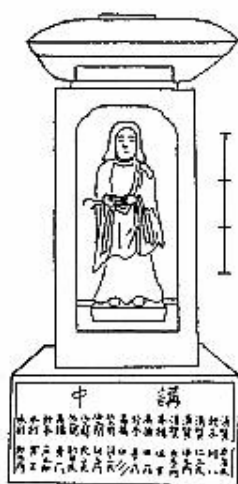
12. 青面金剛像庚申塔



13. 普門品供養塔

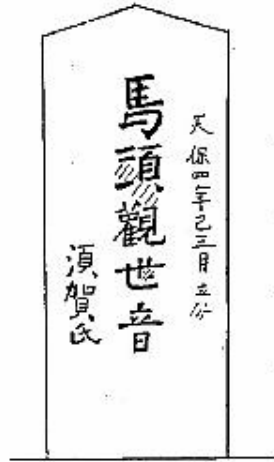


14. 聖德太子供養塔

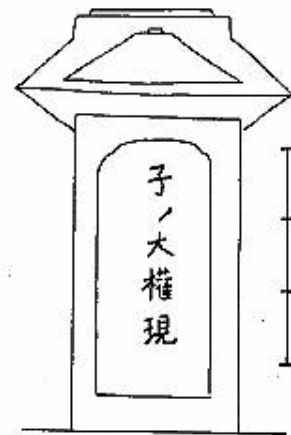
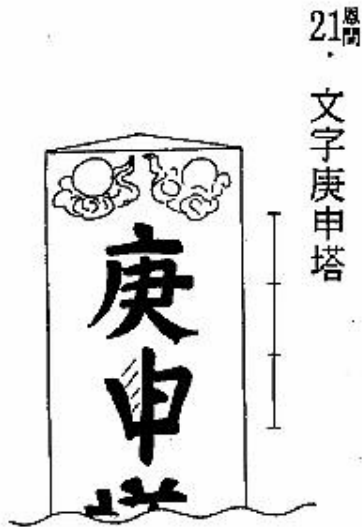


15. 不動明王像





16層  
青面金剛像庚申塔



19層  
子の権現文字塔



23層  
青面金剛像庚申塔



22層  
文字庚申塔

25墨

文字庚申塔



26墨

文字庚申塔



27墨

六地藏石幢



同前  
於本住持門

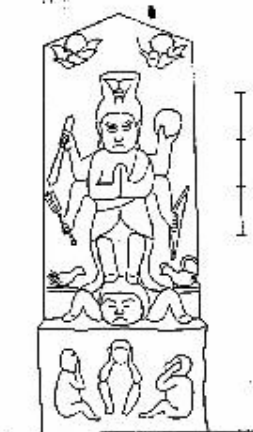
28墨

六觀音石幢



29墨

青面金剛像庚申塔



30墨

不動明王像



阿迦羅護摩一千座

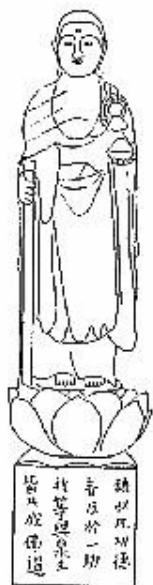
31墨

文字庚申塔



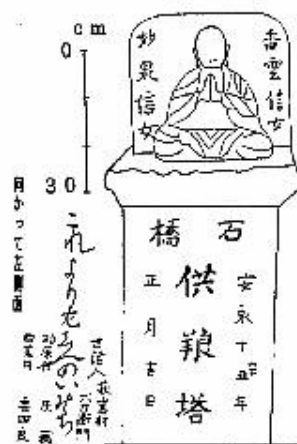
32墨

丸彫り地藏菩薩立像

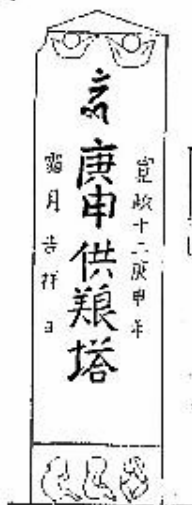


# 袋山

1. 道標付き石橋供養塔



2. 文字庚申塔



3. 文字庚申塔



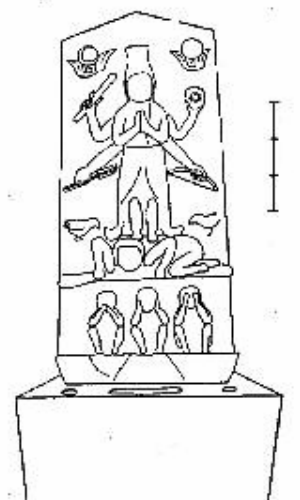
4. 文字庚申塔



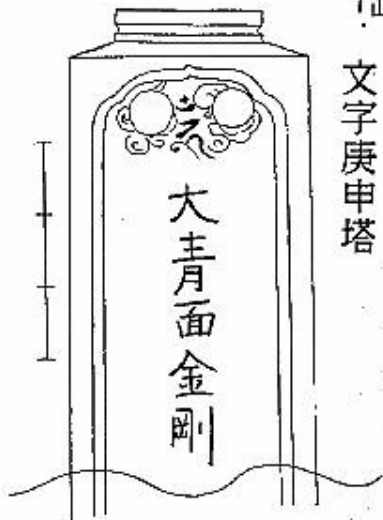
5. 文字庚申塔



6. 青面金剛像庚申塔



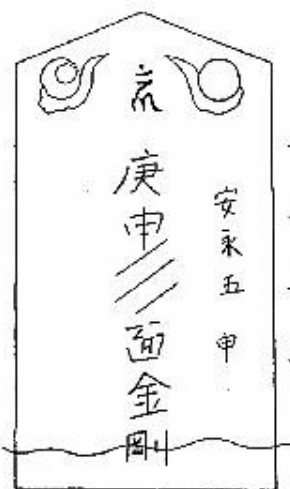
7. 文字庚申塔



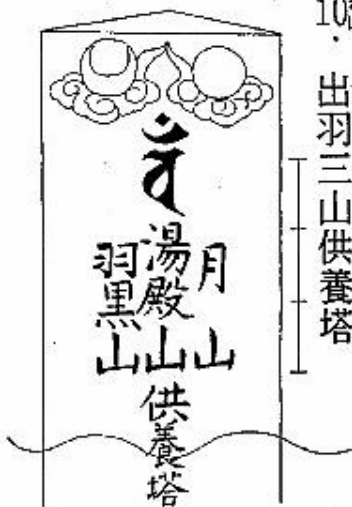
8. 青面金剛像庚申塔



9. 文字庚申塔



10<sup>段</sup> 出羽三山供養塔



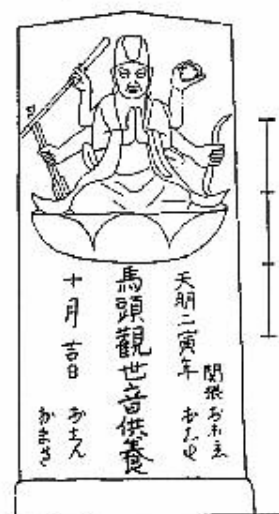
11<sup>段</sup> 青面金剛像庚申塔



12<sup>段</sup> 青面金剛像庚申塔



13<sup>段</sup> 馬頭觀音像



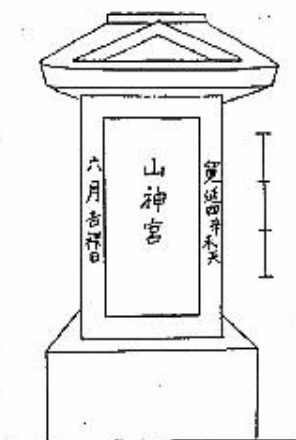
14<sup>段</sup> 天満宮文字塔



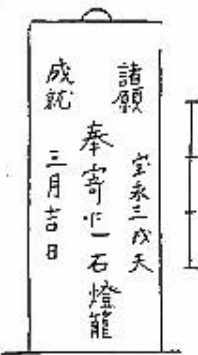
15<sup>段</sup> 稲荷社文字塔



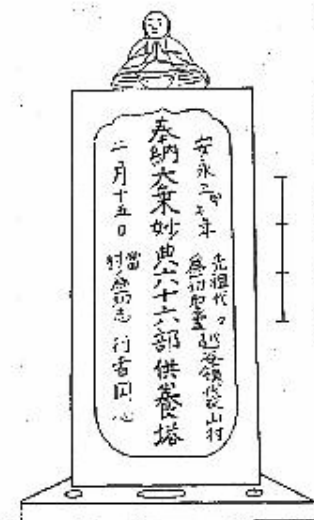
16<sup>段</sup> 山神宮文字塔



17<sup>段</sup> 石燈籠供養塔



18<sup>段</sup> 六十六部回国塔



19<sup>崙</sup>  
文字庚申塔



20<sup>崙</sup>  
地藏像付き梵字文石塔



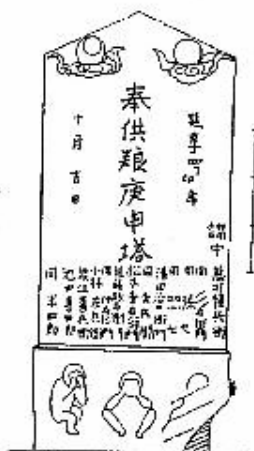
21<sup>崙</sup>  
名号塔



22<sup>崙</sup>  
不動明王像



23<sup>崙</sup>  
文字庚申塔



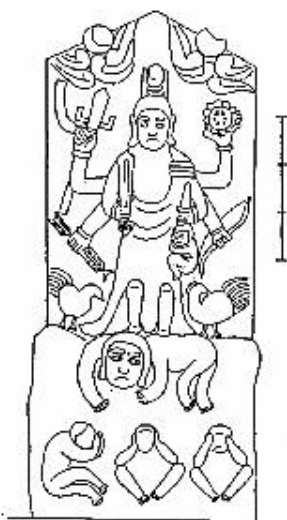
24<sup>崙</sup>  
青面金剛像庚申塔



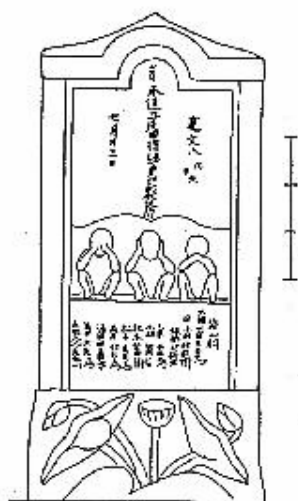
25<sup>崙</sup>  
青面金剛像庚申塔



26<sup>崙</sup>  
青面金剛像庚申塔



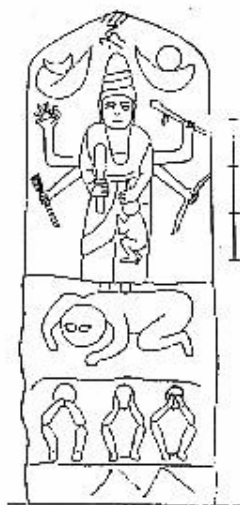
27<sup>崙</sup>  
文字庚申塔





28

青面金剛像庚申塔



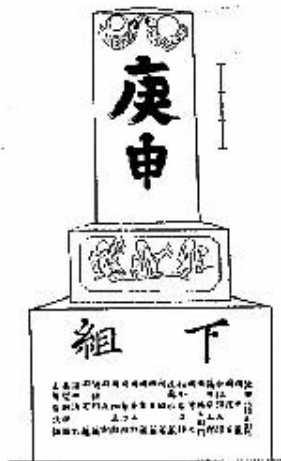
29

青面金剛像庚申塔



30

文字庚申塔



31

文字庚申塔



32

文字庚申塔



33

文字庚申塔



# 大林

猿田彦文字庚申塔



2

猿田彦文字庚申塔



3

天満宮文字塔



4. 文字庚申塔



5. 文字庚申塔



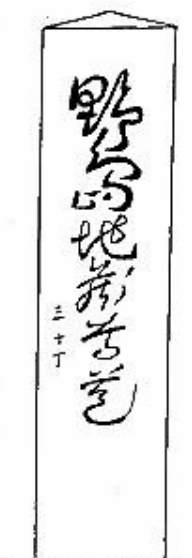
6. 青面金剛像庚申塔



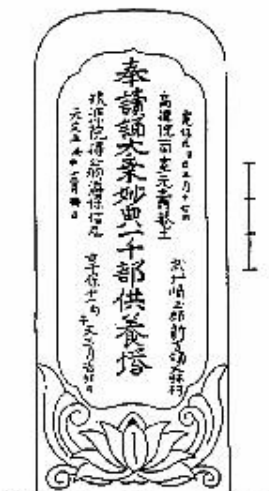
7. 金毘羅權現文字塔



8. 道標石塔



9. 大乘妙典供養塔



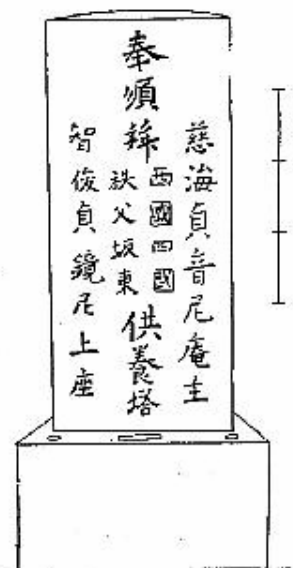
10. 法華塔



11. 百八十八箇所巡拜塔



12. 百八十八箇所巡拜塔



# 大房

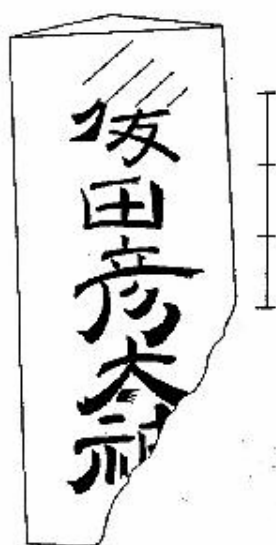
1. 大房 道標付き文字庚申塔



2. 大房 光明真言曼陀羅付き墓塔



3. 大房 猿田彦文字庚申塔



4. 大房 榑宮文字塔  
おうちのみや



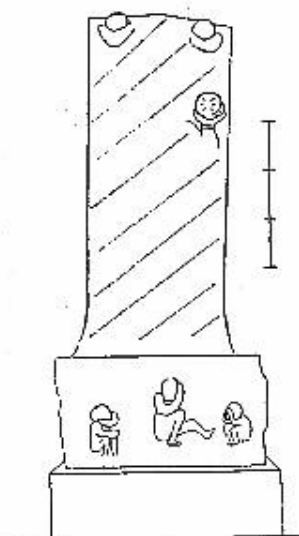
5. 大房 猿田彦文字庚申塔



6. 大房 青面金剛像庚申塔



7. 大房 青面金剛像庚申塔



8. 大房 猿田彦庚申塔



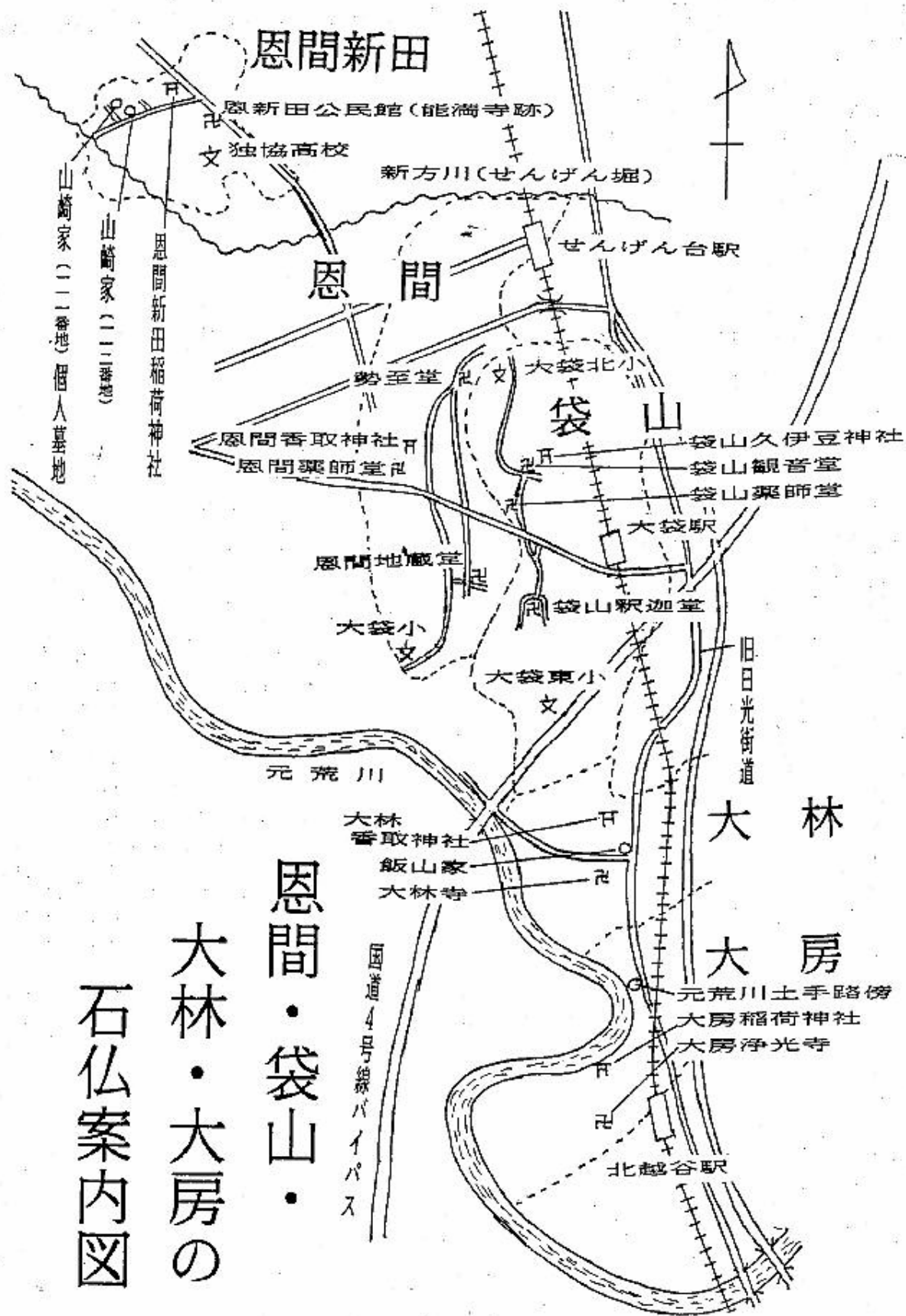
9. 大房 光明真言曼陀羅付き墓塔





三野宮・大道・大竹の石仏案内図





恩間新田

恩新田公民館(能満寺跡)

独協高校

新方川(せんげん堀)

せんげん台駅

恩間

勢至堂

大袋北小

袋山

袋山久伊豆神社

袋山観音堂

袋山薬師堂

恩間香取神社

恩間薬師堂

大袋駅

恩間地藏堂

袋山釈迦堂

大袋小

大袋東小

旧日光街道

元荒川

大林

香取神社

飯山家

大林寺

大林

大房

元荒川土手路傍

大房稲荷神社

大房浄光寺

北越谷駅

恩間・袋山・

大林・大房の

石仏案内図

国道4号線バイパス

変革期に生き

越谷ではじめてキリスト教をひろめた

## 吉田兼三郎翁とその時代

高橋 清

一 吉田兼三郎について

越巻村字丸の内一番地（現新川町一丁目五九番地）は部落の南端、寒村に住んでいた農民吉田兼三郎は、父恒三郎の長男として弘化三年（一八四五）に生まれた。

生家は綾瀬川左岸・曲流点の自然堤防の微高地に位置した。すぐ前を流れる綾瀬川は、当時、舟運の要路であった。

余談であるが、新川町一丁目の本家筋は、綾瀬川の自然堤防上にあり、新川用水路筋はみな分家である。

したがって吉田家も古い系譜の方ではなからうか。

綾瀬川の舟運河岸は蒲生・戸塚・大門・戸井・妙見・箕子とされている。これらの河岸を往来する船頭たちは、江戸方面の情報や岩槻城方面の情報はいち早く知っていた。

吉田は船頭たちの話を聞く機会に恵まれていたであろうと思われる。

往還といわれた岩槻・蒲生線の街道より吉田家は五百mほど離れていたの、この道の通行人から直接の話（情報）は入りにくい。

吉田家は「渡し場」といわれていた綾瀬川の渡りで、対岸は

戸塚村字久左衛門新田中の島（現東川口）である。歩行者の渡しであるが、自転車普及する前は重要なものであった。

戸塚・安行・鳩谷・川口・江戸方面へ、その反対は越谷・大沢・野田方面へ出る近道であった。

吉田はこの渡しを利用する人たちからいろいろな話を聞いたであろうと想像できる。

吉田翁没してすでに六十年にならんとしている。

今や地元でも吉田を知っている人は稀で、その面影はうすれて語る人もない。少ない口伝を聞き「越谷教会七十年史抜粋」を経とし、吉田翁の足跡とその時代を緯として記してみる。

徳川慶喜が大政を朝廷に奉還し、討幕軍が江戸城に入城した。明治と改元、御一新と庶民は喜び、農民たちは「世直し」を期待した。その期待が討幕軍を有利にさせたといわれている。

明治二年九月、高札をもってキリスト教は禁教とされた。その高札とは次のようなものだ。

### 定 第三札

一切支丹宗門の儀はこれまでの御制禁の通りかたく相守るべき事。

一 邪宗門の儀はかたく禁止の事。

太政官

右の通り仰せ出され候間かたく相守るべき者也

明治二巳年（一八六九）九月

浦和県

キリスト教禁止の高札は、明治六年、太政官布告でようやく撤廃された。それから十一年後の明治十七年に、吉田は入信し

活動した。越谷では初めてキリスト教徒となった人である。

明治政府は維新後、神仏分離令、廃仏毀釈、大教宣布（神道国教化政策）、廃藩置県、断髮廃刀令、土地所有平民に許可、学制令、太陽暦の採用、戸籍制度、皇族・華族・士族・平民の四族身分呼称、土地永代売買の自由、地租改正、徴兵令の発布、僧侶の肉食と妻帯の許可などつぎつぎと改革をだした。

この時代、日米通商条約による貿易により、生糸の輸出は盛んになり、米の消費は高まり、米価も高くなる。

越谷周辺も金まわりはよくなった。反面、博打が流行した。博打で身代を傾けた人もあったという。

明治十年、西南戦争。二年後、宣教師グリーンが来日した。

グリーンが来日した。この年、吉田の長男菊太郎は十二歳でグリーンよりキリスト教の洗礼を受けた（七十年史より）。

菊太郎は志を立て、仙台のミッションスクール東北学院中学部に入学した。

明治十七年六月十五日、吉田宅で兼三郎三十八歳のときに中村清蔵・中野貞助・須田太郎兵衛と四人が洗礼をうけ入信した。これが越谷におけるキリスト教のはじまりとされている。

以上のような経過をみると、吉田は以前より宣教師らと接点があったように思われる。

市史（二）の記事によると、ある日、吉田が荷車に米を積んで鳩ヶ谷に売りに行った。そのとき、路傍で説法をしていた宣教師モール（ムーアともいった）の話聞き、いたく感動した。難解な仏教のお経よりもわかり易い話だった。

つね日頃、考えていた戒名のことだ。死んでも戒名により格付けされることは不可解であった。

「宣教師モール博士」



キリスト教は平等であると感じた。来日以来、グリーンとモールは協力して伝道にはげんだ。

これには聖書販売人・正木定安と農民吉田兼三郎の計画があったといわれている。グリーンとモールは、吉田

家を会場として演説会を開いた（明治十七年六月）。

土地の農民たちは煙草をすいながら、キリスト教の話を興味ぶかく聞いていたそうだ。

そのときの話の要旨は「将来に対する不安を除き、希望をもって生活することを信条とする」だったという。

当時の世相は、明治十三年（一八八〇）、大隈重信主導財政から松方正義主導型に転換しはじめる。大蔵卿に就任した松方正義のデフレ政策は、明治十四年からきびしくなった。

西南戦争で増発した不換紙幣償却のため増税政策となった。地租をはじめ諸税はすべて倍増とした。のちにいう松方デフレ

である。緊縮政策によって農村は深刻な不況に見舞われ、手元につまった農民は借金できりぬけるほかなかった。

しかし、返す金がないため利子がかさみ、ますます貧乏になるばかりであった。

金納になった地租を納めるため、農地や家財を担保にして金貸しより借金して納税したり生活費とした。いままでは農地を担保にいても、金ができて返済すれば請けもどしができる慣習であった。したがって期限もはっきりしていなかった。

それが質入れ、書きいれ期間は三ヶ年に限定と新法律はきめた。たまたま更新期が不景気とか不作で、抵当土地を請けもどす資力がなげるときは、農地は抵当流れする。公売処分された。

そのよう土地の移動ははげしかった。中小農民の多くが没落した。一方、借金のかたに手放された農地を集める寄生地主が成立した。

明治十七年前後の世間は重苦しい不景気のどん底にあった。越巻村（新川町）丸の内備社年番帳には、不景気のため四ヶ年、祭礼をやすむと書かれている。

まもなく、農民騒擾事件が起きる。群馬事件・加波山事件・秩父事件・名古屋事件・飯田事件など、自由党左派系党員が指導した激化諸事件が続発した。

吉田は人心荒廃の世相でなんとか農民が気風を正し、希望のもてる暮らしにしたいと伝道にはげんだ。

明治十八年（一八八五）、太政官制が廃止され、新しく内閣制がはじまった。初代総理大臣に伊藤博文が就任した。

長州の足軽の子が政府最高の地位にのぼったというので、今太閤だと評判になった。豊臣秀吉の再来だというわけである。

明治二十二年（一八八九）十一月三日、主任者・正木定安師と共にグリングとモールは越谷町に進出し、越谷教会を創設する。吉田は私財をなげうってこれに参画した。

吉田は自宅を開放して、村の子供たちに日曜学校を開設した。婦人には菓子を与えた。しかしその後、地元からの入信者はでなかつた。

明治二十三年（一八九〇）、八月二十一日から二十三日にかけ大洪水が発生した。綾瀬川堤防防護には合併なった出羽村全体の応援をうけている。そのときの地元農民連名簿には吉田の名は載っている。時に四十四歳。

その二年後、明治二十五年十月、氏神稲荷神社の社殿建築寄付者名簿には吉田の名はない。宗教が異なるためであろう。以後、部落のつき合いにはいっさい立ち寄りなくなっていくのである。

明治の後期より大正時代、昭和の初めまで、吉田は奥さんと自給自足の生活となる。

昭和六年ころ、夫人は死去、以後、女中の「おさき」と二人で暮らす。祈りの生活だったようだ。

長男菊太郎は明治四十年ころ、アメリカ留学より帰国、福島県の平・郡山・三春と各教会の牧師として活躍した。

昭和十六年三月八日、九十五歳で生家で逝去された。おさきさんは大宮在の生家に帰ったという話だ。

その後、吉田家は宅地・家とも人手にわたって、そのころの面影はない。吉田家の子孫は転退して不明である。

二、吉田菊太郎について

明治 四年（一八七一）越巻村字丸の内吉田兼三郎の長男として生まれる。



明治十六年（一八八三）十二歳のとき、グリーング宜教師によ

りキリスト教の洗礼をうける。志を立て仙台のミ  
ッションスクール東北学院の中学に入る。

高等学部を経て神学部に入る。

明治三二年（一八九九）明治三十年、東北学院卒業と同時に

アメリカ・ペンシルバニア州・マーシャルカレッ  
ジにて神学を五年間、専攻する。姉操、弟孝次、

（のちにアメリカに帰化）妹てる、妹慰得たちも  
アメリカに留学する。

明治四十年（一九〇七）帰国後、東北の平・郡山・三春、埼

玉の大宮教会の牧師を歴任。

昭和十七年（一九四二）生まれ故郷の越谷出羽村字越巻に隠

退する。のちに越谷町に居を移し、越谷教会のた  
めに尽くされた。

昭和三二年（一九五七）十月、享年八十七歳で逝去。越谷教

会長尾丁郎牧師により越谷教会にて葬儀執行さる。

吉田菊太郎氏についての資料は中村義治氏より提供された。

### 参考文献

越谷市史（二）

越谷市役所

江戸期から明治時代まで（教養の日本史「4」）

社会思想社

越谷の歴史物語（第三集）

越谷市役所

越谷教会七十年史抜粋「グリーングとモール」

渡辺 総一

読める年表（7）明治大正篇

自由国民社

## 越谷寺院思考（一）

高橋 正輝

越谷の寺院は現在四十ヶ寺の多くを数える。このうち近年に  
なつて新設、移転入された寺院をのぞくと、浄土宗、新義真言  
宗が大半を占める。ほかに曹洞宗が三ヶ寺で、近在に例をみな  
い分布を示している。

わが国最大の信徒、寺院をもつ農民仏教の浄土真宗、江戸近在  
におおくの信徒がいた日蓮宗は、越谷のまわりに周辺に布教地  
があつたのに寺院はない。

越谷地方は天領や旗本私領がおおく、水田農業のため農民の生  
活が豊かであつたと思われる。現世利益を説く在家信仰より、  
米世浄土を説く寺院回向が望まれていたのであろう。

寺院と民衆との日常生活と心の結びつきについて調べてみた。

### 一 寺院の由緒

●修験宗 戦後独立し、宗教法人となる。

○三明院 本尊不動明王、正休山明王寺、七左町五の一八六。

開山は秀貞法印、安政七年（一八六〇）創立。本尊不動明王  
は千葉成田山新勝寺より勧請。近在の信仰をあつめていた。

明治初期の宗教政策により廃宗となる。戦後、復活した。

●浄土宗 総本山京都知恩院。宗祖法然上人。

(関東本山、芝、増上寺)

○安国寺 本尊阿弥陀如来、大竜山東光院、大泊九一〇。

開山は専攻上人、寛正五年(一四六四)寂。

寺伝では康安元年(一三六一)、紀伊熊野路大泊安国寺の住職専攻上人が当地を開拓。間久里にあった熊谷蓮生坊(直実公)の草庵を移し、寺を建立。旧地をしのんで村を大泊村、寺を安国寺としたという。

康安元年から寛正五年までは、一〇四年に及ぶので年号の誤りではないのか、と風土記稿に記されている。

一説には足利尊氏が、六十六ヶ国に安国寺を創設した(一三三八(四二))とあるので、当寺もその一寺ではないかと伝えられている。いずれも確証はない。

寺宝は蓮生坊持仏阿弥陀如来、人丸木像(紀貫之作)円空仏、山岡鉄舟筆の掛軸や寺領朱印状などある。

○西教院 本尊阿弥陀如来、日照山光明寺、西新井四七八。

開山は聖蓮社法誉上人、元龜三年(一五七三)寂と伝えられ詳細不明。墓地内に残る名主齋藤家に口伝されていた、岩付城落城時(天正十八年、一五九〇)の悲しい物語がある。

○浄音寺 本尊阿弥陀如来、解脱山保鏡院、大成町六ノ四二七。

開山は解脱阿存保。文禄二年(一五九四)十月寂。

開基の宇田長左衛門は、忍藩柿木領八ヶ村の割元名主で、開山阿存保和尚は一族という。古くは西方山蓮華院浄香寺と称していた。天正十九年(一五九一)御朱印十石が与えられた。

明治初期、火災となり寺伝、寺宝、古文書を焼失した。

○清浄院 本尊阿弥陀如来、栄広山浄土寺、大松六〇。

開山は賢真(堅真)和尚。応永年間(一三九四〜一四二七)

建立。応永二十年(一四一三)、新方地頭・平頼基が賢真に帰依し、一山仏閣を寄進した記録がある。

中興開山として文誉上人(高賢)の八条氏の争いを記した「栄広山中緒著聞書」永正十二年(一五一五)、嘉永四年(一八五一)写本の古文書が有名である。

境内にある開山塚に嘉禄元年(一二二五)の古碑があったと風土記稿に記されている。昭和四十九年の発掘では発見されていない。寺宝は閻魔大王、十一面観音、板碑二十基。

○聖徳寺 本尊阿弥陀如来、太子山、北川崎十八。

開山は源翁(源応)上人。慶長二年(一五九七)寂。

天正十八年(一五九〇)清浄院末となった。境内にある岩塩地蔵は梅雨時に塩を噴くといわれ、「いぼ」がとれるので「いぼ地蔵」として信仰が厚かった。寺宝には聖徳太子像がある。

○無量院 本尊阿弥陀如来、仏説山、船渡一八〇四。

開山は三啓上人、天正二年(一五七四)寂。

以前は岩槻の浄国寺末であった。

○林西寺 本尊阿弥陀如来、白龍山月照院、平方一一四九。

開山は等海成阿和尚、年代不詳。中興開山は九世吞龍上人。上人は弘治二年(一五五六)、春日部一ノ割・井上將監の次男に生まれ、芝・増上寺普光観智国師に師事。林西寺九世住職となる。徳川家康に信任され、徳川家の先祖(新田氏)の菩提寺

太田の大光院の開山となる。貧しい子供を養育したので子育吞龍様として今日まで崇拜されている。元和九年六十八歳で遷化。

寺領二十五石の朱印状、涅槃像、古文書を寺宝としている。

○林泉寺 本尊阿弥陀如来、正林山、増林三八一八。

開山は本誓上人、長享元年（一四八七）寂。寺伝では白衣の行者が安置した観音像を奉安し（腹部に貞和二年の記銘あり）、文正元年（一四六六）正林良諦和尚（木誓）開山すとある。

本尊阿弥陀如来は恵心僧都作という。

この寺は家康公の鷹狩の御茶屋御殿として越谷御殿に移るまで再三使用された。市文化財として、家康公が馬をつないだという駒止めの槓、権現井戸跡がある。

○天嶽寺 本尊阿弥陀如来、至登山遍照院、越ヶ谷二四五九。

開山は専阿源照上人。太田道灌の伯父である。

文明十年（一四七八）、太田下野守が当寺を建立したと伝える。後北条氏は当寺に寺領寄進の黒印状を下付するとともに、出城として利用した。江戸時代には、当寺は越谷宿唯一の寺院で、越谷宿の住民となるには、天嶽寺の檀家とならなければならぬ。特権を持っていた。一説には元荒川の改修により境内地縮小の代償として与えられたとも、江戸初期、切支丹類族が迎摂院檀家として居住しているのを摘発し、邪宗取り締まりのため幕府から許されたともいう。

天保十四年（一八四三）の人別帳によると、越谷宿の戸数は五百四十二軒、住民は二千五百六十五人。

○報土院 本尊阿弥陀如来、報身山極楽寺、登戸町一〇の二八。開山は閻秀義教和尚。風土記稿では中興開山としている。

天正十年（一五八二）寂。元禄年間、火災により詳細不明。

当寺は天嶽寺の末寺で、寮であったものを寺として整えたのが義教和尚であったので、前説となった。

風土記稿では寺号を報身山報土院広西寺と記されている。

のちに京都の総本山知恩院から極楽寺を与えられ改称した。

○正光院 本尊阿弥陀如来。大念山正福寺。大間野町四の六一。

開山は浄蓮社宝誓上人。正徳年間（一七一〜一六）、川口長源寺の隠居寺として桜井弥兵衛が開基。桜井家は同地で酒造業を営み、名字帯刀の家柄。参道に同家の古墓塔群がならぶ。

●新義 真言宗 宗祖弘法大師。新義開祖覚鑿（興教大師）。

◎智山派 本山京都智積院 派祖玄右上人。

○弘福院 本尊阿弥陀如来、大沢山観音寺、北越谷一の二一。

無住の時代が長く、再三の火災により寺伝、開山年代、開山者名は不詳。寺内に島根宗弥の寄進による寛保三年（一七四三）の巨大な宝篋印塔が建っている。

○一乗院 本尊阿弥陀如来、光明山阿弥陀寺、三野宮六一八。

開山は元仁元年（一二二四）、弘範上人。源頼朝夫人政子の念持仏を本尊としたことから、阿弥陀寺と号したという。

寺伝では新田義貞寄進による仏舍利を奉安していたが、安政六年（一八五九）焼失したと伝える。中興開山は増景法印。

応永六年（一四一四）寂。一説によると、足利三代將軍義満の第三子（三ノ宮）が応永十一年（一四〇四）に没。

これをいたみ、ここに三野宮稲荷大明神として祀ったのが地名のおこりとも、寺のはじまりとも伝える（越谷市史）。

○光福寺 本尊阿弥陀如来、莫竜山、大間野町二の一九〇。

開山は善賢和尚。寛永十八年（一六四一）寂と伝えるのみで寺歴不詳。延宝や寛文年間の石碑、大間野の旧家中村家の寛永

十七年の墓があるので、同時代の創建とみられる。

○光明院 本尊薬師如来、香取山薬師寺、大沢二の十六。

開山は栄善法印、年代不明。大沢古馬宮では年代不詳。

過去帳には天文六年（一五三七）からの記載があるので、それ

以前とみられるとある。当地の鎮守香取社の別当寺であった。

○照光院 本尊阿弥陀如来、梅花山、大沢二の四。

開山開基不明。安永六年（一七七七）の創立ともいう。

墓地入り口に承応元年（一六五二）銘の六地藏がある。

大沢町の寺院として信仰されていた。

○成就院 本尊阿弥陀如来、威光山観音寺、川柳町二の一六〇。

元和年間（一六一五〜一六二三）、永誓法印の開山のほかは

不詳。

○清蔵院 本尊十一面観音、慈眼山、蒲生本町十三。

開山は祐範法印。天文三年（一五三四）寂。

明暦四年（一六五八）寂。山門の竜獅子の彫刻は、左甚五郎作

と伝えられ夜中に飛び出し田畑を荒らすので金網で囲ってある。

寺宝には不動明王絵画像がある。

○豊山派 本山大和長谷寺、派祖専誉上人。

○観照院 本尊阿弥陀如来、日映山、七左町七の二七八。

開山小池坊尊慶。越ヶ谷会田家の出身。豊山派の本山・大和

長谷寺の第五世教主となる。開基は当地の開発者会田七左衛門

政重。法名の日映観照を寺号とする。夫妻の木像が祀ってある。

○観音寺 本尊十一面観音、真大寺、大成町一の二二六二。

大聖寺末で開山寺歴不明。本尊は慈覚大師作と伝える。

○迎撰院 本尊阿弥陀如来、越ヶ谷山神宮寺、宮本町二の十四。

開山開基不明。中興開基賢栄法印。天文四年（一五三四）寂。

越谷の生んだ名僧小池坊尊慶が第七世住職として、慶長十一年

（一六〇六）〜元和六年（一六二〇）在任し中興開山となる。

本寺は古くから越ヶ谷郷の総鎮守久伊豆神社や中町の浅間社

の別当寺として越谷一の勢力を誇っていた。

江戸初期、天嶽寺との争い一件以来越谷宿の檀家をうしなった。

○玉泉院 本尊阿弥陀如来、稲荷山、南菰島二〇九。

開山の年代不詳。元禄三年（一六九〇）寂の尊線和尚が中興

開山といわれる。江戸期より寺子屋があり、明治四十三年まで

村の学校として役割を果たした珍しい寺である。

○金剛寺 本尊聖観音、五鉦山、東町三の三五四。

開山不詳。中興開山良幸法印。天文十八年（一五四九）、

風土記稿では稲荷山観音院慈願寺と記されている。明治初期、

四条の妙音寺と合併、現在の寺号となる。寺宝として聖徳太子

の胎内仏として頭像がある。江戸期の古文書が保存されている。

○西円寺 本尊十一面観音、瑠璃山、花田一一五。

開山蓮花房長音。享保七年（一七二二）寂と伝わる。

○照蓮院 本尊大日如来、弥勒菩薩、慈氏山満徳寺、

瓦曾根一の五の四。

開山は不明。天正十年（一五八四）、賢秀法印により再建。

境内の武田千徳丸の供養墓塔、秋山家の墓石群が市文化財。

御朱印寺領五石（天正十九年）、末寺十二ヶ寺の大寺であった。

○浄光寺 本尊聖観世音、熊野山観音院、北越谷四の八の五。

開山は寺伝によれば正徳四年、秀恩法印とあるが文書焼失の

ため不詳。天正十一年（一五八三）の過去帳がある。

大房の薬師堂を管理し寺領五石、寺宝として五智如来、不動明王像がある。改築のとき古銭が発掘された。

明治初期には梅の名所で、皇族、高官、文人が訪れた。

○智泉院 本尊大日如来、無量山観音寺、川柳町五の二八二。

開基は天正年間（一五七三〜九二）中村馬氏助、開山は不明。本尊大日如来は鑑定の結果、室町時代の作といわれる。

○地藏院 本尊地藏菩薩、摩尼山、蒲生本町一の十。

土地の名主・中野氏の寄進により中興開山有敬法印建立。

享保十年（一七二五）寂と風土記稿にある。当寺の地藏尊は背中合わせの尊像で県内でも珍しい。中野家の六角宝塔がある。

○東福寺 本尊虚空蔵菩薩、小林山虚空院、東越谷一の十三。

寺伝によれば開山盛尊和尚、文永年間（一二六〇〜七五）寂。康暦二年（一三八〇）、須賀若狭守が南北朝の戦乱をさけて薬師如来を奉安し、眼病に霊験ありという。

中興開山として快春法印延宝七年（一六七九）寂と伝える。

○徳蔵寺 本尊十一面観音、青竜山、大吉一〇六四。

開山は育有法印。年代不明。仏像は高さ二尺余、恵心作。

○宝生院 本尊大日如来、清竜山不動院、増林一六八〇。

開山賢栄法印。天文年間（一五三二〜五五）、清竜山東照寺と称した。江戸初期、東照宮と同号のため東正寺と改めた。

明治四十四年、宝蔵院と合併した。二十一仏板碑は市文化財。

○大聖寺 本尊不動明王、真大寺不動院、相模町六の四四三。

天平勝宝二年（七五〇）、越谷最古の創建と伝えられる。

開山は不動坊、中興開山定伝法印天正十二年（一五八四）寂。本尊不動明王は良弁僧正作、相模国大山寺と同じ木と伝わる。

徳川家康は関東入国以来、定伝法印の高徳に帰依し、寺領六十石の御朱印を下賜、その時、不動坊不動院の寺号を大聖寺と改めさせた。明治期に大火災のため広大な建物を焼失、以後、再建できず今日にいたる。

唯一残る仁王門は寛保四年（一七四四）、建造とされていた。調査の結果、正徳五年（一七一五）と判明した。

寺宝には御座の松（良弁僧正が腰を下ろした）、家康公奉納の大刀、宿泊使用の寝具などの文化財がおおい。

仁王門の扁額は松平楽翁筆である。

○光明院 本尊阿弥陀如来、遍照山、蒲生本町二の一の三〇

開山は栄善法印。弘治二年（一五五六）建立。寺歴不明。

寺宝は大祖大師画、十二天画、釈迦画像、その他がある。

●曹洞宗 総本山越前永平寺、鶴見総持寺 宗祖道元。

○勝林寺 本尊十一面観音、法恩山、増林二六八七。

開山は黙堂闇契禪師。天文七年（一五三八）寂。天文元年の創建ともいわれる。寺伝によれば「創立以来の事」という寛永

元年の古文書に万寿二年（一〇二五）、源勝が開山とあり、さらに岩付波江氏が戦さに敗れ、増林に住み、須賀小次郎と改

称し、戦死した人々のために当寺を天文三年（一五三四）、再建したと記されている。

○浄山寺 本尊延命地藏尊、野島山、野島三二。

開山は慈覚大師、貞観二年（八六〇）の建立。

本尊は慈覚大師作と伝える。後三年の役のとき、火災にあい、本堂を焼失した。本尊延命地藏は腰の下だけがこげていた。

天正までは天台宗慈福寺と号していた。

放鷹に訪れた家康公が、寺内の山林の静けさに浄土と感じ、上意により鳩ヶ谷の法証寺住職震竜和尚を入寺させ、浄山寺と改めさせた。寺領三十石を与えたが和尚は過大なりとして受納せず、改めて懐紙に三石と書き改めて奉納したといわれる。

現在、鼻紙朱印状として寺宝となっている。

寺宝の大罽口は有名で、あまりにも大きすぎて取り外すことができず、今次大戦の供出を免れた。

○大林寺 本尊白衣観世音、竜華山、大林二九。

五箇村の東昌寺住職大震和尚が、江戸との往復の宿泊所として大林庵を開山した。隠居後、寺格を整え、在住八十一歳で寂。以後、尼寺となる。大震和尚は大久保彦左衛門の末孫である。

●廃寺と転入新寺

○慈願寺 浄土宗、福寿山、大泊一〇四。

開山慈和和尚、明徳三年（一三九一）寂。観音堂の千手観音は行基作といわれる。

○西桑寺 浄土宗、聖徳山、平方四六〇。

開山岌誉和尚。寂年不明。中興誓誉和尚、万治二年（一六五七）寂のほかは不明。

○浄閑寺 浄土宗、小池山、大杉七五。

開山竜文和尚。文禄二年（一五九三）寂。清浄院末。

○崇源寺 浄土宗、明星山、平方一八九。

開山不明。中興岌誉和尚。元和二年（一六一六）寂。林西寺末。その他不明。

○東陽（養）寺 真言宗、太子山竜蔵院、大竹三四。開山不明。

○花（華）光院 真言宗、山王山、向畑八八五。開山不明。

○観照寺 真言宗、稲荷山、弥十郎七六五。開山不明。

○持福院 真言宗、光照山、袋山三八二。開山秀思、正徳年寂。

○正福院 真言宗、稲荷山、中島一〇六。開山不明。

○法立寺 日蓮宗、妙富山、増林。開山不明、明治初期廃寺。

○能持寺 日蓮正宗、昭和四三年、創価学会の寄進により蒲生に新設。その後、移転。

○法照寺 真宗西本願寺派、弥十郎三五〇。東京より転入。

○光善寺 真宗西本願寺派、三野宮一三四〇。東京より転入。

○法光寺 真宗西本願寺派、三野宮一三三六。東京より転入。

謎の人、東洲斎写楽ではないかという阿波藩士、斎藤十郎兵衛の過去帳が発見され、研究家の注目を集めている。

紙数の関係で、（一）法流と本末、（二）寺と住民生活は次回としたい。

参考文献 越谷市史（一）

越谷市役所

ふるさと散歩（上・下）

越谷市役所

宗教名鑑

埼玉新聞社

## 安国寺の古文書

鈴木 秀俊

大泊の浄土宗大龍山安国寺には、熊谷蓮生法師の守仏と伝え  
る本尊阿弥陀如来立像や円空仏、観智国師書状（以上、市指定  
文化財）、將軍家より賜った寺領四石の朱印状、柿本人麿木像、  
山岡鉄舟筆軸一幅、それにこの古文書「諸事記録」が所蔵され  
ている。

「諸事記録」は増上寺（本山）直末十二箇寺の月番と本山役  
者（役目のある人）によって書かれた明和二（一七六五）年か  
ら安永、天明年間を通して寛政三（一七九一）年に至る二七年  
間の記録である。

明和から天明は、浅間山の噴火、奥州の飢饉疫病の流行、関  
東の出水、京都の火災などの災害が続いた時代である。

この「諸事記録」の中に、本山から末寺宛の「江戸打ちこわ  
し騒動」「寛政年号改元」「本所回向院施餓鬼修行」に関する  
触れ書きなどが含まれている。

天明六（一七八六）年七月二十一日に「近年、金銀融通宜し  
からず、諸家差支え云々」ではじまる触れ書きが出され、翌七  
年五月十八日には、江戸で米屋などの打ちこわし騒動が起きた。  
この時、伊奈半左衛門は騒動を鎮めるために働いた、と記され  
ている。

十代將軍家治は打ちこわし前年の天明六年九月八日に亡くな  
り、十月四日に東叡山に御葬送する。天明七年四月十五日に家  
斉が十一代將軍になる。翌月に江戸の打ちこわしが起こるので  
ある。

天明八年十二月に寺社奉行の仰せにより、諸国の朱印寺社に  
五穀豊熟・万民安穩の祈禱や、浄土宗五寺に焼亡・溺死・餓死  
・疫死などの者のために、施餓鬼修行を仰せ付ける。

同九年正月二五日に寛政と改元されたが、二月三日に寛政年号  
改元が仰せ出される。また二月九日の触れ書きによると、来る  
二月十二日に本所の回向院で施餓鬼修行が行われるという。

### 江戸打ちこわし騒動に関する触書

「諸事記録」四三ページより四四ページ 読み下し  
同年（天明七年）五月十八日当りより昼夜共、町中米屋共打  
ちこわし申し候、以ての外騒々敷、昼夜安心これ無き事、江  
戸中端々迄残る所無く米屋の分、其の外にも平日憎ませ候者  
ども打ちこわし、又、有徳の家等、これに依り商一統相休み、  
別て米穀売買これ無き寺社は、甚だ難渋に付き本山へ米拝借  
相願ひ候事、公儀より町方御救い米出し候事、回文  
他出召仕いに至る無用の事、申し来る 月番 光岳寺記

同年四月十五日、將軍宣下これ有り候事（十一代家斉）  
一五月前書きの通りに困窮に付、月番寄合暫く相休み候事

一世上この節、米穀払底にて諸人困窮に及ぶに付き、公儀にても色々御世話もこれ有り候え共、この節町方騒が敷候に付き、町人共恐候哉、米穀隠し置候者も、これ有る趣、風聞もこれ有り、人寄り次第に米穀差支え申すべくと見込み、飯米の手当の外に余分に貯え置き候も、これ有る由に付き、この節、右躰の儀これ有り候ては、いよいよ世上一統難儀の事に候間、武家、寺社、町方共一統救い合い候心得にて、その家々の飯米かなり間に合い候はば、余分米は早々米屋共へ売り払い候様致すべく候、右、本文の通り、世上難儀の旨を一統に、得と相弁え助け合い候様、心得べく候、且又、武家にては、主人も存ぜざる家来の心得違ひ等にて、町方より米穀預かり候者も、これ有る趣、風聞もこれ有り候間、是等は猶以て町方へ差し戻し候様致すべく候、右の趣、もし外より相知れ候はば、主人は勿論、役人迄も急度越度たるべく候、尤も寺社、町方にては前文の趣を相聞き、米穀隠し置き風聞の者これ有るに於いては、役の者指し遣わし、たとへ武家方預かり米と申し候共、糾の上、品により御取上に相成り、急度御咎仰せ付けらるべく候

右の通り相触れらるべく候  
一増上寺

御霊屋料、その外、方丈領、近郷村々並びに一宗寺院共、この節昼夜限らず狼藉者押し来たり騒が敷候趣申し立て候、これに依り、右村々へ堀帯刀組の者相廻り狼藉のもの、これ有り候は召捕らせ候筈に候、伊奈半左衛門御代官所入り会の村々は勿論、最寄りの分は半左衛門家来を相廻し候、是又狼藉

者これ有らば、召捕らせ候積もり候、尤も御府内一宗寺院、その外寺社奉行支配の分は常々見廻りの者差出し候儀に付き、この節、別て繁々見廻らせ狼藉ものこれ有る節は召捕らせ申すべし、もし見廻りの者参り合わさざる節、狼藉ものこれ有り候は、早々寺社奉行へ訴え出候様申し渡し置、右の趣、増上寺役者その外へも申し聞置き候様、致されべく候、且、帯刀組・半左衛門家来相廻り候場所、右兩人申し談すべく候  
未 六月五日 月番 龍閑寺

この節、米穀払底にて江戸町の儀、飢渴に及び難儀の趣に付き、右御救い方取り計らいの儀、伊奈半左衛門へ仰せ付けられ候、右御用中、在町寺社門前の者呼び出し吟味筋等の儀、其の時、半左衛門より懸合いに及ばず取り計らいの節の儀候間、此の段、相心得らるべく候  
未 六月十一日 月番 龍閑寺

徳川民部殿次男松平慶之丞殿、田安家相統仰せ出され徳川と称えられ、田安領十萬石、其の俣遣わされ候段、仰せ出られ候、此の段向々へ達せらるべく候

未 六月 月番 龍閑寺

浄土宗五寺と回向院施餓鬼供養や寛政年号

改元に関する触書

「諸事記録」五二ページ四行目より五五ページ

諸国御朱印の寺社において五穀豊熟、万民安穩の儀、一統に祈



禱遂ぐべき旨仰せ出され候間、右の趣、申し渡されべく候、尤も守り札・護符様の品施行候儀も勝手次第致すべく候、

一、先年浅間山焼、奥羽飢饉疫癘、且つ関東出水、京都火災等にて死亡致し候も少なからざる旨、相聞き候、付けたり

姫君様御事、今日より御臺様と称え奉るべき旨、仰せ出され候、

二月四日

別紙御書き付けの趣、其の意を得候、以上

二月六日

本山

役者

末山中

浄土宗京都智恩院、同下州新田大光院、同奥州岩城専称寺、同羽州庄内大督寺、同葛西松川仲臺寺、同御府内本所回向院、右、寺院に於いて今度、施餓鬼修行致すべき旨、仰せ付けられ候、右修行料として銀拾枚づつ下され候間、其の段申し渡されべく候、

十二月

右御書き付けの趣、厚き思し召しを以て仰せ出され候儀に候間、有り難く敬事いたし銘々御朱印頂戴の身分にては、冥加の為に、条丹精抽きでるべきは勿論の事に候、守り札並びに護符様の品施し候は、在方の儀にては、向寄々へ百姓などへ守り札等施行致すべくは勝手次第との事に候、尤も小朱印の寺社等札配り候は、難儀の事にもこれ有るべく間、仰せ付けられ候には助けこれ無く、若し守り札配り度存じ候者も候はば、心ざし次第たるべく候、然れども当地などには、右躰の儀いたし候筋にはこれ無く候条、心得違ひこれ無き様、申し達せられべく候、

十二月日

別紙御書き付け両通、旧臘晦日寺社奉行に於いて、松平紀伊守殿仰せ渡され候間、御書面の通り諸寺院共に有り難く敬達これ有るべく候、

一五穀豊熟、万民安穩祈禱の儀、

御朱印頂戴の寺院、右祈禱修行相済み候上、御当山迄届け出候儀、有無共勝手次第の事に候え共、若し届けこれ有り候分は、御当山より御奉行所へ其の段申し上げべく間、其の旨相心得らるべく候、

一御朱印これ無き寺院にても国恩の為、五穀豊熟、万民安穩の祈禱修行これ有るべく趣、尤もこの分は修行相済み候共、御当山まで届け出候には及ばず候、

一焼亡・溺死・疫死等者のため施餓鬼修行の儀、総本山並びに五箇寺へ仰せ付けられ、御宗門一統有り難く存じ奉り候、これに依り其の余諸寺院にても、右の訳申し置き回向これ有るべく候、

一右祈禱並びに回向等の儀に付き、施入勸物等の儀堅くこれ無く、如法修行これ有るべく候、

一国家安全の祈禱、且つ法界回向は、我が門の遍く勿論の儀に候へば、諸寺院に於いて平日共如法修行これ有るべく候、右の通り御心得、御支配へも御触これ有るべく候、

以上 正月二十三日

増上寺 役者

別紙御書き付け両通、並びに縁山御添え書きの趣、其の意を得られ祈禱修行並びに諸霊回向、各寺に於いても、これ有るべく候、以上

正月二十四日

本山 役者

末山中

寛政

右の通り年号改元、去る三日仰せ出され候旨、  
板倉左近将監殿に於いて仰せ渡され候間、  
其の意得らるべく候

以上

二月六日

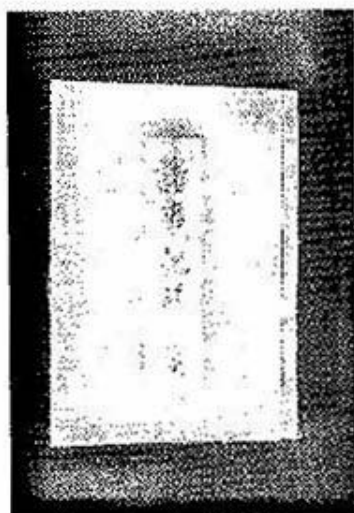
本山 役者

末山中

先刻窺い出られ候、この度回向院施餓鬼修行隋喜の為、出勤こ  
れ有り度段、此の儀出る出ざる共彼是は指図致し難く候間、勝  
手志し次第に致されべく候、一山主御出の儀は、来る十二日朝  
飯後、御出成られ候間、其の意得らるべく候、此の段窺いに依  
り相達し申すべく候、以上

本山 役者

二月九日



諸事記録



安国寺(大泊)

# 明治二年（一八六九）蒲生村・学校規則

西田 茂

教化は方今の切務にして毎々厚き御趣意も有之逼く郷学の法を設け教諭の道を津くし不申候てハ不相成候得共第一庶民の上ミに立ち候諸役人自から勉め自から責めて怠りなく庶民に先立仁厚く節義の風起し様あらまほしく当分仮に学則立てつる左のことし猶民情を熟察し漸次郷学実地の良法を盛にすべき奈利

教化は方今の切務にして毎々厚き御趣意も有之逼く郷学の法を設け教諭の道を津くし不申候てハ不相成候得共第一庶民の上ミに立ち候諸役人自から勉め自から責めて怠りなく庶民に先立仁厚く節義の風起し様あらまほしく当分仮に学則立てつる左のことし猶民情を熟察し漸次郷学実地の良法を盛にすべき奈利

一六日 定休  
四日十九日 昼後休  
二七日 小学講釈  
諸役人出席下民といへども聚り聴を許るす  
但朝素読質問勝手次第  
三八日 未ノ刻ヨリ  
牧民忠告心鑑  
一 庶民有志之  
但朝前同断  
四九日 未ノ刻ヨリ  
孟子輪講  
一 庶民有志之  
但朝前同断  
四九日 未ノ刻ヨリ  
孟子輪講  
一 庶民有志之  
但朝前同断  
四九日 未ノ刻ヨリ  
孟子輪講

一六日 定休  
四日十九日 昼後休  
二七日 小学講釈  
諸役人出席下民といへども聚り聴を許るす  
但朝素読質問勝手次第  
三八日 未ノ刻ヨリ  
牧民忠告心鑑  
一 庶民有志之  
但朝前同断  
四九日 未ノ刻ヨリ  
孟子輪講  
一 庶民有志之  
但朝前同断  
四九日 未ノ刻ヨリ  
孟子輪講

一六日 定休  
四日十九日 昼後休  
二七日 小学講釈  
諸役人出席下民といへども聚り聴を許るす  
但朝素読質問勝手次第  
三八日 未ノ刻ヨリ  
牧民忠告心鑑  
一 庶民有志之  
但朝前同断  
四九日 未ノ刻ヨリ  
孟子輪講  
一 庶民有志之  
但朝前同断  
四九日 未ノ刻ヨリ  
孟子輪講

教育は今日の急務とたびたび厚いご意見もあり、ひろく地方学校の規則をつくり教育の道をたてなければならぬ。庶民の上に立つ諸役人自ら勉め、自ら怠りなく庶民に先立っていつくしみ深く正しい道を進むようにすべきである。当分、仮りに学則をつくり、左のようにする。なお、人民の実情を見きわめ、だんだんと地方の学校をさかんにしたい。

小菅県の学校は、当分、小菅村正学寺に定める。  
一六日 定休  
四日十九日 会議につき 昼後休  
二七日 小学講釈  
諸役人出席、庶民が集まり聞くことを許す。  
また朝の素読、質問は自由。  
一三 未ノ刻ヨリ  
牧民忠告心鑑  
その他有志

庶民の諸役人必ず出席のこと  
一 庶民有志之  
但し、朝前同断  
四九日 未ノ刻ヨリ  
孟子輪講

庶民の諸役人必ず出席のこと  
一 庶民有志之  
但し、朝前同断  
四九日 未ノ刻ヨリ  
孟子輪講

庶民の諸役人必ず出席のこと  
一 庶民有志之  
但し、朝前同断  
四九日 未ノ刻ヨリ  
孟子輪講

二  
 御用、村用などにて小菅表江出会セ居候村役人小前ども必ず出席すへし若し怠たり候ものあれば郷宿向き取調之上正覚寺江止宿いたさせ教諭を加ふ其他四方之民人老幼とも出席聴問す事を欲す知事判事之内取締として時々出席すへし其他之諸吏聴問勝手たるべし  
 但朝前同断

右七月より開講之積り今般仮学校取建別紙之通り規則相立候条得其意此廻伏早々順違留り村より可相返もの也  
 小菅県  
 已六月廿五日 御役所

小菅県 御役所  
 先般相達候学則之内  
 五ノ日 小学講話  
 十ノ日 同

右の月ハ廿九日  
 右之通来ル十月ヨリ相改候条最寄村々兼て相達候意趣基ヲ役人共は勿論小前末々迄出席可致事

小学六巻  
 宋の朱熹の弟子劉子澄著  
 修身、日常道德について著述

御用、村用などで来庁の村役人および百姓は必ず出席すること。  
 もし出席しない者は取り調べの上正覚寺へ宿泊し受講させる。その他、多くの人民老幼年も出席し講義をきくことを願う。知事、判事のうち、取締として時々出席すること。その他諸吏員が講義を聞くのは自由但し、朝前同断  
 已六月

来る七月より開講する。  
 この度、仮学校として別紙の通り規則をつくたので、心得ておくこと。この廻状を村々へ早くまわして最後の村より返すこと。  
 已六月廿五日 御役所

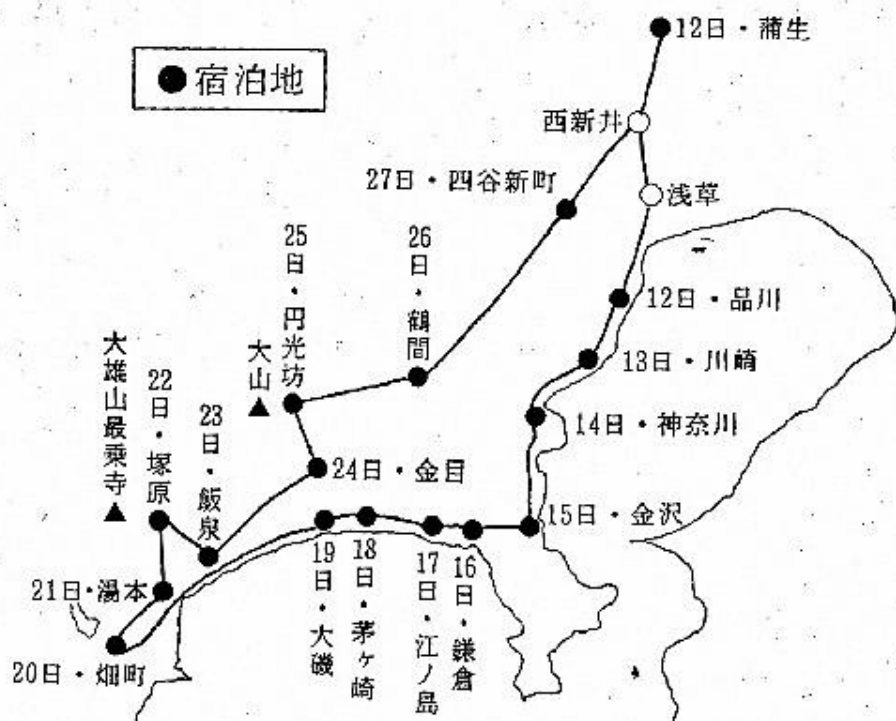
小菅県 御役所  
 先般知らせた学則のうち  
 一 五ノ日 小学講話  
 一 十ノ日 同

右の月ハ廿九日  
 右のとおり、来る十月より改めるので最寄り村々はかねて知らせたように、役人たちは勿論百姓の末まで出席すること。

孟子  
 孟子(十四巻)前三七二〜二六九年  
 孟子の言行や学説を記したものの四書の一つ(論語・孟子・大学・中庸)

# 「大山道中記」のこと

高橋 正澄



- 蒲生村九代の名主、中村弥三郎氏は、文化八年（一八一二）未三月十二日から二十八日までの旅を「大山道中帳」というメモ風の形で今に残している。
- 当時、氏は五十七歳、誰と連れだつての旅かは定かでないが、身の健康や安全を考えると、独りでの旅は考えられない。親友、使用人との旅であつたに違いない。
- 「道中帳」の記述は、浅草観音の参詣から始まっている。
- 十二日** 浅草観音↓御廊（吉原）まわり↓芝愛宕神社↓増上寺↓品川町↓村田清左衛門泊り
- 十三日** 蛸薬師↓目黒不動↓祐天寺↓碑文谷の仁王（法華寺）九品仏寺（浄真寺）↓十地藏↓相模街道（昼食）↓池上寺（本門寺）↓新田大明神↓古川薬師↓川崎町の屋弥兵衛泊り
- 十四日** 大師河原↓大師様（川崎大師）↓羽田弁天↓川崎宿（昼食）↓鶴見↓小池子育観音↓神奈川町↓三河屋利兵衛泊り
- 十五日** 坂東十四番弘明寺↓せき村（昼食）↓道すがらまことに景なり↓金沢能見堂↓地藏院↓近江八景↓称明寺↓瀬戸のからはし↓頼朝衣掛け岩↓瀬戸明神↓飛石↓金沢宿、ちよもと宇兵衛泊り
- 十六日** 鎌倉坂東一番杉本寺↓これより二十八丁山道難所坂東一番岩殿寺（昼食）↓日蓮乞水↓坂東三番田代観音↓光明寺↓東身延山（本覚寺）↓鶴ヶ岡八幡宮七堂伽藍たち在此↓八幡前吉田ひょうぶ泊り



十七日 頼朝公墓↓頼朝社跡↓荏柄山天神↓鎌倉六本杉(建長寺餅)↓新居閣廡(建長寺餅)↓建長寺↓濟田地蔵・頼朝

富士の巻狩り大太鼓在(建長寺餅)↓円覚寺(円覚寺餅)↓尊氏寺(長寿寺・尊氏五十三歳の御姿在)↓英勝寺↓海蔵寺

(景清の土ろう在)↓寿福寺↓実朝公墓↓大仏↓坂東四番長谷寺↓鎌倉権五郎景政の社↓江の島北村屋右左衛門泊り

十八日 江之嶋弁天↓三社参り↓奥の院岩屋・この所暗くた  
いまつとぼし↓藤沢遊行寺↓藤沢町(昼食)↓南湖(茅ヶ崎)

海老屋柱兵衛泊り  
十九日 雨八つだち↓平塚八幡↓大磯町明石屋伊右衛門泊り

廿日 大磯延台寺↓酒匂川鰲台乗り(一人前百五文)↓小田原大久保加賀守様御城下↓箱根山入口↓板橋一ノ瀬地蔵↓湯本地蔵畑町つたや甚兵衛泊り

廿一日 箱根権現↓頼朝富士巻き狩りの湯立て釜↓東福寺(曾我十郎の太刀二尺八寸、五郎の太刀三尺二寸)↓遷し賽

の河原↓齊池↓元賽の河原↓二十五菩薩↓若狭の八百比丘尼石塔↓曾我十郎、五郎、虎御前の石塔↓芦の湯↓熊野山権現

湯本伊勢屋清左衛門泊り  
廿二日 畑町↓浜松(塔の沢付近)↓大雄山最乗寺↓塚原か

まなり屋孫七泊り、雨降のため逗留  
廿三日 大田原坂東五番飯泉観音↓川越し(一人前四十文)

廿四日 松田村↓四十八瀬川↓波沢まかり町(昼食)↓十日市町↓坂東七番金目観音↓金目村角谷屋もん右衛門泊り

廿五日 子安明神↓子安地蔵↓子安観音↓大山町(昼食)  
大山不動堂(下社)↓これより山道難所↓一の沢↓常念仏寺

(常発願寺)↓日向越え↓日向薬師↓えんかふいん(円光坊?)泊り

廿六日 坂東六番飯山観音↓厚木町(昼食)↓坂東八番屋谷寺↓鶴間町相模屋伝左衛門泊り

廿七日 荏田町↓二子町(昼食)↓四谷新町(新宿)鶴屋新助泊り

廿八日 護国寺↓王子↓六阿弥陀一番(西福寺)二番阿弥陀(応味寺)↓西新井大師↓伊興観音↓手代観音↓帰宅

中野弥三郎氏が旅した文化年中は、次の文政と共に、江戸文化の爛熟期であり、人々の旅行熱が高まっても不思議ではない。もっとも、安永年中には、すでに、「鎌倉物語」などの読本も

出版され、金沢・江ノ島・鎌倉などは、江戸市民の憩いの場であったようである。

好奇心に満ちた氏が、これらの情報を見逃すはずがない。  
「大山道中帳」について詳しい青柳史子氏(当時日本女子大生)は、氏の旅について次のように評している。

「旅慣れた人の旅」  
「大山詣でより、鎌倉や箱根、坂東札所巡りに重点を置いた旅」

「経済・時間に余裕のある人の旅」  
「現代人がスナップ写真を撮るのと同じ感覚で記録した道中帳」

氏が五感をフルにはたらかせ、一步一步と道を踏みしめつつ味

わった、その土地の風土や人情は、私共には、到底、味わうことのできない密度の濃いものであったに違いない。

資料 『大山道中帳』 中野家所蔵  
「近世における相模国大山信仰の様相」 青柳史子著

# 藤原庚申

高島 英一

はじめに

浦和市中央部の南端に太田窪<sup>おくだん</sup>という地名がある。

「だいたくぼ」という地名からわかるように、この辺は窪地がおおく、そこに大宮台地からの舌状丘陵がのびている。

この窪地は海であったから、浦和の地名は浦曲（うらわ）に由来するといわれている。

太田窪の丘陵の南端に、新田自治会館<sup>しんた</sup>が建てられている。

会館の入口には天神様が祀られていて、自治会館のことを天神会館とも呼んで、地元の人々に親しまれている。

## 三基の藤原庚申塔

天神様の右手に小さな祠があり、なかに高さ一mをこえる石造りの庚申塔が納められている。

格子の中をのぞくと、元禄の文字が塔の左肩にみえる。

祠の前の小さい三基の石造物が、敷石の両側に地表から顔をだすようにして並んでいる。

元禄時代の庚申塔を守っているかのように見える。

そのいづれにも上部に藤原庚申の文字が刻まれている。

そのうちの二基は青面金剛であり、他の二基は猿が走っている

姿と、岩に腰をおろして休んでいる姿に見える。

それぞれ浮き彫りになっていて、他の庚申塔にはみられない珍しいものである。

二基の猿は、いづれも御幣を左肩にかついでおり、その表情は繊細な彫りである。三基の石造物は、地表からの高さが七十cm

くらいで、上部は角駒型をしている。

青面金剛の左側面

奉納三昧造立

元治元年（一八六四）甲子年八月

右側面

足立郡太田窪村世話人

新田 内藤 豊次郎

善前 星野 三良兵衛

星野 捨五郎

と読みとることができる。

三基の石造物が建立された元治元年（一八六四）は、物情騒然としていた時代であった。太田窪の人たちが、庚申の月の出を待って安心立命を願ったものであろう。

「藤原庚申」とはいかなるものなのか。手をつくして調べたがわからない。浦和市教育委員会でも未調査である。

藤原庚申のいわれを知りたく、土地の古老にきいてまわったが、

長い間わからずにいた。

ある古老から、JR武蔵野線の工事の際、ここに移転したものと

いうことがわかった。武蔵野線から天神会館まで五百mほどは

なれている。武蔵野線に、現在、橋がかけられているが、この

あたりに石造物があったという。

それが特定できれば解明につながるのでは、と期待を抱いてこの周辺をきいてまわった。さまざまな話をきくことはできたが、収穫は得られなかった。

手がかりをつかむ

平成十年三月、越谷市郷土研究会の史跡めぐりに参加した。越谷市郷土研究会は、三十余年の歴史を持ち、平成十年には会員二百余人、史跡めぐりは二百六十回、研究発表会は百二十回を数える団体である。

このときの史跡めぐりは越谷市大松で、清浄院という古刹がある。この寺院の石仏を中心に、点在する石仏をめぐる研究会であった。

この石仏めぐりで「藤原様」といわれる信仰が近代まであったことがわかった。

清浄院は室町時代、賢真上人の開山と伝えられている。

上人の没年が宝徳元年（一四四九）であることを刻した石造物が、元文元年（一七三六）に建立されている。

その礎石の上部に、板碑を差しこんであつたとわかる三十cm幅の溝がある。最初にこの礎石の紹介をうけたときは、上部にあつた板碑は行方不明、とのことであつた。

傷つけられるおそれがあるから、寺で大切に保存してあると、その後の調査でわかつた。この板碑を「藤原様」と呼んで信仰をあつめていたとのことだつた。

「藤原様」はもう一つ、この近くにあつたことが判明した。

もう一つの藤原様

清浄院から南に歩くと小堂がある。格子の中に緑泥片岩の板碑がみえる。布がかけられていて文字を読むことはできない。このお堂を「藤原様」と地区の人たちは呼んでいる。

お堂を預かる外山家は、藤原様から二百mほどはなれており、屋号は「ふじわら」と名乗っている。

外山家で聞いた話では、明治のはじめのころ、外山家のご先祖が先達のようなことをしていた。

「藤原様」はご利益があると有名になり、東京から古利根川をさかのぼってくる人もいた。

藤原様の門前は店がたちならぶほどの賑わいであつたといふ。いわゆる「はやり神様」であつたわけだが、いつごろから始まつたのか、藤原の名の由来は、になるとはつきりしない。

近くの古老の話では、明治のころ、藤原様の所に経塚があり、そこから大量の人骨がでてきたことがあつた。

古戦場のあとではないだろうかという。

人骨がでた話は、他の人たちからも聞いたから、人々の記憶にのこっていてくわしいことを知っている人がいるかもしれない。最近では地主が変わるたびに、お堂が移動したらしく、元々の場所を特定することはむずかしいようだ。

近在では、「藤原様」の賑いを記憶している人が何人もいる。いつから始まつたのかははつきりしない。大正の末期か昭和のはじめころまで続いていたのではないだろうか。



### 宮代町にも藤原大権現

この折の越谷市郷土研究会の資料によると、宮代町にも「藤原大権現」という石塔があり、江戸後半にみられた藤原信仰である、との記載がある。

藤原信仰があったとすると、浦和市太田窪の藤原庚申の手がかりになると思い、宮代町をたずねた。

宮代町に、西光院という古刹があり、となりに五社神社が建てられている。

西光院は「元禄十二（一六九八）の勅進帳に、別当は大蔵坊とあり」（宮代町教育委員会の調査記録）と記されているほどの古寺である。

この寺と並ぶ五社神社は小規模ながら、正面に県の文化財に指定されている社殿があり、右手に不動堂と富士塚が並んでいる。神仏習合の社である。

社の参道の右下に「藤原大権現」と刻した石造物がある。

宮代町教育委員会では、この石造物を次のように記している。

寸法 本塔 高さ五六cm 幅二四cm

台石 高さ十三cm 幅三二cm

形態 駒角柱型

銘文 (本塔正面)

明和九壬辰

藤原大権現

二月吉祥日

講中

同教育委員会で調査はしたが、藤原大権現は誰のことなのか、由来はどうなのかなどは明らかにされていない。

隣接する西光院住職にきいてみたが同様であった。

### 藤原様とは何か

浦和市の太田窪から越谷の清浄院までは、直線で約十五km、清浄院から宮代町の五社神社までは十一kmで、いずれも浦和太田窪から一日で歩いていける距離である。

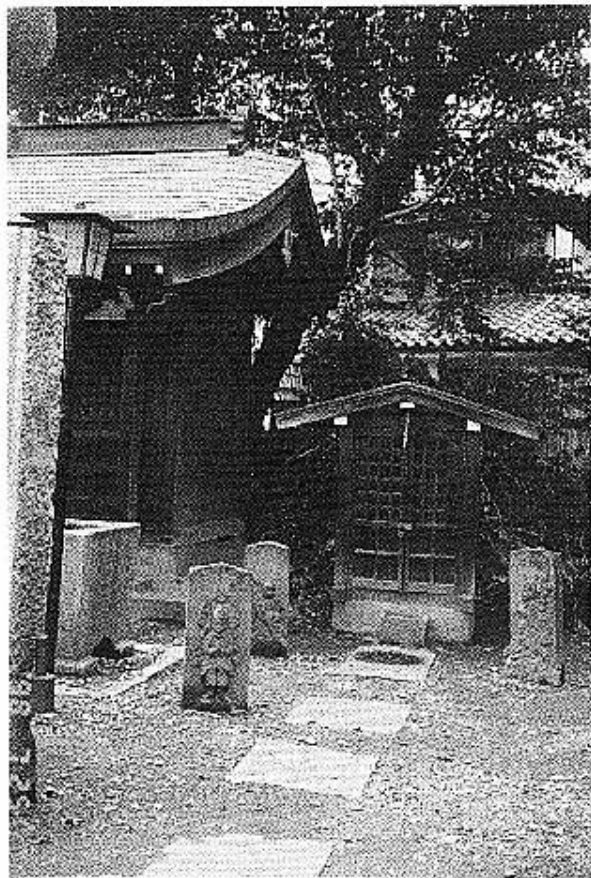
三つの市町は、古来からさまざまの形で文化の交流があったはずで、浦和の藤原庚申（一八六四）、越谷の藤原様（年代不詳）宮代町の藤原大権現（一七七三）は深い関連があり、太い糸でつながっていたのではないかと考えている。

明治のはじめの廃仏毀釈により、それ以降、糸が分断され、時の経過とともに忘れ去られてしまったのである。

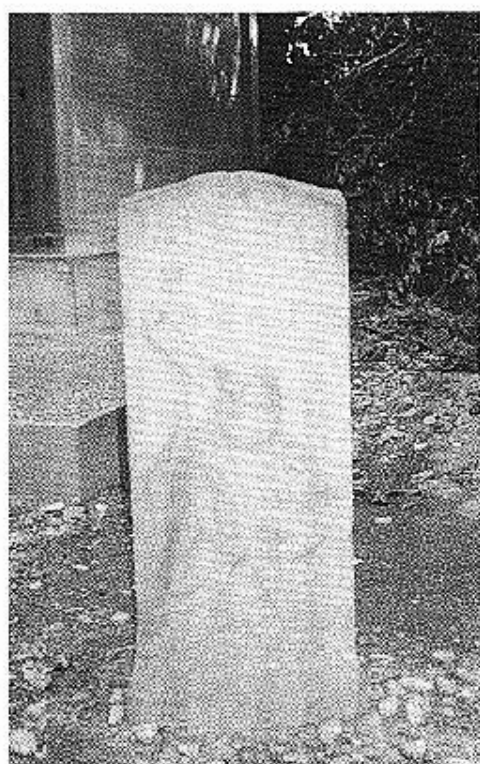
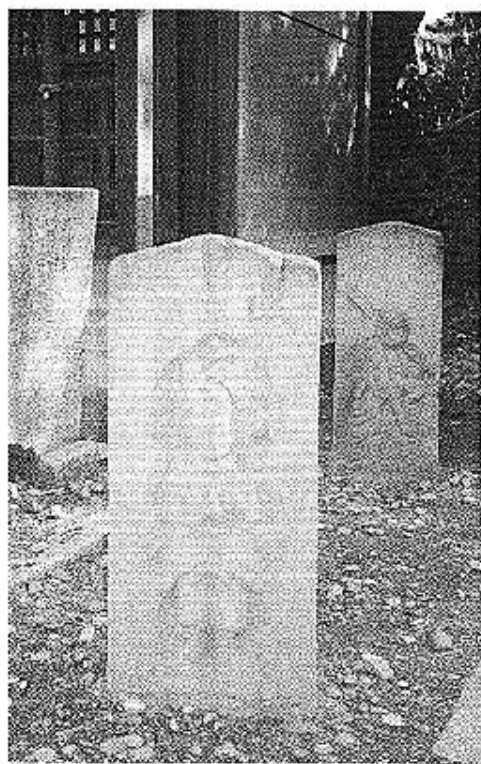
藤原は由緒ある姓だから、私が模索する藤原庚申の藤原は、尊崇の意味をこめてつけられたのかもしれない。

越谷の藤原様や宮代町の藤原大権現を信奉する人が、太田窪の庚申信仰と結びつけて、私を惑わしているのかもしれない。





浦和市太田窪の三基の藤原庚申塔



文書にみる寺家の食生活

「精進料理献立」考

一色 英子

日本の歴史上ながらく続いてきた肉食禁忌の食生活は、江戸幕府や諸藩の殖産興業政策により食糧の生産が増大し、また外国文化の移入により幕末期になると大きな変化をみせる。

しかし在方の寺家の食生活は自給自足を旨とし、あくまでも肉食禁忌の戒律を頑に守る生活をおくっているのである。

今回、在方の寺家ではどのような料理を食していたのか、「安政二年瓦曾根照蓮院年中行事」を資料としてさぐってみる。



○本膳料理の献立

照蓮院の年中行事の中で本膳料理の献立は三度記載されている。それは一月廿一日の初御影供と二月十五日の涅槃講、七月廿日の施餓鬼会の時である。

さて、資料の初御影供の配膳図は図1のようになるのだろう。膳の組み立て方、料理の組み合わせ方は時代や流派や宗派により、また食材の入手事情により異なるが一汁三菜、一汁五菜を基本に料理献立を作るのである。

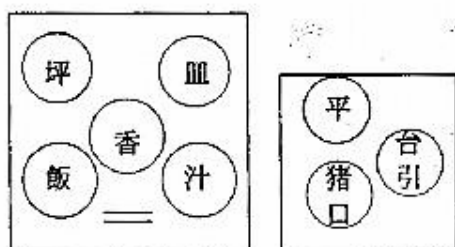


図1 御影供の配膳図

本膳料理からみてみよう。

皿  
海苔  
紅葉大根  
ふきのとふ

精進料理の「皿」は刺身か膾を盛るのであるが、精進料理の刺身は茄子・たけのこ・こんにゃくなどである。この献立の皿は膾であろう。

江戸期は膾料理の最盛期でいろいろな調味料で食した。

さて「紅葉大根」であるが、これはどのようなものだろうか。

古来「紅葉」と冠するものは、秋の季節感を表わしたり、紅葉の色彩から赤味のあるものにつけるのであるが、江戸期の料理

本に「紅葉大根」という名はみつからない。「紅葉大根」という名が料理名のまん中に書いてあることから「紅葉おろし大根」といつているのではない。色をつけた大根とも考えられるが、まひとつ決め手に欠く。そこで越谷の同時代の他の文献をあたってみると「生酢」として「大根、にんじん」とある。このことから、たぶん現在の「紅白膾」と考えるのが適当と思われる。一般的には「紅白膾」を「紅葉大根」とはいわれないが、江戸期のにんじんは金時にんじん系で鮮やかな赤味なので、その膾を通称「紅葉大根」といったのかもしれない。

この献立の皿の膾は、海苔・にんじん・大根・ふきのとうが入った色の取合わせのよいものであっただろう。

参考までに、江戸期の料理本『精進献立集』に大根・椎茸・あげふ・にんじん・青みの膾の献立が載っている。この膾の色彩は白・黒・黄・赤・緑の五色で精進料理の基本色である。

汁  
—— 醤油すまし  
—— あられ豆腐

江戸期の献立では「汁」と書いてあれば「味噌汁」をさし、「すまし」は二の膳に付く場合が多い。ここでは二の膳で汁を略しているので本膳でわざわざ「醤油すまし」と書いている。具は豆腐を細かくさいの目に切り、あとからばらりと入れるものである。

坪  
—— 胡麻煎  
—— 牛房

牛房を湯煮し、煎った摺り胡麻で和え壺状の器に盛ってある。  
飯—— 麦飯

格式の高い本膳に白飯ではなく麦飯を出しているのは、江戸期には酒には白飯より麦飯が合うと考えられていたからである。香之物

沢庵漬や大根の味噌漬、糍漬、梅干などと考えられる。当時の文書より越谷地方では右の種類が香の物として使われている。次に二の膳であるが正式の場合、汁・平・猪口を出すのである。ここでは、汁を略し口取の台引と一緒に出している。

平  
—— 揚豆腐  
—— 板昆布  
—— セリ

揚豆腐は豆腐あぶらげ、あぶらあげとよばれ、天明期頃より一般に広く普及した。油を使う揚げ物は家庭では出来ない時代であるから、揚豆腐は高級食材として、まだ油を使うことにより料理をおいしくすることからも普及したのである。

この献立は、あぶらあげと板昆布とせりを煮たもので色合いもよく、揚げ物が入っているのでコクのある煮物である。これを平たい煮物用の器に盛ってある。

猪口  
—— 菜  
—— ひたし

菜のおひたし。菜は自家の庭先や畑で出来るもので「はたけ菜」とよばれあぶら菜である。醤油をかけて食したものである。これを猪口のような壺状の器に盛ってある。

台引  
—— 油揚  
—— 板昆布

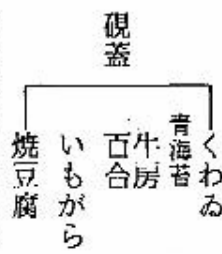
台引は元米、台引き物の略で膳に添えて白木の台に酒肴や菜

子をのせて出すのである。ここでは、平・猪口と一緒に一つの膳に盛って出している。

ここでは、板昆布を油で揚げたもので揚げ物として古くからあった。現在もお菓子としてその形を残している。

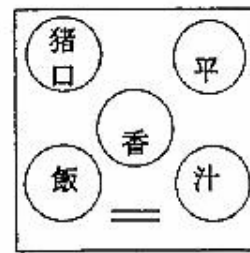
次に膳のそとに酒の肴として取肴の井と硯蓋を出している。  
井——焼菜

取肴の「焼菜」という料理は江戸期の料理本にも見あたらない。古くからある「熬菜」のことであろう。「熬菜」というのは水菜の茎を酒または塩、醤油で熬りつけたものであるから、越谷でははたけ菜を調味料で熬りつけたものであるろう。これを井の中に入れて取肴として出している。

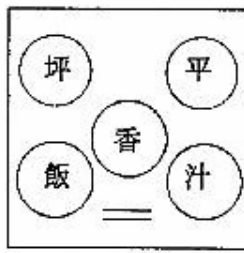


硯蓋は硯の蓋のような長皿の器に、三・五・七・九種の料理を組み合わせて酒の肴とするものである。ここでは、くわゐ・青海苔・牛房・百合根・里芋の葉柄で「ずいき」ともよばれるいもがらと焼豆腐の五種をそれぞれ単品で味をつけたものである。たとえば、料理を江戸期の料理本からさぐってみると、青海苔・牛房というのは、牛房をよく湯煮して酒で煮て下地は醤油で加減して薄葛をひき、火であぶって粉にした青海苔をふりかける。また百合根は一片ずつ離して洗い、湯煮し薄葛をひいておろし生姜をのせる、というものである。これらの料理も黄・緑・白

・赤・黒の五色を組み合わせている。  
次に図2は涅槃講の配膳図である。



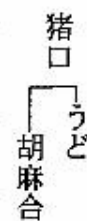
本膳 配膳図 涅槃講の配膳図



本膳 配膳図 施餓鬼会の配膳図



平皿に五種の色合わせのよい煮物が盛ってある。



猪口の器にうどの胡麻和えが盛ってある。

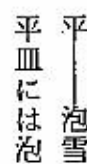


汁は味噌汁で具は菜の青みと豆腐を入れてある。



この献立は一汁三菜の簡単ものである。

図3は施餓鬼会の配膳図である。



平皿には泡雪が盛ってある。泡雪は淡雪とも書き、卵白を使

ったものや豆腐料理のものをいう。この場合、精進料理であるから淡雪豆腐である。淡雪豆腐は淡雪のように軟らかい豆腐というもので、絹ごし豆腐であんかけ豆腐にしたものである。



茄子を湯煮し煎って摺胡麻で和え、壺状の器に盛ってある。

汁——とふがん

汁は味噌汁で具は冬瓜である。

飯——茶飯

飯は色のついた茶飯である。



こんにゃくを豆腐で和えた白和えを猪口に盛りつけ、膳のそとに酒の肴として一品つけている。

以上が本膳料理の献立である。

○寄合のための料理献立

照蓮院での寄合は、念仏講や施餓鬼法要後、詞堂金勘定の時などで持たれた。

(ママ 柯か)  
・詞堂金勘定の時

・念仏講



・施餓鬼法要後

大平——のっへい 甘煮



酒

寄合の献立は手近な材料を使って、煮るといふ調理法がほとんどである。それを大平・大皿・井など大きな器に盛り合わせ、皆で取りあって酒をのむ形式である。

以上が照蓮院で供する料理献立である。

一般に寺院で供する料理は「齋」として、開山忌・涅槃講・施餓鬼会などの行事や上客・役人・高僧の来院のとき供される。

本来、精進料理は「食即禪」といい、真理を追求するための修養の一つとして食を考えるのである。そして料理の基本は、

五色(白・赤・黄・緑・黒)五法(生・焼・煮・蒸・揚)六味

(甘・鹹・酸・辛・苦・淡)である。

在方での寺家の料理献立は、行事の種類や目的に合わせて構成されている。格式の高い食は一汁三菜を基本とした本膳形式で、膳や料理の数により格の差をつけている。そして料理は、

手に入る季節の食材を精進料理の基本の五色五法六味にのって作っている。また寄合のための料理献立は、手近な材料を

煮るといふ簡単な調理法で作っており、それを大皿盛りにして

皆でとりあい酒をたのしむ形式にしている。

参考文献

越谷市史・嬉遊笑覧・守貞漫稿

江戸時代料理集成・日本料理秘伝集成

# 越谷養鶏のあゆみ

森屋 英龍

## 大相模村の養鶏

江戸時代、地鶏の飼育は自家用で、一戸あたり五羽から十羽くらいであった。明治十年代に多卵鶏を輸入し、四十羽から五十羽を飼育する農家がでてきた。

明治二三年、「淡色フラマ」「褐色レグホーン」「黒色スパニシ」などを買い入れ、地鶏と交趾させたところ、採卵成績がよかった。これをうけて農家は競って養鶏に取り組んだ。

当時は放し飼いであったため、鶏によって農作物が荒らされるとして、養鶏をやめる農家が増えた。その後、飼育法改良の結果、明治三五年から同四十年にかけて、

養鶏損益表（百羽あたり）

収入	鶏卵	315円36銭
	鶏糞代	36円00銭
支出	飼料代	197円10銭
	人件費・営繕費	38円00銭
純益		116円26銭

果、明治三五年から同四十年にかけて、農家は再び養鶏をはじめた。一戸あたり平均三十羽を飼育するようになった。当時、この収益は鶏卵代だけで一戸平均六十円以上、鶏糞は農作物の肥料として農家をうるおした。改善された飼育法は柵で囲った平飼、一柵あたり五十羽を限度とした。なかには数柵を設けて大規模な養鶏にのり出す農家もあった。鶏舎は物置の一部をあてるか、もしくは、軒下の周

囲を板張りで囲い、窓や柵を設けた。やがて、大相模村に家禽改良組合が設立され、養鶏産業の基礎がきづかれた。

当時、大相模村で飼育されていた鶏種と一年間産卵数は次のとおりである。

- 白色レグホーン 二二一個
  - ハクレグホーン 二一三個
  - 黒色ミノルカ 一九六個
  - 銀色ハンハーク・金色ポーランド・藍灰色アンタルシャン
  - パフコーチン・淡色フラマ・白色プリモースロックなど。
- その後、農家の副業として養鶏がとりいれられた。

## バタリー養鶏のはじまり

大相模村・増林村・越谷町での養鶏産業は順調に発展し、農家の副業として盛況を続けてきた。

昭和四年、世界恐慌により農家は大きな打撃を受けた。この中で養鶏は土地の効率や管理の簡素がもたらされた。

昭和十年、わが国で初めて鶏舎を立体化した三段式バタリー方式による集約養鶏が考案され、養鶏に明るい未来をひらいた。越谷がバタリー養鶏の発祥の地となったのである。

昭和十二年、日中戦争がはじまり、同十五年には鶏卵の配給統制をうけて養鶏用飼料の配給制度により、飼育羽数の規制をうけるようになった。

昭和十六年の鶏卵出荷割当のうち、飼料配給基準羽数は次のようである。

（バタリー養鶏Ⅱ小部屋に仕切った多段式鶏舎で大量に飼育）

越谷町成鶏飼育羽数

地 区	成鶏羽数
桜井村	2200羽
新方村	2400
増林村	2000
大袋村	3000
荻島村	1000
出羽村	600
蒲生村	1000
川柳村	1500
大相模村	1500
越谷町	3500
大沢町	3500
合 計	2万2200羽

(昭和16年)

## 戦後の復興と越谷養鶏

戦後、越谷地区のバタリー方式による養鶏は急速に復興した。昭和二五年には飼育羽数は戦前の最高二万羽を超え、養鶏戸数は九十八戸、一戸あたり二百十二羽に達した。

この間、鶏卵の出荷先は主に進駐軍であった。進駐軍は平飼による鶏卵や赤玉卵を好まず、バタリー方式による鶏卵が使用された。

昭和二二年、この状況から越谷町では養鶏家の団結をはかるため、越谷養鶏組合が設立された。

昭和二九年、二町八村の合併による越谷町が成立した。この合併をうけて、養鶏関係にあっても、越谷市・松伏町・三郷市・草加市の養鶏家により、越谷地区養鶏農業共同組合が設立された。

飼育羽数と飼育農家の増加、飼料などの原材料の共同買入による購入価格の引き下げ、鶏卵の有利な販売、団体化による利点、諸問題に対処しやすいなどの必要があったからである。

この間、雛の育すう器が考案され、バスケットブルダーという商品名で全国に販売された。

昭和三八年、越谷市の養鶏は、人口の増加とともに養鶏羽数四十九万羽、飼育戸数三百二十八戸に増加した。一戸あたりの飼育羽数は千五百羽となり、全国有数の養鶏産業として注目を集めた。

養鶏に関連をもつ飼料業者・食鳥肉業者・動物薬品・雛の孵化業者などおおくの業者が集まり、その取引額はおおきな金額となった。鶏舎建設、電気工事などをあわせれば、越谷市の一大産業として市財政におおきく寄与した。

越谷市のほかに例が少ない集約立体養鶏を視察しようと、全国から越谷を訪れる人が跡を絶たず、越谷の養鶏方式が全国に普及した。これが現在のゲージ養鶏の基を開いたといえる。

昭和四十年代、このころが越谷養鶏の最盛期で、飼育羽数は六十万羽を超えた。

昭和四一年五月付の新聞では、越谷養鶏の盛況を次のように報じている。

「越谷市の養鶏は戦争中の飼料不足で一時衰退したが、二六年ごろより成長をとげ、今では一千羽以上の飼育戸数が五十戸にもふえ、採卵養鶏としての基礎ができた。

現在は鶏の飼育戸数は五百戸、飼育羽数は六十万羽に達し、雛を加えると百万羽になっている。鶏卵生産額は年間十二億五千万円である。最近近代化がはかられ、これまでの農家の副業から一百万羽以上の企業的な大羽数飼育の専業養鶏に移行した。



また百万円もかけての洗卵選別機や鶏ふん乾燥機を購入して労働力不足に備えている。

このため越谷市の農業生産額のうち養鶏が五十%を占め、首都近郊農業の発展に大きな役割をはたしている。」

このように当時の越谷養鶏は全国でも有数の盛況であった。

昭和四五年、全国の養鶏羽数を県別にみると、埼玉県は六六一万二千羽で、愛知・静岡・北海道・岡山・福岡に次いで六位である。埼玉県の養鶏は越谷が中心であることはいままでもない。

このころから「必ずもうかる」商売ではなくなってきた。卵価の停滞や飼料の値上げが経営を圧迫するようになったのに加えて、昭和四二年にニューカッスル病が大発生し、養鶏家に打撃を与えた。

昭和四五年以降、増え続けた越谷養鶏は成長がとまり、小規模の養鶏家は次第に脱落していった。昭和四五年の越谷市内地区別成鶏飼育羽数は次のとおりである。

地区	成鶏羽数
桜井	3744羽
新增	1万5225
大萩	19万3405
出蒲	3万2195
川	2万2494
大相	2万8181
越ヶ	7600
大沢	4327
北越	5万6620
谷	2万9560
合 計	7750
合 計	40万1101羽

世界農林業センサス (昭45)

鶏卵の値段のうつつりかわり

1個 (14.3匁)		1個 (55匁)	
明治39	2匁6厘	昭和32	13匁40厘
大正13	6.6		12.20
昭和 5	3.6	45	10.60
		50	16.72
		20	22.0
		25	12匁40厘
		昭32・キログラム施行	
	1匁(M) 53匁(14.3匁)	1匁(M) 55匁	

全農・農水省統計資料

同四六年には養鶏戸数は二百戸を割りさらに減少しつつある。その後、卵価の低迷や飼料の値上げが続くとともに、都市化による公害問題・地価の高騰・労働力問題など、養鶏家にはきびしい状況になってきた。

こうした中で、越谷の養鶏家は、経営の合理化や設備の改善に力をつくした。

よい環境を求めて栃木・茨城へと進出し、規模拡大をはかり企業養鶏へと進む者がでてきた。

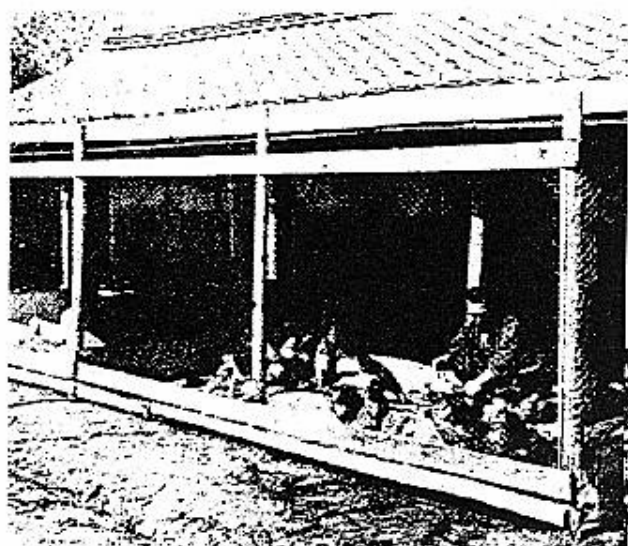
現在は鶏卵の生産調整にあり、養鶏産業安定のため、国は飼料安定基金と鶏卵価格安定基金をもうけ、保護政策をとっている。

現実には大型企業養鶏の進出できびしい経営状況にある。栄光を経てきた越谷養鶏の発展のため、業者一丸となって努力を続けている。

森屋英龍氏は平成八年の秋の叙勲で、「勲五等瑞宝章」を受賞された。

永年、養鶏産業の振興に尽力した功績によるものである。

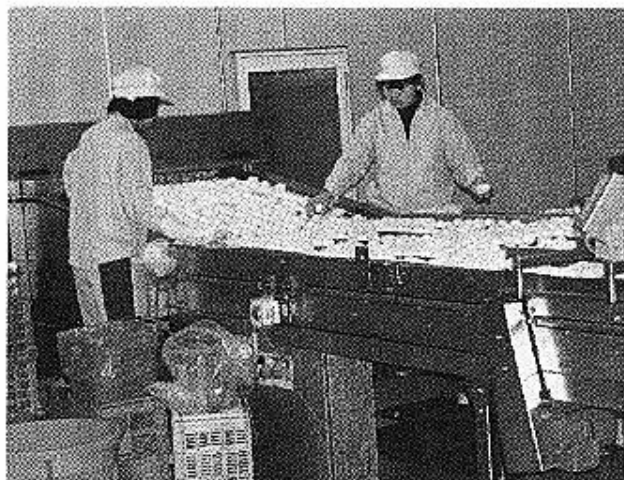
(越谷市郷土研究会編集委員会記)



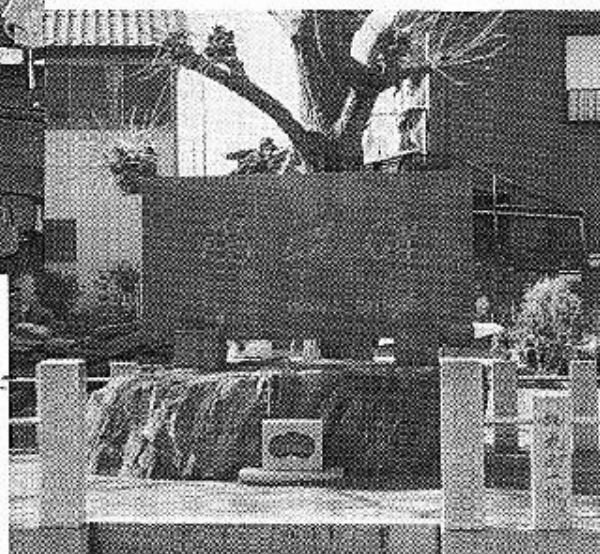
大正、昭和初期の農家養鶏



初期のころの木製小型バッテリー舎



汚れた卵を取り除く作業



昭和58年9月大聖寺境内に鶏魂碑建立

# 一山一寧書の板碑

山本 鉄也

## 一、板碑に対する興味

埼玉県は秩父地方が緑泥片岩の産地であることから、この石を使って作られた武蔵型板碑が多い板碑先進地である。

製作数は一三〇〇年代から増えつづけ、一三六〇年代には最高に達し、一年間に平均八三基も造立されている(文献一、二)

越谷に住むようになったのを機縁に、できるだけ多くの板碑を現地で見ようと思ひ立って数年がたつ。

文化財として指定されているものや、形状、偈文の特異なものを中心に見て、独りで楽しんできた。

・国内で最も古い年紀銘、嘉祿三年(一二二七)

江南町須賀広二複製

・国内最大、高さ五三七cm

長瀨町野上下郷

・六面の板石塔婆を組み合わせた法華経供養六角塔婆

小川町下里、大聖寺

・九基からなる板碑群

都幾川村西平、慈光寺参道

・廿一仏板石塔婆

越谷市増森

・表裏両面に三尊と種子を刻む

妻沼町妻沼、歎喜院

・六字名号「南無阿弥陀仏」を刻む

蓮田町馬込

・「青石卒都婆」と刻む

騎西町上崎、龍興寺

・両側面小口に梵字を刻む

騎西町騎西、大英寺

・一枚の石材に二基ある双式板碑

小川町北青山、円城寺

などである。いずれにも特徴があつて貴重なものであつた。

この報告は、多くの板碑の中から自分なりになにか共通項を見つけられないかどうかと考へた調査記録である。

## 二、板碑の形状と碑面文字

一般的には板碑は、頂上を山形とし、その下に二条線の切り込みを入れ、塔身部には本尊を梵字(種子)であらわす。

下方に蓮台、本尊をたたえる偈、年紀、造立趣旨、願主名などが刻みこまれている。本尊の種子が碑面の中心を占めていて信仰の対象となっている。

宗派によっては種子を刻んでいないのも見受けられる。

先に挙げた蓮田町馬込の六字名号「南無阿弥陀仏」を刻んだ板碑は、願主名から浄土真宗系であることが推定される。

時宗系では新座市片山の法台寺に名号板碑九基が残っている。

禅宗系でも「帰依仏」「南无仏」と刻まれた板碑があつて、書体に特徴がある。

## 三、「帰依仏」「南无仏」板碑の調査(一)

武蔵野線吉川駅に近い清浄寺(楠木山・浄土真宗)に、県の指定文化財となっている「南无仏」板碑がある。

幅は約五十cm、高さ二mを越す大きな板碑で、両側は崩壊を防ぐため鉄棒で補強されている。独特の書体で「南无仏」と彫られている(図一)。



〔図一 清浄寺板碑〕

説明板によると、一山一寧（後述）という中国南宋からの渡来僧の書という。同じ書の板碑は県内に二基のこっているという情報（文献二）から調べていくと、越谷市に近い古利根川の川向うにあることがわかった。

〔図一 清浄寺板碑〕

松伏町大川戸・光嚴寺（大堤山・曹洞宗）の板碑（図二）と、同町上赤岩・源光寺（宝鏡山・浄土宗）の板碑（図三）である。

〔図二 光嚴寺板碑〕



〔図三 源光寺板碑〕



碑面はともに「帰依仏」とあって書体は酷似している。

光嚴寺の板碑は、清浄寺と同じく県指定文化財となっていて、一山一寧が奥羽地方巡錫の途次、自書したと伝えられている。

源光寺の説明板には、一山一寧についての説明はない。町の指定文化財であっても、県の指定を受けていないところをみると何か違いがあるのかも知れない。

光嚴寺の板碑は下部が地中に埋没していて、正確な年号は不明である。

これら三基の造立年はすべて正安年間（一二九九～一三〇二）であり、一山一寧の存命中である。

#### 四、「帰依仏」「南无仏」板碑の調査（2）

文献二では、一山一寧について言及していない。

同じ名号碑が茨城県結城市に二基あるとのことなので訪ねることにした。

東持寺（諏訪山・曹洞宗）では、正和木板碑と称して覆堂三宝殿内に祀られていた。年紀は正和六年（一一三一七）。

この板碑の起源について下総旧事考には、「結城城敗亡の時に石窟を毀し碑を建て誌銘を後世に示すといえども誰か知る者なし。古墳を開きこの碑を得」とあって、古墳の石蓋として使われていたと言い伝えられている。

文献三によれば、これは板碑として異様だという。

石材は武蔵式の薄い緑泥片岩でなく、方形の雲母片岩であり、碑面の「南无仏」の文字は細い線彫であって、一般の薬研彫とは趣を異にするという。

線彫は浅く、覆堂に安置してあるため薄暗くて碑面は全く判

読できなかった。思い切って住職（小堀博道師）にお願ひして  
拓本の写真を撮らせていただいた。（図四）。

「南无仏」の書体が、埼玉にある一山一寧によく似ているとお  
尋ねしてみたが、そのような伝承はないとの返事だった。

〔図四 東持寺板碑〕



ついで華蔵寺（覚城山・曹洞宗）の境内にあった「帰依世尊」  
碑を見た。大きく二片に割れており、しかも左上部が欠け、碑  
面は痛んで読みにくかった。「帰依」の文字は似ているように  
見えた（図五）。年紀は正安四年（一一三〇）。

〔図五 華蔵寺板碑〕



## 五、一山一寧

中国南宋 淳祐七年（一二四七）〜文保元年（一二三二）。

浙江省台州臨海県の人。俗姓胡氏、諱は一寧、字は一山。臨濟  
禪大慧派下の無等慧融のもとで出家し、法明文節に天台を学び、  
天童山の簡翁居敬、育王山の蔵叟善珍らに参禅し、頑極行弥の  
法を継ぐ。

当時、元は文永・弘安の役（一二七四・一二八一）の二度に  
わたる日本侵攻の失敗ののちも、日本へ使いを出し入貢を求め  
て、禅僧愚溪如智らを派遣するが、暴風雨などで失敗した。

その後任として一山一寧が日本へ向かうこととなった。

成宗皇帝より妙慈弘濟大師の号を与えられ、弟子の石梁仁恭、  
西潤子曇を伴い、正安元年（一二九九）十月、太宰府に到着し  
た。鎌倉幕府の執権北条貞時は、これを知って怒り、一山一寧  
は伊豆修善寺に幽閉される。

やがて高名な禅僧であることがわかり、建長寺住持に迎えら  
れた。正安四年（一二三〇）には円覚寺住持も兼ねた。

正和二年（一二三三）八月、後宇多法皇の招きによって規庵  
祖円没後の南禅寺三世住持となった。

後宇多法皇をはじめとした公家の帰依が厚く、病による免休  
を望むが許されず、南禅寺で没した。七一歳。

一山一寧は学芸にすぐれ、能筆でも知られ、中国の貴族文化  
を日本に紹介した。朱子学をはじめ影響力は大きく、門下に夢  
窓疎石や虎関師鍊、雪村友梅などの代表的な五山僧を輩出した。  
書に「六祖偈」「雪夜作」「頼賢碑」など。著書に「一山園  
師語録」。

## 六、まとめ

今まで見た五基の碑の文字は、素人目にもよく似ており、一山一寧の書もしくはそれを模倣したものともみているのではないかと思われるが遺墨が少なく確証はない。

ひとつのロマンと考えれば楽しいのではないだろうか。

なお、福島県伊達郡国見町には板碑ではないが、「石母田供養石塔」とよばれる石塔がある。一五七字からなる碑文が書かれていて一山一寧の書と伝えられている(文献四)。

いずれゆっくり調べてみたいと思っている。

### 参考文献

(一) 板碑Ⅱ埼玉県板石塔婆調査報告書

(二) 中世の板碑文化

(三) 下総上山川所在の板碑二三について

(四) ふるさとの文化遺産・郷土資料事典七

一山一寧について

・朝日日本歴史人物事典

・日本史大辞典

・鎌倉・室町人名事典

播磨定男

高井悌二郎

人文社

朝日新聞社

平凡社

新人物往来社ほか



## 生涯学習との出会い

高山 はつ

昭和がおわり、平成の元号に改められるころから、将来の老齡化問題が取り上げられました。

その対策に追われるように「生涯学習」という言葉が報道されはじめました。

越谷でも地域に補助金が出され、老人会が結成され、旅行にでかける親睦団体が活動をはじめました。

桜井公民館では、六十歳以上を対象に高齢者教室がひらかれました。

・書道、お茶、詩吟などの趣味の会。

・講師を招いて地域を学び、現地を視察しました。

・医師、保健婦さんよりいろいろ指導をうけ、健康に過ごすことを話していただきました。

そのほか館長さん方のおはからいによる懇親会もあります。地域高齢者の和をはかることに力を入れ、活発な活動が続きます。

現在の老人大学へ発展し、十年以上続いております。

私は第二期から数期にわたって在籍しました。

その間に埼玉地区の「高齢者の集い」が久喜(記憶が定かでない)で開かれました。

何名かの代表がパネラーの発表を聞きに行きました。

そのときに「生涯学習」の意味を学び、生きているかぎり知識をひろげ、吸収することを知らされました。

今後の老化防止、家族との融和を保つためにも必要で大切なことと知りました。

このことがあってから、心機一転、何ごとにも積極的に行動するようにになりました。

平成元年（一九八九年）、生涯学習について、越谷市社会教育課主催で、婦人リーダー研修会が各公民館から一名参加しておこなわれました。

市役所裏のプレハブ会議室へ通い、修了証を教育長、中央公民館長の名で戴きました。市の広報誌の「越谷と私」コーナーへ投稿を依頼され、発表しました。

その年、桜井、新方、大袋、荻島の北部四地区が「生涯学習推進モデル地区」に指定されました。

活動の一つに、北部公民館で記念講演会が催され、筑波大学・辻功先生の講演がありました。

「人は生きた年齢によって老いるのではない。自分の魂に情熱をうしなつた時に老いるのだ」

この言葉に感動したことが、生涯学習に一層の力を入れるようになりました。情熱をもって生きていくには、日常の生活に意義あることは、と模索をつづけました。

ふり返ってみますと、公民館での文化活動に参加して得たものには次のことがあります。

・知人を得たこと。

・古典の講義をうけたことで、地方への旅で旧跡を訪ねる興味

が倍加され、楽しい旅を味わえたこと。

・地域の史跡めぐりに参加して、越谷市内の旧跡を訪ねたおり、通算六年ちかくになる古文書の会でおぼえた文字が、碑文の対照に役立つこと。

・江戸後期から明治期に関する政令など貴重な資料、市民の狂歌で、むかしの遊び、市民生活の一端を楽しく味わえたこと。これらは、辻先生の講話を聞いたことで触発され、行動にでられたと感じました。

もう一つは日常生活の上に、精神向上をはかる手本として尊敬しております越谷市郷土研究会前会長小島誠先生との出会いです。清廉潔白、責任感、いつも笑顔をかべて話をされるお姿に敬服しております。

以前、郷土研究会総会のあと片付けをしていたとき、灰皿の始末をきかれました。

「ご心配なく、始末しました」

「一切の責任は自分にあるので」

私に氣遣って笑顔のお言葉に先生の「責任感」を深く感じました。日頃からお人柄を慕っていましたので、責任感を教えられ、生涯の心にのこる一事でした。

「会長として何もできないけれど、一切の責任は私が負うのだよ」と世間話の折によくなさいました。

私も自分の行動には責任を持たねば、と心に刻みこみました。忘れていたことをふり返って反省し、前進することは、生きているかぎり学ぶことにつながると思います。

「心に残ること」辻先生。小島先生との出会い。この二点です。

## 史跡めぐりがおわるまで

### 越谷市郷土研究会

平成十年度の史跡めぐりは、十一回（うち会員のみ五回）実施した。

平成十一年三月には、会員対象にバスで日帰りの史跡めぐりをおこなった。

毎回、第四日曜日を原則にしている。

役員はすべてボランティアである。

史跡めぐりの企画から実施までをお知らせしたい。

#### 一、企画

当会の史跡めぐりは二六〇回をこえた。有名などころは行きつくした感がある。一年前々数ヶ月前から企画をはじめめる。

#### 二、案内者をきめる

役員が案内者になることが多い。いつも同じ者では、知っている地域はかぎられてくる。

会員のみなさんが初めての方でやってみようのご意思があれば、ぜひ、おねがいしたい。

#### 三、お知らせ

幹事作成の「史跡めぐり」案内はがきが会員へ郵送される。

一方、市の広報には四ヶ月分まとめて掲載される。

以前は実施回ごとに広報に載った。担当者は文案を広報広聴課

へ出す。字数がかぎられているので、省略した文になる。

#### 四、申し込み

史跡めぐりの二日〜三日まえまでに、幹事あて参加申し込みがとどく。

会員が八割、広報をみた会員でない方が二割くらいである。

五十音順に名簿をつくる。

名簿は人数確認と緊急時の連絡簿となる。

#### 五、保険

途中、事故にあうかもしれない。安心料として保険をかける。

#### 六、案内者

・下見 案内者は下見へまず行く。現地を知っていても、多くの参加者となると事情はちがう。

当日どおり歩いて感じをつかむ。

弁当を買うスーパームもさがしておく。

日没までに帰宅できるように考えておく。

納得がいかなければ、再度、下見へ行く。

・交通機関 できるだけ電車をつかいたい。のりかえは少なくしたい。

一般乗客との混乱をさけるため、有人改札口へ役員が案内する。

路線バスはさげたい。一時間に一本のこともある。

おおぜいで乗って地元一般乗客への迷惑もある。

・歩く 歩くのは五㎞〜六㎞にとどめたい。車の多いところはさける。できるだけ車道と歩道の区別のあるところ



ろを選んでおく。

- ・トイレ これはどうしても必要になる。二ヶ所、三ヶ所はさがしておく。トイレのないところは、格好のコースでも実施できない。

- ・資料あつめ 行き先の図書館・市役所・資料館へゆく。資料の購入・コピーをする。当日に説明する数倍の資料をあつめる。配布資料に載せたり、現地で説明できるのは、あつめた資料の一部である。

寺社・史跡の写真はかならず撮っておく。

- ・寺社、資料館へのあいさつ 当日、たちよる寺社、資料館へのあいさつは欠かせない。多くの資料館では来場歓迎で、好意的に対応していただける。

ときには学芸員の解説をおねがいでいただく。寺社への志納料も用意する。

- ・昼食場所 おおせいが昼食をとれる場所をさがしておく。

屋外でもよいが、雨天のときこまる。

公共施設内は飲食禁止になっている。

ゴミのあと始末は頭がいたい。各自で持ちかえるようおねがいでいい。

- ・資料づくり 参加者にくばる資料は案内者がつくる。

あつめた資料はそのままではつかえない。

もう一度、かき直す。専門用語はなるべくさける。

むずかしい文は簡潔にする。わかりやすくするため、

写真・絵・地図は多くとりいれる。

枚数がふえるとかさばり、持ちにくくなる。

ワープロ、写真・地図のわりつけなど三日、五日はかかる。参加者+α冊分、印刷・折り本・製本は案内者のしごとになる。

## 七、史跡めぐり当日

- ・集合 よその団体では現地集合・解散がふつうである。

当会では越谷集合・解散にしている。

参加者確認と同時に資料をくばる。当日、参加できなくなった方、申しこみなしで参加される方が、数名はいつもいる。できるだけ事前に連絡していただきたい。

- ・切符 当日の切符は、各自で買うと手間どる混乱する。

役員が前日まで回数券をまとめ買います。

- ・諸説明 会長より、コースのりかえ・交通安全・案内者の紹介がある。

の紹介がある。

史跡めぐりの途中で行方がわからなくなる方が時々まいる。役員はこれをもっとも心配である。

参加者が多くなると隊列がなくなり、交通事故の心配がでてくる。

- ・会の旗 三年前、越谷市郷土研究会の目だつ旗を新調した。

先頭・中央・後尾と三本たてる。旗を目じるしに行

動していただきたい。

- ・現地の説明 案内者をもっとも気づかひするところである。

聞きやすく、わかりよい説明をこころがける。

参加者が多いとマイクをつかっても説明の声がとどかないことがある。

一日中、マイクを持ちはおぶ役員はご苦労である。平成九年十一月の鎌倉は二回にわけて実施した。今後、多くの参加者が予想されるときはこの方式をとることになる。

・参加費 昼食時、役員が参加費をあつめている。

おつりのないようご用意がいたい。

少額のとき一万円札はこまる。

なお、年会費(年二千円)は期末でなく、参加したときに、早めにご納入願いたい。

・史跡めぐりの記録 会報「古志賀谷」に載せるため、当日の記録をおねがいしている。

当日のようすを八〇〇字前後(表題・本文・写真をふくめて会報一ページ分)でまとめていただきたい。史跡の由緒・解説は不要。

八、その他

・会員限定の史跡めぐり 会員だけの史跡めぐりを、年に数回おこなっている。市の広報には載せていない。会員のみ参加となる。

・バス旅行 よびかけは会員だけとなる。交通不便の史跡をめぐるには都合よい。多くの史跡をまわれる。疲れもすくない。ときには電車より割安の交通費になることがある。

一方、バスの予約は数ヶ月前になる。参加者の数がかめない。バスの台数確保がむずかしい。

参加費あつめに手間どる。

当日、不参加の方へ返金できない。万一、交通事故のとき補償がゆきとどかないなどの難点がある。手なれた旅行者でない裏方の担当者はご苦労である。

熟年者が多く、無理なコースはさけ、皆さんによるこんでいただけよう心くばりをしている。

「回数をふやして……」ときく。が、現状ではむずかしい。無事に帰りつくまでの役員の気づかいや心労はたいへんなものがある。

「今日はよかった」の声がかきこえれば、役員のしあわせである。



史跡めぐり

# アンケート

「史跡めぐり初参加の思い出」について書いていただきました。

(原文のまま)

「大相模不動尊」昭和四一年二月 谷岡 隆夫  
史跡めぐりは、初回の昭和四一年二月二七日の大相模不動尊より毎回参加しています。

当時の参加者は毎回二十名くらいでのんびりした探訪でした。今まで知らなかった寺院内部拝観や説明に興味がありました。

史跡めぐりに二百数十回も参加することになるとは、当時の私には毛頭知るよしもありませんでした。

「行田市」昭和四五年十一月 木原 徹也

その当時の「さきたま古墳群」は、一面の氷田の中に小山のような古墳が点在しているだけでした。

辛亥銘鉄剣が発見され、一躍全国的に有名となり、一帯が整備されたのはその後のことです。

越谷市役所に転職したばかりで、不安な日々の中でフツと目にした史跡めぐりの案内に誘われて初参加しました。現会長の谷岡さんも、まだまだお若く（現在もお若いですよ）、木村信次先生も、かくしゃくとしたダンディな紳士でした。その他、なつかしい方々のお顔が浮かびますが、こうした方々のすばらしいお人柄に接し、すぐ入会の手続きをいたし、今日までお付き合いさせていただいております。

「行田方面」昭和四八年四月 加藤 幸一

史跡巡りに初参加したのは、私が大学を出て越谷の学校、東中学校に赴任してすぐのことである。

東京の足立区で育った私には、地元の男子生徒が皆丸坊主頭であったのには驚いた。

それと同時に、全く知らない埼玉について知ろうという気持ちで沸いてきて、どんなにかめしい会なのかとの不安な気持ちを抱いて越谷駅前に行き、行田の「埼玉古墳群」に初参加した。

初めての見知らぬ土地で、郷土研究会の史跡巡りを何から知ったのか今となってはわからない。

電車を乗り継ぎ、バスを使って埼玉古墳群のそばで下車した。すごい田舎である。平地に無造作に古墳群があるだけだ。

見学する人など見当たらない。めったに訪れる人がいないのだろう。そんな寂しい所だと強く感じた。

今の観光地化された埼玉古墳群とは大違いだ。

でも初めて目の当たりに見る古墳に大感激した。私が中学生の頃、修学旅行で見た馬子の石舞台とは随分違った。丸墓山を一気に登ってみた。

次の参加は同年の九月、バスに揺られて初めて耳にする「松伏」の地で下車する。

随分遠くまで来てしまったなどの感じを受けながら、堂面橋を渡って越谷の地に戻り、北川崎の聖徳寺で今はなき現住職の尊父のお話を承ったことが懐かしい。

翌月の故山崎善司氏の詳細なご案内による国府台もよかったです。

国府台から見る江戸川や最後の見学地である手児奈の悲話的印象的であった。

名倉 さわ

私が史跡めぐりを初めて参加させていただきましたのは今から十余年前のことでした。

丁度、農家が忙しい時でしたが川越市が最初でこの町は城下町又小江戸と呼ばれており、徳川家との関係深い春日の局が將軍を育てたお部屋等を見学し非常に感銘いたしました。

当時の会長小島先生、木村先生、又谷岡現会長さんに色々お世話になり今も続けていきたいと思っております

「時の鐘 偲ぶ音色や 男梅雨」

「さきたま古墳」昭和五三年九月 堤竹 宏吉

今から二〇三〇年前の昔、私は仕事中心の時代。

郷土埼玉（越谷）についての知識は、学ぶ意欲は訪ねても無力同然。定かでないが、市の広報を通して「埼玉古墳群めぐり」の案内が目止まり、これがチャンスと三〇〇〇人位の方々と初参加しました。

途中電車の中で諸先輩のお話を伺う機会に恵まれ勉強となりました。埼玉（さきたま）古墳は県名発祥の所以の地であり五〇七世紀初めまでにつくられた九基の古墳が群集している国の史跡です。

初参加が縁となり今までに三〇四回参り二〇年前とは整備状況が格段に向上し感銘を受けています。

稲荷山古墳と思いますが、昔は、葦が生い茂り頂上に昇るにも今の様な階段はなく細い傾斜径であったと思えます。將軍山古墳も立派に復元され、展示館も石室内部が拝見でき勉強になりました。

「蒲生周辺」昭和五九年六月

宮川 進

第一三二回、昭和五九年六月の木原さんご案内、「蒲生周辺」の時だったと思います。新田の駅から、せまいごちゃごちゃとした路地を通って日光街道へ出ました。綾瀬川のむこうに藤助河岸がありました。

そして一里塚と、木原さんの情熱こもるお話をききました。同じ年の三月に越谷に引越してきたところでした。一緒に歩いた熱心で真面目な方々と、そのあたたかい雰囲気気がいいって郷土研究会に入会させていただき、今にいたっています。

「比企郡都幾川村」一九八七年十一月 高山 はつ

一五七回都幾川村坂東九番札所慈光寺を訪ねて。

十一年前になります。八高線明覚駅下車、山に囲まれた静かな街中をバスを乗り次ぎ、初参加の緊張がほぐれ、山路の参道を登る。途中、左右の初めて見る板碑に往時の風習を思い、説明に聴き入る。

本堂にてご住持より、ご本尊十一面観音菩薩の念入りなお話を拝聴、宝物館で寺宝を拝観。

特産の柚子等を無人の棚から買い求め山路を下る。

広報の記事を読んでから参加するのに、ためらいを感じて、毎回空しく過し何年たったか。

この参加は私にとっては貴重な出会いで、現在がある。

若松 清一

越ヶ谷の史跡めぐりに初参加させていただいた日付は忘れてしまいましたが、「日光御成道を訪ねて」の想い出は、今も尚、記憶に残っております。

「越ヶ谷・神明町」平成元年二月 池田 仁

史跡めぐりの初参加は平成元年二月、越谷の成り立ちを知る上で期待していたテーマ「古志賀谷氏館跡」でした。先に他界した学識高く郷土愛に燃えていた山崎善司理事の案内でした。

十年近く前で記憶は確かでないが、参加者四五十名越谷駅前を八時過ぎに出発、コースに従って歩く。

曇天だったが寒くなかった。日曜日の日光道商店街は閉店が多く静寂そのものの通りを御殿町に向かって、しゃべりながら歩いた。

古志賀谷郷の開発の祖、野与党の枝族為基が古志賀谷二郎を名のり、その子どもも館を古志賀谷に構えた。

古志賀谷太郎館跡から四郎、二郎館跡の順で、館跡や館地の範囲を当時の様相をかすかに残す構え堀・土塁・取り水口・板碑・古道の遺構や遺物、社寺の位置関係から説き明かしてくれた。

山崎理事は多くの文献を調べ実踏を重ねてまとめ各人に配布した格調高い資料で丁寧に説明してくれた。

行き届いた配慮が参加者の心を捉えていた。しかし、基礎知識の乏しい私にはむずかしかった。

でも実証を裏づける手法がわかった。

史跡めぐりを通してよかったことは見知らぬ人と語り合えたり先き先きで発見する未知の世界を知る喜び集団行動であればこそ二万歩以上も完歩できた。いいムードの中で爽りの多い史跡めぐりができ感謝でした。

最後に山崎理事のご冥福をお祈りします。

「越谷方面」平成元年二月 酒井 達男

会員になって史跡めぐりの初参加は平成元年二月二六日古志賀谷館跡（太郎館、四郎館）他で市内を巡って歩きました。この日からはじめて永く勉強させてもらうことが出来るであろう第一歩という緊張感から、少々疲れましたが満足感に浸りつつ楽しかったあの日のことを思い出します。

「栗橋方面」平成二年九月 野村 勝八

初参加当日は雨天であった。ともかく越谷駅前に集合したが、谷岡事務局より話しを受け、雨天決行となる。ただし天候の具合によりコースを変更する旨が伝えられた。出発したが雨は一日中降り続いた。

楽しみにしていた史跡めぐりは無残な結果となってしまった（初参加の私にとって）。

以来何度か雨の史跡めぐりを体験したが、極め付けは私自身が案内することとなっていた「成田山新勝寺」が台風により中止となったことである。

その時、家族の一言が「お父さん、雨男だから……」。初参加の思い出が胸をよぎった。

「古河方面」平成三年四月 S・N

確か好天気の日でした。古河総合公園内古河公方館跡よりY氏の説明が始まり資料片手に興味深く拝聴古河歴史博物館では以前本で見た渡辺華山筆鷹見泉石像（レプリカ）に感動した事はいままも鮮明に覚えて居ります。

知る人もなく、唯一人歩く中話しかける人もチラホラ……子供時代の運動会や昔話を聞き乍ら一緒に歩いた人が

K氏。昼食後「瓦曾根溜井図」の解説書を配布して居りましたK氏。古河歴史博物館へ行く途中声をかけられ古河城の石垣について話されたY氏。

展示室の古文書を一人で読んで居た時、傍で声を出して読んだS氏。

その後交流が始まるうとは夢にも思えない一日でした。

「太田方面」平成四年四月

青山 栄吉

越谷の広報に、たしか「徳川家康発祥の地を訪ねて」という記事があり、丁度家康の本を読んでいたこととなり、参加しようと思ったのがキッカケ。

現地（世良田）に着き、午前中のコースが終り昼食時間となった。食事後初対面だったが同じテンプルの人（鈴木先生だったと思うが？）と「流れ者の僧侶姿の男を松平家が養子にしたことや、源平藤橘」などについて話をしていたら、周囲の人達も話に加わってくれた記憶がある。そして、この会に入り新しい人間関係が出来ればと思いい、その日の帰りに入会した。

家に帰り、当日の状況を妻に話したら「良かったじゃない、新しいお仲間が出来れば」と喜んでくれ、有意義な楽しい一日だった。

当日の日記に書いた言葉「新しい出会い」。

「国分寺方面」平成五年三月

岩瀬 静江

お友達にさそわれて始めて参加しました。

国分寺駅から殿ヶ谷戸公園へ。武蔵野の自然を活かした和洋折衷の回遊式林泉庭園、崖下のみちを歩いていて、カタクリ草を始めて見ました。

お鷹の道、真姿の池湧水群は、名水百選の一つとか。国分寺跡、七重塔跡、今も瓦が出土するそうです。

ここはあの三徳円事件に関係のある場所と伺いました。江戸東京博物館分館の野外博物館では、高橋是清邸の風景が歪んで見える窓硝子が印象に残り、銭湯や、醤油店古い大きな農家が、とても懐かしく感じられました。途中から雨が降り全部見学できなかったもので又いつか、建物のふえた、野外博物館を、訪れたいものです。

「太田市」平成五年十月

千葉富久子

越谷に住む様になって一年がすぎた平成五年十月

初めて史跡めぐりに参加、（子育て呑龍で有名な寺院晴天にめぐまれ、七、五、三の季節、七歳と三歳の晴着姿の可愛い女の子。おもはず御両親におめでとう御座居ます、と声をかけ、後でありがとうございますと大奥様の嬉しそうな顔、しらない御人に声をかけはるかしかった事が、一番心に残った思ひ出です。

それから五年、ずい分多くの有名な寺院、神社に行きました。勉強そして大勢のお友達にもめぐまれました。役員の方々のご苦労いつも感謝して居ります。

月一回の史跡めぐり楽しみにしております。

「太田市」平成五年十月

伊藤 靖二

私と史跡めぐりの出会いは平成五年十月三十一日の太田市の義重山大光院新田寺通称「子育て呑竜」から始まりました。

健康が第一と歩く事が目的で歴史は第五ぐらいにと気軽に参加したが初参加で案内人鈴木先生、郷土博物館内田

館長の説明にとりつかれてしまった又、吞菴上人が春日部で生まれ十四歳で林西寺に入寺と知り身近にこの様な上人がいた事に感激、さっそく白龍山林西寺に行くこの変りよう自分でもおどろき、次回の晩秋の鎌倉にも出合いと夢がありそうなので参加申し込み行く先々にロマンがある、人と物との出合い楽しい史跡めぐり、毎回参加しようとおもいつつ初参加の思い出が忘れられません。

「鎌倉」平成五年十一月

匿名

私共仲間が初参加させていただきましたのは平成五年十一月二十八日、第二〇五回の「晩秋の鎌倉を訪ねて」でした。晩秋の鎌倉！何とロマンチックなひびきではないですか？すぐ申し込んだのを覚えております。鎌倉といえ、北鎌倉で降り、定番ともいえる場所しか考えていなかったのですが、今迄一度も行ったことのない鎌倉宮、覚園寺、瑞泉寺、法華堂跡、頼朝墓、荏柄天神、と目新しい所ばかりで、こんな所もあったのだと、そして委しく説明していただき又々物知りになった気分になったり、受験の子のためにお守り買ったり（合格す）と楽しかった事思い出します。

それから夢いっぱい市の市内バス、帰途には貸切電車の様な始発電車と何もかも始めてづくしのことばかり。

これは毎回のことですが、役員さんのみなさんには、これ以上大変な事はない様なお世話をしていただき私たちは迷わないようにと後をつけて行くだけ、何んと幸せなことか。参加する毎に感謝の気持ちでいっぱいです。

ほんとうにありがとうございます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

「古河西部」平成六年四月

佐藤 光夫

私は草加のある病院に勤めて居て老人等の世話をしていました。が定年にて家で待機して居る時隣家の鈴木種雄さんから越谷市郷土研究会が史跡めぐりをして居るのでとお誘いを受けて平成六年四月二四日に第二〇九回古河市の史跡を訪ねるに参加しました。

歴史等の興味はなかったのですがいろいろと見聞きしているうちに、だんだんとおもしろさが出てき特に寺・神社等の彫刻に魅せられて居ます。また当日は天気もよく河原で食べたお弁当が大変美味しかった。

「初冬の北鎌倉」平成七年十二月

中道 康

会社定年後何かの会に入りたいと思っっている時に広報で研究会のある事を知った。最初は初冬の北鎌倉史跡めぐりであった。まず多勢の方々が南越谷駅前に集合している事に驚いた。又一日よく歩いた。

鎌倉には数回観光で行ったが研究会での説明を聞いて本当に良かったと思う。継続的に資料を観る事によって年代についての知識が不可欠になる年表等の勉強もさせていただきました。

幹事や先生方のご努力に敬意を表します。

「北千住方面」平成八年一月

武藤すみ子

こしがや広報をみて「千住七福神めぐり」に参加しました。偶然に隣の奥さんも参加されていて、知らない人たちばかりのなか、ほっーとした記憶があります。

幹事さんの一人が撮った「大黒天とねずみ」の写真を、くじで当てていただき、正月早々、ラッキーな気分にな

りました。

「いちかわ市」平成八年三月

水上 清

日記より抜粋。

三月二四日(日)、曇のち晴。T氏の紹介で越谷市郷土研究会の第二二八回史跡めぐりに初参加。

総勢六七名で、知った顔もチラホラ。今回の案内者は小原勘三郎氏。大学の同じ学部同期生と知りビックリ。さらにKクラスという。このクラスにいた藤沢中学・高校時代の友人、加藤明氏の雄姿を思い浮かべる(彼はペルーの女子バレーをオリンピックの最強クラスにまで育て上げた国民的英雄となったが、若くしてリマで天逝し、時の大統領と共に当地の墓地に眠る)。

北総開発鉄道には初乗り。歴史博物館、考古博物館や堀之内貝塚、じゅん菜池緑地、須和田遺跡などで、古いいちかわ市についてジックリ学習。

下総国分寺、国分尼寺跡と国分僧寺は、是非、訪問したかった遺跡。国力が未熟で、たいへん無理して建てられた由。「手児奈」信仰に係る靈堂、弘法寺、亀井院などたいへん興味ぶかく学ぶことができた。

配布資料は写真や絵・図が豊富で記述も簡潔。小原氏の案内説明も歯切れよく分り易かった。歩いた距離は七、八㎞か、ハイキングを兼ねた楽しい一日であった。

「岩槻方面」平成八年四月

林 佳子

越谷広報で郷土研究会の存在を知り自分の住んでいる郷土の歴史にふれてみようと思入会したのが平成八年四月の資料が保管してあり「城下町岩槻を訪ねる」でした。

人形の町岩槻は情報で見聞していたが岩槻城、寺院・神社、資料館など、案内役先生の解説付きで、大変勉強になりました。

又何よりも毎回立派な資料付きで、本当に助かります。

高年になると説明を聞いた時はわかってても、時間と共に忘れがちですが、必要に応じて資料をめぐることで更に知識を得ることができ、大切に保管しております。

又歩くことにより健康にも良いし今後都合のつく限り参加したいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。最後に初心者ですが一句

史跡めぐり 長蛇の列や 夏帽子

「新宿方面」平成九年正月

匿名

市のお知らせの中に史跡めぐりの会々員募集のご案内をみて、心にひかれていた折、友人のお誘いをうけて申込みました。初参加は新宿の七福神めぐり。

私の予想をはるかに上回る大勢の方達のご参加に、本当に驚き、この会の人気のたかさを知りました。

若い方達が多いのではないかと思っておりましたが中高年の方もお見かけして一安心。

神楽坂から始まった七福神めぐりは、普段何気なく通っていたり、バスの窓から見かけたことのある神社が目的の場所のひとつであったりして、これも驚いた事の一つでした。

皆様、歩くのが速くて、ついていくのがやっとの思いで先生のお話も耳に入らず残念でしたが、初詣に何か良いことがある様で、幸せな気持ちで帰途についた事をなつかしく思い出しております。



「新宿七福神」平成九年正月

斎藤 博道

史跡めぐりの初参加が、平成九年正月の新宿山の手・七福神めぐりと、我ながらなんとも縁起のよい嬉しい初参加だったなど、今でも幸せな気持ちであります。

顧問の小島誠先生のご紹介で越谷市郷土研究会の仲間に入れていただき、史跡めぐりに初めてご案内をいただき、参加させていただいたのです。初めての参加で驚きました。

①史跡めぐりは、昭和四一年二月十七日に始められてなんと第二三七回という回数をかぞえるたいへんな歴史をもっていているということでした。

一回の史跡めぐりを計画実施するには、それは準備から実施当日の手配など、たいへんな労力と時間を要することを知っているだけに驚きました。

②当日は一三〇名の参加者であることを伺いました。

この大部隊が、整然と何の滞りもなく無事に終わるのですから驚きでした。多人数の参加者を引率し、電車を乗り継いでの史跡めぐり、考えただけでも会長さんをはじめ役員の皆様方のご苦勞が思われ、子どもたちを引率して遠足や社会科見学をした経験をもつだけに、役員さん方の周到な準備手配に驚きました。

見学して歩いた七福神も初めて拝見させていただいた喜び、ご案内の先生の話に感銘を受け、以後、できるだけ史跡めぐりに参加させていただいております。

「川本町方面」

関根 綾子

昭和四二年以来あこがれ乍らなかなか参加出来ず始めての参加は鹿島古墳群・嵐山重忠の墓など、足の弱い私

は必死のおもいでラストを歩みました。

でも詳細な説明を伺ひ体験することは、いにしえにタイムスリップしてたのしい一日でした。

前住地鎌倉時代のことにも共通して、毎回のおしらせに参加出来なくとも、歌材吟行とまではいかなくとも、現地にゆき、歴史体験することの素晴らしきは忘れられません。健康と自由が保てたら終生お供させていただきます。

「鹿島・香取」平成九年九月

宮本町 老女

郷土研究会初の「バス旅行」は鹿島、香取参宮でした以前から一度お参り致したく思っ居りましたので、大喜びで参加致しました。

昔から「鹿島立ち」と云ふ語感にあこがれて居りました。本殿の質素なたゞずまいは、意外でしたが念願が叶って満足でした。足が弱り、一日中、歩くのは無理ですがバス旅行ですと参加出来てうれしく思います。

N・M

初めて参加させて戴いたのは小石川植物園でした。東京に十五年も住んでいながら、一度も行ったことなく私も定年になったばかりでしたので、妻と姉で参加しました。いろいろな歴史のある寺院・墓などに触れ、又皆様がお元気で活躍されている事に、これから生きて行く楽しさを教えられた気持ちです。

又私事ですが、越谷生まれの越谷育ちですが先祖の事が少しでも判ったらな〜と思います。

妻の両親も越谷草加（川柳）の生まれで父親の祖先とも

聞き及んでいきます。三〇〇年からの過去帳があるやと聞き及びます。是非拝見したいものです。これからも永く参加させていただき種々勉強し楽しみたいと思います。

「小石川方面」平成九年十月

関根 正直

長い療養生活から解放され、体力が徐々に戻ってきた頃、越谷広報に「史跡めぐり」の案内が載っていた。

以前、友人の宇田川さんから歩きを主体とした行事があることを聞いていたので、これではないかと確かめたところ、そうだという。早速参加を希望したところ、宇田川さんが代わりに申し込んでくれた。

去年の十月のこと、電車を乗り継いで東京小石川周辺の史跡探訪である。私にとっては久しぶりの外出なので総てが新鮮であり、また感動の連続でした。

それになによりもただ歩くのみでなく、名所史跡を訪ねるのが目的の歩きなので、余り体力のなかった私にとってはありがたかった。

無駄のない行動計画と豊富な資料を提供される役員さんの努力に感謝しつつ、これからも「史跡めぐり」に参加していきたいと思っております。

「蕨・戸田」平成十年五月

染谷 雪子

五月に入会させていたゞきました。どうぞよろしくお願い致します。幾十年も家事に明け暮れ歴史とは程遠い思いで参加させていたゞきうれしく思いました。

諸先生方の御説明をいたゞき、昔人の歩みし足跡に一つ一つの思いが走馬燈の様に頭を駆けめぐりました。

神社、寺の由来、昔の人がどんなに神仏を信仰し頼りにし、自分達の生活の支えにしたかを感じました。日本ではじめての成年式をあげた蕨市、力持ちの三の宮卯之助氏、諸々の仏教に関するお説はとても興味深いものでした。

これからも勉強させていただきたく、又会の御発展を念じております。

「東海七福神めぐり」平成十一年一月

古沢 孝

昨年、四十余年の会社人間を卒業し、九月末に第二の故郷越谷にもどり、暫くぶりに久伊豆神社にお参りしました。史跡めぐりの皆様とお出合いし、その中になつかしいお顔の方々がおられ、郷土研究会のお話を伺い、即刻入会の申し込みをさせて頂きました。

本年正月三日の東海七福神めぐりに参加致しました。

先ず、郷土研究会の三十余年のあゆみの歴代の役員様のご努力に依り二六〇回を重ね、企画、資料等の充実、百人もの多勢の参加者があり驚きました。

鎌倉、室町時代の江戸湾の港として栄えた品川、江戸時代の東海道五十三次の第一の宿場町の由緒ある七福神を山田政信先生の深い知識のご案内に依り、旧東海道を当時の人の往来をしのびながら歩き、町民文化の七難即滅七福即生の古事による参詣の信仰の深さを感じました。

貴重な歴史の一頁を体験させて頂きました。又、久しぶりに良く歩きました。

(約一万六千歩、十一・五㎞)

# 史跡めぐりの記録

第二四〇回 大船・藤沢

記録 宮川 進

・日時 平成九年三月三十日(日)

・天候 晴

・参加者数 五十六人

・案内 水上 清

南越谷駅七時三〇分集合。北朝霞駅で、ホリデー快速鎌倉号に乗換え、一路、大船駅へ。途中からだいぶ混んできたが、当会のメンバーは座って楽しい旅。大船駅からはバスで「田谷洞窟」へ。真言密教の修行場であり、人工の地底大伽藍。

「継続は力なり」です。

大船駅へ戻るバス停への道で、堤竹幹事が最愛の娘さんからのプレゼントの帽子を風に吹き飛ばされるハプニングあり。

お気の毒！でも、うっかり忘れたのでないことは証人がたくさんいます。

大船駅前の大船観音へ。山の上の大船観音は私としては「鎌倉・大船の景観を台無しにする大嫌いなもの」。

近くから見て、多少、感じがかわるかとも思ったが、この俗悪さはかわらない。

大永六年の合戦の時の戦死者を弔う「玉縄首塚」を見る。フラワーセンターで、花をみながら昼食。谷岡会長は食事の

途中で、仲睦まじすぎるアベックを避けて移動された。

食後、小島常任顧問と森屋氏が叙勲をうけられたご挨拶。

龍宝寺は玉縄北条氏の菩提寺。さすがに大きい、立派なお寺。

この近くで生活された案内の水上氏より実感のこもるお話がある。玉縄城を遠望す。

遊行寺へ。一廻上人を開祖とする時宗の総本山。寺域の広さは建長寺、円覚寺クラス。敵御方供養塔、黒い総門、榜示石など珍しいものを拝見。小栗判官満重と照手姫のお墓はかわいい。

掃路は藤沢駅より乗車し、乗り継いで南越谷駅へ。

今回は水上氏の「処女」ご案内。もう何回もご経験のあるような「すばらしい」ご案内でした。コースの設定もよかったです。

これからも、ぜひ、どんどん、ご登板していただきたいものです。

また、ほかの会員の方も、積極的に名乗りをあげていただき、多くの方が持ち味を発揮して新しい「ご案内」をしていただくのがよいのではないかと思います。



遊行寺 (藤沢市)

記録 若松 清一

・日時 平成九年四月二七日(日)

・天候 晴

・参加者数 九十六人

・案内 鈴木 秀俊

今日は館林を訪ねる。

電車はほぼ一時間後に館林駅に到着する。駅の外観をカメラにおさめる。予定にはなかったが近くの古い井戸に立ち寄る。

鈴木先生のお話によると、このあたりにお寺があり、それが近郊に移り、この井戸だけが残ったのだという。

少し歩いて大道寺に寄る。生田万と御両親の墓を見学する。

生田家は、越智松平家の家臣として、代々仕えてきた。

生田万は享和元年(一八〇一)に館林の大名小路で生れ、名は多門、国秀とも称した。万は好学の熱意を持った家臣で、八、九歳から藩校「道学館」で学んだ。

当時、幕府が奨励する朱子学に対して、平田篤胤の推進する国学が流行し、万は次第に国学へ傾倒し、文政六年(一八二二)館林城下出身の荒井静野の紹介で平田篤胤の門に入る。

その後、文政十年(一八二七)に、万は藩政改革を唱えた意見書「岩にむす苔」を藩に提出する。これが、藩主斉厚の怒りに触れ、翌文政十一年(一八二八)、藩籍を除かれ、領外に追放される。

その後、万は江戸に出て、平田篤胤のもとで、門弟たちの教授

を手伝った。数年して、父の死を機に故郷に帰る。

隣接する太田に住み、天保七年(一八三六)、越後国柏崎に移住し、国学の私塾を開く。

この頃、天保の飢饉で柏崎地方の領民は困窮を極めていた。それにもかかわらず、代官の悪政が跡を絶たなかったため、これに憤った万は、翌天保八年(一八三七)、領民とともに、代官陣屋や米倉を襲撃する。万ら領民側は敗れ、万は敗死する。

この年、大坂では窮民救済を目的にした大塩平八郎の乱が起ったが、生田万もこれに影響されたといわれている。

参拝を終えて、大道寺を出る。館林城跡三の丸の方向に向って広い道を進んでいく。まもなく、左側に皇后さまのご生家の

正田家が見えてくる。館林城跡の三の丸土橋門に着く。

ここは市街の東側にあたり、城沼の北西畔に残る館林城(平城)の跡であり、築城工事のとき、きつねが城の縄張りを教えたとかで「尾曳城」とも呼ばれている。

図書館前に到着。図書館、郷土資料館を見学する。

わが国の建築史では、幕末から昭和二十年までを「近代」、

その後を「現代」と区分している。今、私たちが目にする「日清製粉記念館」は、近代産業が発達していた時期に造られた建物で、構造や細部に、西洋的な技法やハイカラな意匠がほどこされており、建築にたずさわった者として懐かしい親しみを感じる。小生は思いをこめて、カメラにおさめる。

「花山」と呼ばれるつつじヶ丘公園に入ってゆく。

名が示すように園内は、ヤマツツジ、キリシマツツジ、リュウキュウツツジなどで埋めつくされ、一帯が赤く染まっている中

を、老生は久しぶりに明るい心を胸に、美しい景色を見ながら進む。

第二資料館に到着する。館林市ポランテアの高瀬さんの案内で、館内をゆっくり見学する。歴史の森の現代ゾーンを構成するものとして、園内には明治四一年（一九〇八）から同四三年にかけて建てられた上毛モスリン株式会社の本館事務所と田山花袋（一八七一一一九三〇）が六才から十四才まですごした家が移築されている。

ここらあたりは、館林城の本丸跡という。現在の子供科学館の敷地に本丸があり、その西の市役所のあるところには二の丸があったという。文化会館敷地に三の丸、本丸の南に南郭、東に八幡郭と並び、城沼に突き出した台地を区切って作られてあったという。八幡宮は、館林城築造に際し、城の守護神として勧請され、歴代の城主に厚く崇拜されたと伝えられている。これらは現在の市の文化財に指定されている。

第二資料館と田山花袋の生家の見学を終えて、尾曳稲荷を参拝する。尾曳稲荷神社は、旧館林城本丸にあたる稲荷郭にあたり、赤井照光が館林城を築いたとき、狐が尾を曳いて案内し、城割りを示したと伝えられ、城の鬼門に守護神として、この社を創建したと伝えられる。

次の目的地、つつじヶ丘公園に向って出発する。

一帯が赤く染めつくされている。園内、一面のつつじの中、尾曳橋をわたり城沼に沿って進む。

館林のツツジには悲劇のヒロインにまつわる伝説が残されている。館林城主、榊原康政の側室の辻の方は、城主の寵愛を一

身に受けたことから周囲から妬まれ、その苦しみに耐えかねて城沼に身を投げた。この霊を慰めるために、村人たちがツツジを植えたのがはじまりという。

水産学習館の前に到着する。ここで全員、一時間の自由行動となる。水産学習館とつつじヶ丘公園温室をまず見る。

美しい花山を散策し、元の道をたどり、集合場所にもどる。

つつじヶ丘公園を出て館林駅に向う。館林駅で帰りの切符を頂く。十五時十分発の浅草行の準急に乗って帰る。

風涼し 尾曳稲荷の緑樹影

春風に花袋の夢あり 大銀杏

素心

素心

館林史跡探訪

若松素心

万緑千紅一徑風

優游探勝醉花叢

古城軍壘空黄土

唯有橋門感慨中



館林城三の丸土橋門

第二四二回 間久里・大里の石仏

記録 山田 政信

・日時 平成九年六月一日(日)

・天候 晴

・参加者数 六十四人

・案内 加藤 幸一

越谷市北部の石仏めぐりに参加する。

加藤先生の資料をみるたびに、いつもながら、緻密な図法により見事な図版が再現されているのには、感服のほかはない。

上間久里・閻魔堂前の路傍に石仏群がある。地区内に散在のものを集めたとか、上部を屋根で覆っている。

地区の信仰の一端を知ることができる。不動明王・眷属の矜羯羅・制吒迦の両童子の線彫り像・庚申塔の石仏について加藤先生より種々の説明がある。特に線彫り像の作画についての説明には、会員の方々も感嘆の声を発していた。

〔参考〕庚申塔の台石(又は塔の下部)に刻されている猿の像は、圧倒的に三猿が多い。一猿・二猿・群猿もみられる。一猿の場合は、主尊として描かれ、一鶏を伴って

刻まれることがおおい。二猿はふつう向いあわせて、横向きで拝む姿がおおい。群猿は藤沢市江ノ島にある。時として三番叟の形をした三猿をみることもある。

閻魔堂内の閻魔王を拝観する。種々の説明がある(閻魔信仰は十王信仰の影響によるもので、単独で閻魔王のみの造立がよいが、時として奪衣婆との併祀もみる)。

下間久里地区下堂の地藏菩薩像の拝観のあと、境内の筆子建立墓塔・阿弥陀、如意輪彫り像墓塔・板碑型庚申塔など石仏について説明がある。なかでも興味をひいたのは、寛文五年造立の初期の庚申塔で、この板碑型の庚申塔の下部に蓮の花を彫っている。これは庚申信仰の二世安楽の奉修の理念から彫られたものと思われる。

人びとは、死後、蓮の花さく極楽の世界に生まれ変わるよう安住を祈念して蓮を彫るとの説がある。

しかし、庚申塔に彫るのは珍しいのではないかと思う。墓塔に彫ってあるのは、時どきみることがある。

越谷だるま工場を見学する。当日、工場は休業のため、実際の作業は見学できなかった。工場内で、だるま製作の工程・製法について、当主の松崎氏より説明をうけた。

別室で各地の製品との比較、高崎だるまとの相違点などについて解説をうける。

昼食時を利用して、平家（なぐさ）に保管されている越谷市文化財指定の算額を拝見させていただく。加藤先生より詳細な説明を聞く。現在の微分・積分などの問題を算額にて解くという。

他流試合と称し、問題を算額にて示し、神社境内等に掲額し、解答を求めることが行われたと聞いている。

石仏探訪で地方を歩くと、鎮守に掲額されている算額をみる必要がある。この平家の算額も、資料館に保存する対策を講ずる必要であろう。

午後は、路傍にある第六天祠・大里地区の庚申塔・文字庚申塔の石仏を見学し、大袋駅で解散となる。

石仏めぐりで、話合ったり、談話の中から「石仏の魅力」ということでまとめてみた。

石仏の魅力のとらえ方も無数にあると思う。その中で石仏の魅力を感じていくかということになるが、日本の木肌をめでようとすると美意識の中で、石という素材の魅力の一つは、その重々しさがあげられるだろう。

「石仏と語る」と諸先輩はいうが、自然の中で石仏と相対するうちに、考えがすまされてゆくのも、魅力であろう。

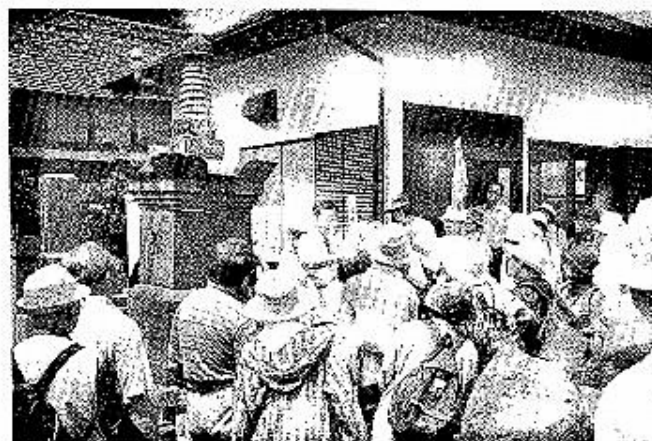
それは石仏をいかに見つとくすことではなかるうか。

石仏の尊名・年代・様式・社会的背景などを踏まえて、資料的な見方、文学的な見方をするかであろう。

石仏は、美の対象として造られたものではない。

しかし、畏敬の念をもって造られた石仏には、醇美が伴ってくると思われる。

これからも「石仏と語る」を目標に石仏を追う旅を続けたいと考えている。



石仏をめぐる

## 第二四三回 ウォーターフロント

記録 森田 三郎

・日 時 平成九年七月二十七日(日)

・天 候 小雨のち晴

・参加者数 七十二人

・案 内 宮川 進

昨日は台風の風雨でしたが、今日は晴天となりました。

中目黒行きに乗り、京急大森海岸駅で下車しました。

小雨降る駅の東口を降り、陸橋を渡り海岸方面に向いました。

予定どおり磐井神社に着きました。

神社では祭りが近いので、その準備をしていました。

境内で宮川先生より、鳥石や神社の由来のくわしい説明を聞きました。

歩いて十分位で水族館に着きました。品川区民公園内にありとなりには平和島競艇場、大井競馬場があります。

水族館は休日のため、子どもたちで混雑していました。

左右の水槽には珍しい魚が泳いでいました。中ほどでは、頭上で魚の群れに出会い、びっくりしました。

魚の群を楽しんでいるうちに、いるかのショーがはじまる時間になりました。いるかはかしこい魚なので輪をくぐったり、愛嬌をふりまいたりしました。

船の乗船時間がせまり、食事はゆっくりできません。

水族館をでて日の出桟橋で観光汽船に乗りました。

風が強いため帽子がとばされそうでした。船よりの眺めは、ま

た格別でした。船は日の出棧橋に着きました。

ゆりかもめにのり新橋駅経由で、築地へ向いました。

私たちは聖路加病院の方へ歩きました。浅野内匠頭邸跡碑、豊前中津藩中屋敷跡、蘭学事始の地碑、慶応義塾開塾の碑などがあり、福沢諭吉の説明がありました。

さらに居留地の説明もくわしく話していただきました。

現地で見物を見て、説明がありますと興味をもって頭に入りました。次に明石町資料館に入りました。大正・昭和時代の手紙や写真の展示を見ました。

そのあと、聖路加タワーのエレベーターで展望室にのぼりました。

近くに大きな建物が見えました。当日は見晴しがよく、隅田川や橋も、それにレインボーブリッジ・お台場などが見えてラッキーでした。コーヒショップで休憩しました。築地駅まで歩き、地下鉄駅前で切符をもらい、帰路につきました。

天候にもめぐまれ、よい一日でした。



浅野内匠頭邸跡（築地）

## 第二四四回 香取・鹿島

記録 水上 清

・日時 平成九年九月一〇日（水）

・天候 晴

・参加者数 四十九人

・案内 宮川 進

越谷市郷土研究会としては、初めての試みであるバスでの史跡めぐり。快晴に微風、まさに絶好のツアー日和である。

南越谷駅前を予定通り八時出発。蒲生観光のバスは、バスガイドの風物観光案内に聞き入っている間も、東京外環より首都高速・湾岸線を経て東関道を佐原へ向ってひた走る。

バスは順調に走り、予定より約一時間早い十時十五分、佐原は香取街道の忠敬橋（たかたけばし）のもとに到着。

「お江戸見たけりゃ 佐原へござれ 佐原本町江戸まさり」と里謡は唄っている。忠敬橋を中心とした小野川沿いが佐原の中心で、江戸時代から明治にかけての蔵造りの建物が川べりに並び、利根川舟運による河港商業都市として賑いを見せた往時が偲ばれる。

先ず、小野川に面した「伊能忠敬旧宅」を観る。

商家造りの平屋建。忠敬自身の設計により一七九三年（寛政五）に建てられ、彼が商人として三十年余りを過した。

旧宅裏にある「伊能忠敬記念館」には、測量図や実際に使用した測量機械など一〇〇〇点以上を展示。

緯度・経度をきちんと測り、これを日本で初めて地図上に示し



た。現在の地図と殆ど差異がない高い測量技術と正確さに驚嘆。しかも測量技術を学び全国各地を測量して巡ったのは、隠居後、五十歳をこえてのことであり、ただ感心し頭が下がるばかり。忠敬旧宅前で、環境庁の「日本の音風景百選」の一つとなっている「樋橋の落水」の音を聴く。

江戸時代には水田に送水するために造られた小野川を横切る大樋で、そこから水があふれ落ちる音から「ジャージャー橋」の愛称で親しまれた由。近年、樋橋と落水施設が復元された。

昔なつかしい瓦屋根と川沿いに点々と植えてある柳が何とも風情がある。

忠敬橋のたもとにある

『中村屋畳店』安政二年建築。

『正文堂書店』県有形、明治十三年建築、黒塗りの土蔵造

り二階建て江戸時代の店蔵の形式を残す。

『小堀屋本店店舗』県有形、明治三十三年の建築、明治時代のそば屋の店舗形式。

『佐原市三菱館』旧川崎銀行佐原支店として大正三年に建てた二階建て、明治期のレンガ建築の様式を残す。

などを見て、佐原の町並みを楽しむ。

次は、八坂神社境内にある『水郷佐原山車会館』。

毎年、夏と秋に行われる祭礼の山車（常時二台）と祭に関する資料を展示。絢爛豪華な山車の実物を身近に見、さらに三面パノラマ画面で「佐原二大祭」の映像を見る。

祭の熱気と市内を練り歩く二十四台の山車の迫力を実感。

バスは佐原市外にある香取神宮に移動。

下総国一の宮として古来から多くの尊信を集めている。

祭神は「日本書記」の国譲り神話に登場するフツヌシの神で軍神として崇められてきた。うっそうと茂る老杉に囲まれた神域は森厳な雰囲気をかもし出す。

朱色の大鳥居をぬけると参道の両側は桜並木が続く。

本殿と楼門（ともに国重文）は、一七〇〇年（元禄十三）に五代將軍綱吉が造宮・寄進。権現造りの本殿は黒を基調にして鮮やかないりどりが加えられて華美。

本殿となりの「宝物館」では海獣葡萄鏡（国宝）や古瀬戸黄釉狛犬・双竜鏡（ともに国重文）のほか多数の神宝類・古文書類を拝観。

見上げるとイチヨウの巨木に鈴なりの銀杏が匂う。

気温は三〇度近くに上昇、日当たりの参道は猛烈に暑い。

昼は、一同揃って参道入口の亀甲堂で釜めしと、そばの御膳をいただく。暫時休憩・自由行動のあと、バスは霞ヶ浦近くの水郷地帯を通過して潮来町大生に到着。

早速「大生古墳群」の三号古墳を見学。宮川幹事の説明には熱が入る。北九州の多氏は早く五世紀頃から太平洋の黒潮に乗り常総地方に海路侵入し、有力な氏族となった。

この古墳群は六世紀後半から七世紀後半にかけて築造され、多一族が埋葬されているという。

次は「大生神社」。大生古墳群に囲まれるように鎮座する。

三間社造りの立派な社殿。一五九〇年（天正十八）の再建とある。もとは多氏の祭祀する神社であったが、祭神タケミカヅチ

の神が「大生宮↓春日社↓大生宮↓鹿島社」と移ったので、「元鹿島の宮」とも鹿島神宮の「別宮」とも称され、鹿島神宮の斎宮が大生神社の域内から出された……宮川幹事の解説がとうとうと流れる。

最後は「鹿島神宮」常陸国一の宮として古来から多くの尊信を集めた東國の大社。祭神はタケミカツチの神で、日本の国を一つにまとめた武神として、のちには水陸交通の要所であった鹿島に鎮まり、平和を護る神として仰がれてきた。

櫻並木の参道を進んで大鳥居をくぐると、朱塗りの雄大な楼門（国重文）、それをぬけると右手に徳川二代將軍秀忠が奉納した五間三面入母屋造りの拜殿と三間社流造りの本殿（国重文）がある。鹿園を経て奥参道の終点に奥宮（国重文）があり、右の道をたどると「要石」に出会う。

直径二〇cmほどのただの丸石には少々拍子抜け。地震封じのため大鯨の頭を押さえるために置かれたとの伝説がある。

参道を戻り拜殿前の『宝物館』に入る。

日本最古最大（二、七m）の直刀（国宝）をはじめ、源頼朝が奉納した鞍（重文）など貴重な宝物が数多く陳列されている。

本日の宮川幹事の説明及び資料のなかで、かなりのウエイトがおかれたのは、日本の古代史において藤原（中臣）氏がその政権を確固たるものにするために、他氏の祭祀権を奪い独自の氏神を整備していった経緯であり、興味深いものがあった。

鹿島・香取の両社は、初め物部氏・多氏らの氏神であったが、藤原（中臣）氏はその権力でこれらの祭祀権を奪っていき、やがてわが国の神祇政策を掌握した。

そのシンボルとして皇室の氏神⇨伊勢内宮・外宮に対応する藤原（中臣）氏自身の氏神として鹿島・香取を整備し、官社化を推進していった。

・七六〇年代に大和国春日に中臣の氏神二座と鹿島のタケミカツチ、香取のイハヒヌシの四座を合祀・氏神とし、この春日大社を官社とした。

・鹿島・香取の両社は古代の官社のなかで特別な扱いを受けた。例えば「延喜式」神名帳で「神宮」と書かれているのは、伊勢の「大神宮」を除けば両社のみ。

・鹿島・香取のペアは、伊勢神宮の内宮・外宮の関係を模し、「祀られる神」と「祀る斎主」との関係におかれた。

バスは十五時五〇分帰途につき、往路と同じ道を引返す。発車直後に出されたみずみずしい梨のおいしいこと。

世話役の気遣いに感謝する。「バスの史跡めぐり」についてのアンケートがとられる。しばし歌謡曲を聴き、やがてTVで秋場所大相撲を観戦。バスはスムーズに流れ、予定より三〇分早く、十八時三〇分南越谷駅前に到着。

天候にも恵まれ、秋の一日を心ゆくまで楽しむことができた。全員なんらの支障もなく、これだけ沢山の史跡を効率的にめぐることができたのも、バス利用のメリットというべきであろう。世話人の方がた、誠にご苦労さまでした。心より感謝します。

記録 平川 陽三

・日 時 平成九年九月二八日(日)

・天 候 晴一時雨

・参加者数 八十一人

・案 内 野村 勝八

本日の史跡散策の行程は「太子堂」松蔭神社」代官屋敷・郷土資料館」世田谷城址」豪徳寺」である。

六〇才半ばの私にとれば、ついこの間までは、越谷から三軒茶屋へ行くとなれば、半日掛かりであったような思いがする。

地下鉄半蔵門線と東急玉川線の相互乗り入れにより、ずいぶん便利になった。

越谷から三軒茶屋までの所要時間は一時間二〇分程度。

三軒茶屋に着く。

地下の構内から階段を上がって表へでると、「打っ魂消えた」ビルが建ち並び、歩いている女性も髪が長く、顔が小さく、足長く、八等身の美人ばかり。(「今日この頃、八等身なんていうと若い者に笑われるかも知れない。」)

夕暮れともなると品物が道路にまで食み出し、裸電球の下で向こう鉢巻きの親父さんが、いを発音しないで『らっしゅい、らっしゅい』と唄れた声で威勢よく客呼びをしていたあの懐かしい街の様は全くない。

あの親父さんは、地上げ屋に追い出されたのだろうか、それとも、しゃれたビルの奥に取り澄まして店番している御隠居さ

んに変身したのだろうか。

太子堂が在る法明院の塀際に、林芙美子が住んでいた二軒長屋と記した史跡表示板があり、同寺の墓地の塀越しに曾て壺井夫妻、林芙美子が住んでいたという二世帯住宅が、周囲の家々にそぐわず、申し訳無さそうに現存していた。

しかし当時の東京市民のおおかたの者は借家住まい。そして借家は上の上が一戸建て、二世帯住宅は上の部、少なくとも中の上だ。長屋とは棟割長屋のことをいい、二世帯住宅を長屋とは言わなかったのではなからうか。

壺井夫妻、林芙美子が住んでいた当時は、緑も多く木漏れ日の差す、落ち着いた瀟洒な家であったのではなからうか。

(「ちょっと大袈裟かな」)

松蔭神社に、吉田松陰三〇才で処刑され、その生涯を閉じたと記されていた。

日米和親条約が締結された直後、安政元年(一八五四)三月二八日、二五才の松陰は、下田沖からアメリカへの密航を企て失敗し捕らわれた。 ※日米和親条約の締結 同年三月三日

長州藩兵学師範(山鹿流)の家を継いでいた松陰がアメリカへの密航を企てたのは、外国の勢力が迫ってきた現在(アヘン戦争、ペリーの来航)、「自身の学問の有効性について、また兵学師範としての自身の責任と能力について悩んだ末、山鹿流兵学の役立たぬことがわかり、これに代わるものがあるか、自分で見つけられるか」という意図からであるといわれている。

その彼が、開国を図る幕府の老中間部詮勝襲撃を企て、これに失敗すると、藩主毛利敬親を尊王攘夷の基に幕府批判に立ち

上がらせようとして、急進派の公卿大原重徳に工作したがこれも露見し捕らわれて江戸に送られ、伝馬町の牢で斬殺された。わが国の男女の平均寿命が五〇才を超えたのは、昭和二二年（一九四七）で、それ以前は比較的低い水準に在ったといわれている。

松蔭が史上に名を留めたのは二五才―三〇才、当時は現在と異なり、二十半ばを超えた者は、すべてを任せられ思慮分別のある大人であった。

男では、三〇才で隠居する者もいた。また高貴な女性には三十路にして褥下がり<sup>とろご</sup>を申し出る女もいたということである。

一時は、外<sup>と</sup>国への遊学を考え、思慮分別のある二十半ばを超えた英才松蔭が、何故尊王はともかくとして攘夷に走ったのだろうか。

幕末史に興味を抱く私としては、松蔭の心の動きを辿れたらとの思いを強くした。

私たちが昼食を摂った若松公園に外人女性が子連れで遊びに来ていた。私達がなにげなく使っている外国人という言葉は、外国の方々には差別と偏見に満ちた言葉として耳に響くということなのでアイデンティティーを貴ぶ彼女に敬意を表し、仮にスエーデンの女性としておこう。彼女がノーブルな美人で心が魅かれたからではない。（―閑話休題―）

おそらく彼女は夫の仕事の都合で、夫とともに来日しているのであろう。

バブルがはじけて以来、日本経済は低迷し、企業はスリム化を計り、リストラが横行し景気は悪く、人々の心も何んとなく

ささくれ立ち、働く世代から「高齢者も自分の負担を」ということで、医療費負担も引上げられ、高齢者は「我々に死ね」ということかと悲鳴を上げている。

現役を退き六〇代半ばに達しようとしている私には、何とも居心地が悪く住み辛い日本だが、彼女の夫にとっては私達の国が「黄金の国」なのだろうか。

国民総生産五〇〇兆円は世界第二位、国民預貯金一、二〇〇兆円、勤労者所帯の貯蓄高二、五一〇万円。数字の上で日本は、外<sup>と</sup>国の人々にとっては「黄金の国」であろう。

安政六年（一八五九）自由貿易が開始され、長年の鎖国という国際的孤立から、一九世紀の欧米諸国の熾烈な貿易競争に組み入れられた日本は、急速な貿易の拡大により物資の需給関係の混乱と品不足により、物価は異常に高騰し、庶民はその日の暮ら<sup>か</sup>しに喘いでいた。

文久三年の物価騰貴について、勝海舟は「開国起源」で次のように記している。

此歳九月二入りては灯油壺升七十六文之処八十四文二なり、塩壺升は九十六文となり、針は先前より一本三文之処四文となり……、尤文政之頃より天保之初頃迄は米も三斗五升人之蔵米百俵にて三十七、八両にて四十両以上に及びしは稀なりしが、近き頃は五十兩以下之事はなく六十兩前後七十兩余に及べり、此兩三年は別に不作之聞へもなきに同断なり。

物価之登りも止むを得ざるなれど米価に比すれば格外にて交易出る品ならぬも何んとなく引上ぬ。

絹糸も以前は目方壺匁に付五十文前後にて五、六年前迄は六十

四文なりしがこれは海外之輸出盛成故にや。

開港以来は百文前後なり。此節は尅忽にて百八十文となりぬ。

しかし日本に滞在する各国の公館員は表向きは少ない俸給でも、馬を飼ひ、シャンパンを飲んだりする裕福な暮らしをして

いた。

日本に滞在する各国の公館員が裕福な暮らしをすることができ

る秘密は、日本側に不利に設定された為替レートにあった。条約により百ドルは、三一分と交換されることになってい

た(交換の際、貨幣造費として幕府に一三分差し引かれるから、手取りは二九八分)。しかし実際の為替相場は公定レートより

低く百ドルにつき二一四分(一八六二年九月)であった。各国の公館員はこの制度を悪用して百ドルを二九八分で交換し、

実際の為替相場を上回った額を、再びドルと交換した。

こうして百ドルの金は一三九ドル二五セントとなり、四〇%近い利鞘をかせいでいた。

この頃しばしば、ビックバンとやらの言葉を耳にする。金融市場開放、日本の金融マンが不得手とする分野を得意とする外つ国の金融マン日本上陸。

日本の一老人からお願ひします。『安政の二番煎じはご免で

いさる。』

子連れで公園に来ていたあのスエーデン女性の夫の来日目的は何だろう。彼女の夫は金融マンであろうか。

『豪徳寺……寛永一五年(一六三八)彦根藩主井伊家の菩提寺となり、藩主直孝葬られる。』と本日の資料に記されている。

直孝は井伊家中興の祖直政の庶子で、当初は二代将軍秀忠に

仕えていたが、直政のあとを嗣いだ兄直勝が病弱のため、家康の命により宗家を嗣ぎ、秀忠、家光、家綱と三代の将軍に仕え終には領知高が三五万石となり、譜代大名としては別格の扱いを受け、のち大老といわれる職に就いた(当時大老という職制はまだ設けられていなかった。)

この直孝系井伊家からは五人の大老が輩出している。

なお宗家を直孝に譲った直勝には、上野安中三万石が与えられている。

井伊家中興の祖直政は、遠江の名族井伊氏の嫡男として生まれ、父直親が不慮の死をとげたあと流浪し、一五才の時浜松城下で家康の目に留まり取り立てられた。

直政は家康の信任厚く、二二才で旗本一手役の長に抜擢された。この部署には三河譜代の本多忠勝、榊原康政があり、後世

直政、忠勝、康政の三人は徳川の三傑といわれ誉め称えられている。

直政の軍団は小牧、長久手の戦い等では、第一線で勇猛果敢

に活躍し、武具が赤色で統一されていたため、その勇姿は『井伊の赤備』と、もて囃され味方から畏敬され、敵からは恐

れられていた。

安政七年(一八六〇)三月三日、大老井伊直弼は桜田門外で水戸及び薩摩脱藩者により斬殺されたが、墓石にはその死を三月二十八日と刻まれている。

武門の誉れ高く名門井伊家としては、当主が狼藉者に襲われ

その場で刎ねられるということは、在ってはならぬ末代の恥辱

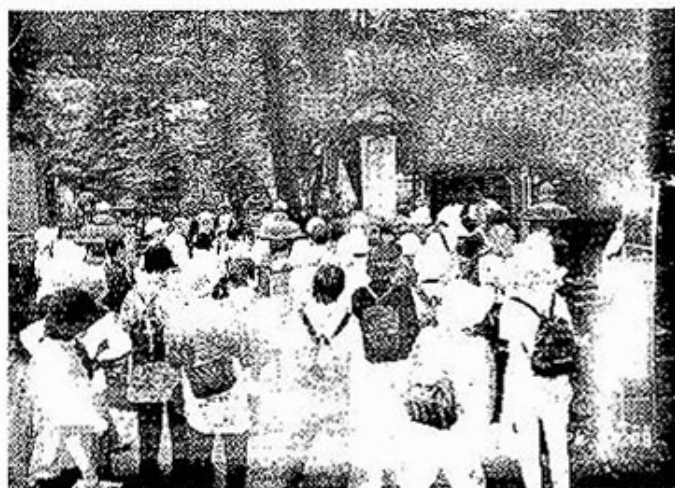
であり、墓石の「三月二十八日」には、この無念の思いが刻み込まれているのではなからうか。

彦根三五万石の飛地世田谷村の代官屋敷の庭に立つとタイムスリップして当時に在るようだ。文化財の保存は大変なことだ、努力している方々に対する感謝を新たにしたい。子孫のために宜しくお願い致します。

日程終了。さて引き上げるかというときに雨が降り出す。

道らずの雨、後ろ髪が引かれる思いで豪徳寺を後にした。

ご案内の野村様、本日は大変楽しい一時を過ごすことができました。お骨折りに対し感謝申し上げます。有難うございました。



井伊家の墓 (豪徳寺)

## 第二四六回 護国寺・小石川

記録 高橋 正輝

・日時 平成九年十月二十六日(日)

・天候 晴

・参加者数 九十八人

・案内 山田 政信

例年になく日中は汗ばむ陽気が続く晩秋。

絶好の「見学日和」に加えて「知っているようで、知られていない」江戸情緒が残る史跡の町・小石川とあって、ご参加の方々も百名にちかい。出発の前に期待の声が交わされる。

地下鉄護国寺駅で地上に出る。平日なら車の洪水で排気ガスや騒音に悩まれる音羽通りは、休日とあって人影もすくない。林立する高層ビルにも秋のやわらかい日の光が注ぐ。

路上に眼を転ずると、近代的なビル群を威圧するように広い境内の奥に縁に囲まれた本堂を背に、そそり立つ荘厳な山門に思わず「オォー」と皆さんから嘆声がどよめく。浅草の観音さまの仁王門のような華やかさではなく、どっしりと、数百年の風雪に耐えぬいた歴史の重みが迫ってくるようである。

五代將軍綱吉が生母桂昌院のために、当時の幕府の財力を傾けて創建した護国寺の歴史を世情をまぜながら、山田先生独特の節まわしの詳細なお話に耳をかたむける。

今次大戦の戦火をよくぞ受けなかったものと、神仏のご加護を改めて感謝すると共に、貴重な文化財が後代まで受け継がれることをのぞむ。

文京の名が示すように緑に囲れた学園が散在する脇道を歩む。都内に残る戦前の東京「山の手」の香を味わいながら、林泉寺深光寺を訪れる。現在はビニールの紐でしばられている地藏尊のお姿を見ると、庶民信仰の深さにただ驚く。

名作の蔭に知らない文字を覚え、慣れない文章を綴るために心血を注いだ「嫁みち女」の話に目をうるませて、同女の墓に手を合せる同性会員の姿がおおく見られる。

詩人啄木の終焉の地の碑が、人知れず片隅に忘れられたように建てられているのもわびしい気がする。

上り坂、下り坂、坂の小石川と聞いていたが、どこを歩いても坂ばかり、越谷に住んでよかったとつくづく実感する。

汗と空腹でたどり着いた植物園の昼食は最高である。

広大な園内にある珍しい樹木群は、別天地へきたようだ。

つかれが回復したところで午後の見学地・念速寺へ向う。狭い墓地に葬られている特志解剖第一号の美幾女の墓を詣で、今日、新聞紙を賑わしている「脳死」問題を思い浮かべる。

次の慈照院では今までの暗さを吹きとばすように、現代若人の元祖の辰巳屋惣兵衛という人の墓に思わず笑声が広がる。いつの時代でも変わった人がいるものだ。

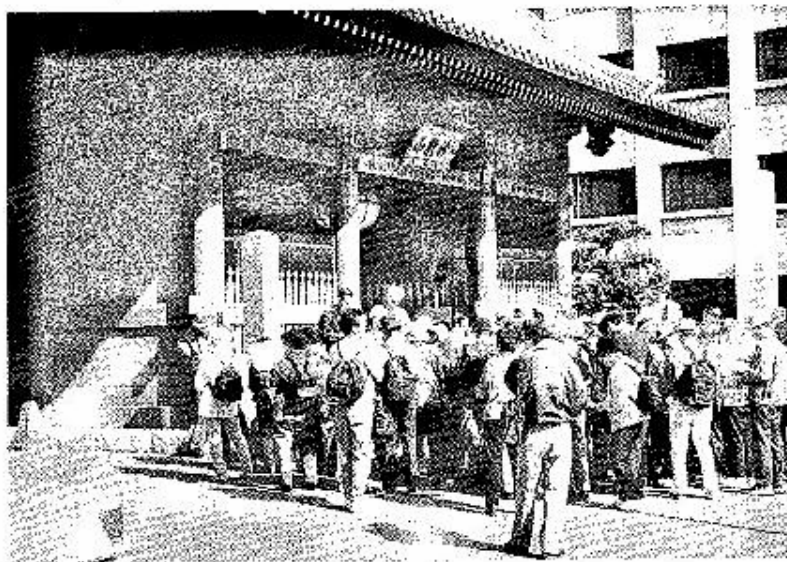
秋の日差しが弱まるのを感じながら、最後の伝通院に着く。上野、芝とならんで徳川家の三大寺のわりに寂しい寺である。

昭和二十年五月二十五日の大空襲で、本堂をはじめ諸堂塔が全焼したと聞く。戦後の財政難で再建もままならぬ由。

一步、寺地内に入ると墓園に林立する大きく美しい五輪の塔群に目をうばわれる。

なかでも神君家康公の生母於大の方（伝通院殿）、歴史にはんろうされた孫の千姫（天樹院殿）の墓前では、山田先生のお話をうなづきながら、熱心に聞きいる女性会員の方々の真剣なまなざしに、遠く過ぎ去った歴史を心の中に刻みこまれる姿を拜見する。

今日の郷土史めぐりは女性に始って女性で終るといふ、今までになかった企画に、役員の方々にお礼を申し上げて筆をおく。



護国寺(文京区)

記録 竹谷フミ子

・日時 平成九年十一月九日(日)

・天候 晴

・参加者数 六十四人

・案内 平川陽三・堤竹宏吉

「いるいる」、南越谷駅前ロータリーの向う側、なじみのスタイルの皆さん。今回は川口市安行(伊奈氏の足跡を訪ねて)である。二ヶ月近くも雨の降らない、晩秋にしては暖かな朝。九時十分に集合。気分は乗っていた。

武蔵野線東川口で下車、一駅だけの乗車のため、資料はじっくり読めず、ちょっと不安。駅前よりバスを曲輪まで七・八分乗る。車内は越谷市郷土研究会様ご一行という風。すこし走るとやはり安行、緑がだんだん多くなる。

明暦三年の世にいう振袖火事の後、植木、花木を出荷して大当たりしたことを機に、農家に栽培が広まったのが起りとか。地形・土質・農家の人々の弛まぬ努力、それと江戸という消費地を控えた地の利にも恵まれていたことが、今日の「安行の植木」という川口を代表する地場産業として発展した。

歩きながら資料を読む。今回も見学する所が多い。まずは、関東郡代、伊奈半十郎忠治が安永六年ごろ築いたとされる赤山陣屋跡に着く。

いまは売り物の植木がたくさんある静かな所だ。

昔の面影は、わずかな空堀が復元されているだけで、当時の規

模は六六〇〇坪といわれている。

「赤山陣屋絵図」という往時をうかがい知る資料があるそうで、見たいと思った。ご案内の平川さんの熱心な解説を聞きながらまっ青な空を見上げると、黄色に染まった銀杏の葉が二、三枚、風に舞っていた。

伊奈氏に関する記述は、今回の資料に詳しく書かれてある。りっぱな為政者がいたのだと感じ入った次第。

次は、伊奈氏の菩提寺として隆盛を極めたという源長寺。いまは家並の奥にあるお寺という感じ。お参りを済ませ境内を見渡すと、まっ赤なカンナの花がたくさん咲いていた。

すこし歩くと汗が出るような気温の中、お灸の寺として知られた金剛寺に着く。墓地には安行植木の開祖・吉田権之丞の墓がある。

寺の横の小振りて親しみのある葉葺の門から入りお参りする。参道の紅葉がよいという評判だが、一〇六年ぶりのからから天氣のせいで、植木も置石も、みな、ほこりっぽく精彩を欠いていたのでちょっと残念。

次は弁財天が近くにある興福寺に詣でる。伊奈氏の重臣富田氏が大檀那となり興隆に尽したので、中興の基とされている。墓地にりっぱな「すだ椎」がそびえていた。

二・三分離れた低地に、赤い幟を見つめる。弁財天だ。蛇の出でくる「ふるさと伝説」の話聞く。二基ある祠の内、一基は蛇を祀ってあった。

だいぶ空腹を覚えたころ、県の植物振興センターの広場で昼



食となる。食後、希望者だけセンター内見学。

その後、隣接する農協の園芸センターでお買物タイムとなる。

午後は弘法大師が鎮護国家のために、創建されたという西福寺へと歩く。途中、昼なお暗い深い竹林の中を抜ける。

さすが安行などなど、皆さん、口ぐちに足元に気をつけながら行く。変化に富んだ道を選んでくださる案内の先生は、下見が大変だろうと思う。

寺の入口で、まず、りっぱな三重塔に驚く。徳川三代将軍家光の長女千代姫が願主となり、元禄六年に奉獻したものとか、なにを祈願したものか、塔の前で写真を撮りあったりした。

昭和四十七年、県の有形文化財に指定されているという。西国、秩父、坂東の合せて百ヶ所の札所の観音像が納められている百観音堂をお参りした。

だいぶ歩いたので疲れをおぼえ、坐って休息をする。

帰りはバスで東川口に戻る。三時近かった。判りやすい資料と解説をして下さった平川・堤竹両役員さんと、健康的で知的満足も与えて下さった郷土研究会に心より感謝申し上げる。

ほんとうに充実した一日だった。

## 第二四八回 嵯峨合后

記録 斎藤 博道

・日時 平成九年十一月三十日(日)

・天候 曇のち晴

・参加者数 五十四人

・案内 宮川 進

晩秋の古都鎌倉の史跡めぐりは、案しみなコースの一つである。今年も鎌倉行きは参加者がおおく、二班(十二月七日)にわかれて実施となった。私たち第一班の一行五十四人が鎌倉駅に着いたのは十時二〇分であった。

▼異神社(寿福寺の鎮守神としては少々寂しい社)

鎌倉駅西口を出て、今小路を北へ向う。間もなく右に異神社。延暦二〇年(八〇一)坂上田村麻呂が奥州鎮撫の際、葛原が関に勧請。その後現在地に移したといわれる。寿福寺の鎮守神で寺の異(東南)の方向に位置するので異神社、または異荒神ともいわれている。かまどの神、火の神でもある。

▼刃稲荷社(石碑だけが正宗の名を残す)

異神社から更に北へ、源氏山へ通じる路地を左に入ると、道の右手に虚うつろになった楠かきの古木に抱かれ、ひっそりと刃稲荷がある。二mほどの高さの碑に「稲荷社 正宗屋鋪、焼刃渡」の文字が彫られている。案内の宮川様のお話によれば、この近くに正宗が鍛刀に使ったといわれる「正宗の井」もあり、湯加減に工夫をこらし、ここで作刀に没頭したにちがいない。

▼佐助稲荷（夫婦リスの遊ぶ頼朝再建の稲荷社）

佐助が谷の最奥、隠れ里に佐助稲荷がある。ぎっしり並んだ朱塗りの鳥居と赤い幟の中の階段を登りつめたところに小じんまりした社がある。

社殿の前に立つと辺りは異様なほどの静寂境である。

人慣れした夫婦リスが尻尾をびんと立て愛嬌をふりまいている。この社は建久年間（一一九〇〜九九）頼朝が畠山重忠に命じて再建したと伝えられている。

▼銭洗弁天（実利的信仰の社）

「銭洗弁財天宇賀福神社」の碑の建つ洞門をくぐると木肌のきれいな素木の鳥居の列が迎えてくれる。

奥まった洞内に鎌倉五名水の一つ、銭洗水が湧いている。この水で銭を洗うと百千倍になるといふ信仰があり、箆に入れてお金を洗う人があとを絶たない。

鎌倉の神社仏閣の中では珍しい実利的な社である。

▼和田塚（北条氏のライバル潰しの犠牲となった和田氏）

江の電和田塚駅を下りて、右手の由比が浜海岸に向かつてすぐ右に小高い丘があり、丘の上に高さ三m余の大きな石碑に「和田一族戦没地」と刻まれている。碑のうしろには無雑作に地面に並べられた無数の墓碑がある。

建保元年（一一二一）、和田義盛の息子と甥が北条氏打倒の陰謀に失敗し、義盛とそその一族の死者がこの地に葬られたといわれる。石碑のまわりには楠の木の大きな根が張り出し、枝葉が天蓋のようである。

▼畠山重保供養塔（関東武士畠山氏の終焉の地）

若宮大路一の鳥居の右手、大きな楠の木陰に明徳三年（一二九二）の銘をもつ大きな宝篋印塔が建っている。これが畠山重保の供養塔である。

父重忠は御家人の中でも関東武士の典型といわれ、頼朝の信任が厚かった。頼朝の死後、北条氏の畠山父子排除の目標にされ、北条時政に命じられた三浦義村たちによって重保が討たれたのが、この付近といわれている。

鎌倉時代の武將で、義仲追討、奥州征伐で勲功のあった、わが郷土埼玉出身の畠山父子に格別の親しみと誇りを感じさせられる。

▼由比が浜海岸（歴史の大舞台の浜）

もう肌寒い季節だというのに、若者たちのサーフィンを楽しむ姿が、遠く波の間に間に、まるで水鳥の群れが漂っているようである。風をよけて船のかけで昼食をとる。

ここ由比が浜は数々の歴史の舞台となったところである。

▼長谷観音（衆生済度の大本造観音様）

江の電長谷駅を下り、長谷通りと由比が浜大通りとの交差点を左に入ると長谷観音で知られる長谷寺である。

天平八年（七三六）、藤原房前が徳道上人を開山として創建したといわれる。

紅葉と椿が静かで美しい秋の終わりを奏でている。

山門を入り石段を登ると、小さい地蔵が地面に無数に並んでいる地蔵堂、登りきった所に観音堂がある。

内陣に足利尊氏によって金箔が施されたといわれる。楠の霊木

で造られた十一面観世音菩薩像が安置されている。  
薄暗い堂内に立つお姿は、衆生済度の静かな仏である。

▼長谷大仏（正、側、後面総てからお姿を見せる露坐大仏）

長谷の大仏とは、阿弥陀如来坐像のことである。

美しい眉の下にわずかに見開かれたおだやかな半眼、均整のとれた体にまつわる流麗な衣紋、鎌倉屈指の仏像である。

大仏が建立された由縁は頼朝の発願にあったといわれる。

明応四年（一四九五）、大津波で大仏殿を流されて以来、露坐を続けている。まわりの緑に囲まれ、一つの風景の中にすっかり溶け込んでいる。

何とも不思議な、親しみのある阿弥陀如来坐像である。

こうして全員無事で見学を終わり、ホリデー快速大宮行きで帰途につく。平成九年をしめくくる史跡めぐりにふさわしい内容で終わりました。



長谷大仏（鎌倉市）

## 第二四九回 此木又八七 恒福神

記録 高橋 正澄

・日時 平成十年一月三日（水）

・天候 晴

・参加者数 一二〇人

・案内 山田政信

新春恒例、越谷市郷土研究会の七福神めぐりも今年で九回目を迎えることになった。しかも、あの「フーテンの寅さん」で知られる葛飾柴又である。

当日は、小春日に恵まれたこともあり、ちょっとした散策気分です。巡拝に加わることができた。

午前九時、越谷駅東口前に集合し、谷岡会長より年頭のご挨拶を頂く。一行は、柴又を目指して駅を立った。

高砂駅前にて、山田理事から、七福神の由来について伺い、線路に沿った商店、住宅の並ぶ小路を進むこと数分、本尊・聖観音菩薩と共に寿老人の安置されている能蔵寺がある。

寺宝、寿老人は、丈九cmと小さな座像である。

戦国期以後、激動するさまざまな時代を生きぬいた村民の姿を見つめてきただけに、何か知れぬ重みを感じられるから不思議である。

一行は、北総線で新柴又駅近くの第二の巡拝地、眼病に靈驗あらたかと伝えられる医王寺に着く。

最近、建立された仁王門の奥の本堂に、本尊の薬師瑠璃光如来像と共に恵比寿像が安置されている。

狩衣姿で左手に鯛、右手に釣竿と、子供のころ恵比寿講でよく拜んだ恵比寿様と同様であり、親しみを覚えた。

第三の巡拝地、宝生院は、北総線高架を潜り、五十mほど先を右に折れると、すぐ、そこにあった。

その手前、題経寺（帝釈天）持ちの墓地入口に造立されている「浅間山噴火流溺死者供養塔」の見聞は、私にとっても意義深いものであった。

天明三年（一七八三）の浅間山の噴火が、広範囲にわたり被害を及ぼしたことは知っていた。おおくの溺死者が柴又まで流れつき、村民による手厚い供養が営まれたことまでは知らなかった。自然への畏敬と村の人情を後世に伝える貴重な塔である。

宝生院は、墓地を持たない。したがって檀家のない参詣寺である。本尊は、出世財福にご利益のある大黒天で、近郷近在に信者が多い。ガラス戸の反射によって、本堂内は見えない。左手の祠に、丈、一mほどの大黒天が鎮座していた。

宝生院の横手は閑静な家の並ぶ小路である。



宝生院・大黒天（葛飾区）

第四の巡拝寺万福寺に着く。昭和二十三年設立の新寺である。本尊、延命福寿の福祿寿は、穴戸家の家宝仏と伝えられている。本堂右手に、大正四年四月建立の「大正記念大師講有志立碑」がある。有志の中に、大相模、千足の銘が刻まれている。

第五の巡拝寺良観寺は、善男善女で賑わう帝釈天参道を横切り、京成金町線沿いの金町浄水場に面した所にある。本尊は、寺宝の聖観音菩薩である。

当寺の布袋尊は、商売繁昌にご利益があると伝えられている。第六の巡拝寺真勝寺は、帝釈天のすぐ裏にある。

同元年（八〇六）創建の古刹で、古木も残っている。

本尊は不動明王、雨童子である。弁財天は古くから近郊の人によって、信仰されていたと伝えられている。

戦国期、当寺は兵火にかかった。境内や本堂の規模を見ると、この辺きっての名刹であったと推察できる。

一行は、第七の巡拝寺題経寺を残して、山田理事の説明を最後に解散のあと、三三五五、帝釈天、毘沙門天参詣のため、題経寺へ向った。正月も、まだ、三日ということもあり、題経寺は、幸運を祈願する善男善女で大いに賑わっていた。遠方から賽銭を投じ、健康安全を祈願する。

屋も大分過ぎていた。途中、川千屋やあびすやなどから流れてくる蒲焼きの匂いは、それまで忘れていた食欲を刺激したようである。急に空腹を覚えたが、屋食は北千住になってしまった。

このたびの七福神めぐりは、私にとって、近くて遠かった。おそらく、一生、知ることにはなかったであろう寺院に詣で、新たな感動を得られたことは大きかった。

記録 岩瀬静江

・日時 平成十年二月二日(日)

・天候 晴

・参加者数 五二人

・案内 宮川 進

当日は、よいお天気生まれ、吹上からバスで「さきたま」古墳群へ着き、大小古墳の数のおおいに驚きました。

大きなA群、稲荷山古墳、二子山古墳、鉄砲山古墳。

B群の愛宕山古墳、瓦塚古墳、奥の山古墳。

C群の將軍山古墳、中の山古墳、円墳の丸墓山古墳。

前方後円墳も年代によって向きの角度や、形のちがいがあり、百五十年くらいの間に、集中的に築かれ、その後は、どうしたのか徐々に、消滅していったようです。

前方後円墳には、造出しが設けられ、形象埴輪が出土したことから、儀式などの祭壇として使われていたといわれています。それから前方部分から後円部を選擇するということを初めて知りました。それぞれの古墳から出土した品が、国宝に指定され、数多く展示されていました。

その内でもやはり一番は、金錯銘鉄剣ですね。錯でくずれそうな鉄剣から偶然に見えられた百十五の金文字。

歴史を變えたとまではいかなくても、大和の大王と地方の豪族とのかわりが、すこしは、解明されたのではないでしょう。レントゲンで調べてもらえて本当に幸福な鉄剣でした。

大小の古墳をめぐりながら、古墳の周辺は私有地で木が沢山繁っていたとか、一軒の農家がなかなか立ち退かないで困ったとか、稲荷山古墳の前方部の土がすっかり埋め立てに削り取られていましたが、近いうち復元の予定があるとか、貴重なお話を聞くことができました。

稲荷山古墳と丸墓山古墳には、他の古墳とちがって登ることができる古墳です。頂上には隣柳と粘土柳の墓の復元されたものを見ることが出来ます。

丸墓山古墳は日本一大きな円墳で、石田三成がここに本陣をかまえて、忍城を水攻め攻撃の指揮をした場所なのだそう。戦いの時、土地の人たちはどうしていたのでしょうか。

隠れていたのか、逃げまどっていたのか、恐ろしい思いをしていたことでしょうか。

將軍山古墳は、築造された当時の状態に、上部は二段に円筒埴輪や朝顔形埴輪が並べられ美しく復元されていました。

後円部の横穴式石室が出土した副葬品を復元して、立派な展示館になっていました。ここには、世界の中でも珍しい馬冑や、蛇行鉄器など馬具類が目立ちました。

早春の冷たい風も、心地好く感じながら、白山古墳から八幡山古墳へ進みました。畑のあちこちに見える数本の木立のある小さな塚もみな古墳なのだそうです。

昭和初期、関東の石舞台・八幡山古墳は、畑の中にあつたのに、今は工場や住宅に囲まれて忘れられているようでした。真暗な玄室に入りました。とても広く感じられ、使用された秩

父の緑泥片岩、群馬の安山岩、房総地方の砂岩は利根川や荒川を船で運ばれてきたそうです。

ここにはどんな立派な人が葬られたのでしょうか。

最後の地藏塚古墳は、県内ではただ一ヶ所、線刻壁画のある珍しい古墳です。石工の落書きなのか、九州や畿内にあるような装飾古墳が出来るまえに、「さきたま」では古墳が造られなくなっただけでしょうか。今回ほど興味ぶかく感じたことはありませんでした。

今までは史跡めぐりというと皆さんの後について、珍しいものを眺めながら歩くだけでした。

ご苦労をおかけしている貴重な資料も読まなかったり、すっかり反省しております。万歩計も二万二千数百歩になっていたそうです。すこしも疲れなかったことは不思議です。先生方、本当に有難うございました。

## 第二五一回 水戸

・日時 平成十年三月十一日(水)

・天候 晴

・参加者数 一〇六人

・世話人 堤竹宏吉・鈴木種雄

・案内 水上清

今日は史跡めぐりで水戸に行く。今回はバスによる史跡めぐ

記録 青山 栄吉

りで、かなり前から案内があり、勤務先は休暇をとり参加した。参加者は午前七時半、南越東口に集合、観光バス三台に分乗して出発、三郷ICから常磐自動車道に入り水戸に向った。バスの進行につれ車窓から目に入る風景は、田畠の続く田園・牧歌的なものとなり寛ぎを感じたが、水戸ICを降り水戸市内に入ると車の往来が激しくなり都会のムードに一変した。

最初の見学先旧弘道館から所定のコースを回る。

一、「旧弘道館」 斉昭公が落上の子弟を教育するため天保十二年(一八四一)に開設した落校。

開設当時は正庁(学校御殿)を中心に文館、武館を左右に配し、敷地の西側の大半は馬術、小銃射撃の調練場として使用された(現在県庁・議事堂)。

これらの建物は戊辰の役(一八六八)で大半が焼かれ、昭和二十年の戦災も受けた。現存するのは正門、正庁、至善堂だけとなり、敷地面積も約一、九万㎡と開設当時の十分の一程度になっている。

入学資格が十五歳からというのは常識的と思ったが、三十歳まで通学を義務付けていたという説明には驚いた。

二、「茨城県歴史館」 地域社会の歴史を、原始・古代・中世、近世に区分し、パネル、模型、レプリカ等を使いわかりやすく説明されていた。

中でも中世以降守護と他の豪族との勢力争い、佐竹氏の常陸統一、徳川政権樹立後の常陸諸藩の動向、水戸徳川家の成立など時の流れとともに変化する地域社会の姿が映し出されている。短かい時間に長い歴史空間を駆け抜けた思いがした。

展示コーナーを一通り見学したあと昼食をとった。

三、「常磐神社・義烈館」 常磐神社は明治初年、光圀公、斉昭公の徳を慕う人達によって創建された。

義烈館は、光圀（義公）斉昭（烈公）両公のおくり名からつけられた。両公の遺品をはじめ水戸学関係資料および関係品が展示されている。

四、「偕楽園」 天保十一年（一八四二）「衆と偕に楽しむ場」として斉昭公が開設。日本三名園の一つ。

十一万坪という敷地内には、好文亭、奥御殿、茶室何陋庵などしゃれた建物がならんでいる。

当時、文人、法橋を招き詩歌の会を開き優雅な一時を過ごしたものと思われる。

五、「徳川慶喜展示館」 NHK大河ドラマ「徳川慶喜」の放送をうけて水戸市が作った展示館。

六、「徳川美術館」 水戸徳川家伝来の宝物を公開。

大名家における誕生、婚礼、代譲りといった人生の節目を祝う祭事をテーマに江戸時代に完成したわが国独自の文化様式、大名文化を見ることができた。なかでも春の訪れを知らせる節句の雛人形は豪華、華麗であった。

今回の史跡めぐりを通して印象に残ったことは、莫大な投資により後世に貴重な遺産を残した。

藩内は財政窮乏、農村荒廃が進み、やがて守旧派と改革派の党争がおこり、幕府滅亡まで凄惨な戦いをくりかえした。

これと思うとき、指導者の冷静な状況判断、舵取りがいかにか重要であり、かつ難かしいものであるかを痛感した一日であった。

## 第二五二回 新方の石仏

記録 西村 功

・日時 平成十年三月二十九日（日）

・天候 晴

・参加者数 六十四人

・案内 加藤 幸一

花曇りの朝、越谷市内北部地区の石仏めぐりに出発する。途中、加藤先生の教え子・鈴木君が車椅子で加わる。

「馬頭観音像は、腕が二本あるので、死馬の供養のため造り立てたもの」と懇切丁寧にユーモアをまじえた解説に聞き入る。

むかし、寮とよばれた建物跡に、念仏供養塔がある。十三仏信仰、十五夜念仏などの講がおおくの供養塔をのこしている。

十三仏信仰は、如来、菩薩、明王などを本尊として初七日から三十三年までの十三回の法要を行うことが広まり、現在まで続いている。

娯楽のすくない当時は、生活の知恵ともいえる信仰を兼ねたレクリエーションであった。

新方では、修験道関連の古文書などを拝見し、鈴木秀俊先生より元禄時代の古文書の解説を受ける。

船渡・香取神社入口に不動明王三尊像がある。像容は成田山新勝寺の本尊に似せてつくられた。この像を拝めば成田山詣でと同じご利益があるとのこと。

境内におおくの庚申塔があり、江戸時代の庚申信仰が盛んに行われていたことがうかがわれる。

無量院の参道に六地藏尊の石仏が安置されている。

この六地藏尊は此岸と彼岸の境といわれる寺や墓地の入口に建  
られている。

大松神社にて昼食をとる。社殿が新しくなり、裏側の祠など  
はそのまま残されている。

初夏をおもわせる陽気のなか、汗をかきながら移動する。

大松の平野家、長野家の路傍に、石仏板碑などが各家の管理に  
よって今に伝わっている。

その中の一つの祠より板碑の破片を取りだして説明される。

貴重な文化財が放置されている現状で消滅する恐れがあり、こ  
れらを収納する施設の早い建設が望まれる。

ご朱印寺・清浄院のご本尊は、阿弥陀如来で、江戸の町でさ  
かんにおこなわれた六阿弥陀参りの標識がある。

境内に市の史跡に指定された開山塚もある。

川崎神社には、力石が数おおく置かれている。力自慢たちが  
競った名残りがうかがえた。

七月の虫追いは、県指定の文化財として今も続けられている。  
聖徳寺は太子講発祥の地といわれ、今でも近郷の職人たちが  
集って開かれている。

塩地藏は安産や子育ての地藏として信仰されている。

参道には無縁仏の石塔群が見られる。中に貴重な石仏や庚申塔  
などがまじって置かれている。

江戸期の庶民の生活の中に根づいた信仰によって、救いや安ら  
ぎと楽しみを見いだしたと思われる今日一日であった。

加藤先生の博学と熱意ある解説に改めて敬意を表する次第であ  
る。本日の歩数一万八十歩（西田理事の万歩計による）。



加藤先生の石仏説明を聞く参加者



記録 飯塚 英志

・日時 平成十年四月五日(日)

・天候 晴

・参加者数 九十四人

・案内 山田 政信

南越谷駅九時出発、JR王子駅下車。満開の桜で春爛漫の風情。お花見も目的である今回の史跡めぐりは、爽やかな暖かい天気にも恵まれた。

まず、駅のとりの音無親水公園から飛鳥山公園へと桜並木を散策。丁度、紙の博物館、飛鳥山博物館の新装開館のイベントがあり大変な人出。あちこち宴会グループの賑わいでした。むかし、豊島氏が建立した飛鳥明神に由来するここ飛鳥山は、將軍吉宗により桜の植栽が行なわれ、寛政のころより上野の山と並び桜の名所。当時にくらべ今はだいぶ狭くなっている。

江戸の人々も見た飛鳥山碑の前に立ち往時を偲び、一時間のお花見休憩。

西ヶ原一里塚に向う。日光街道の支街道である岩槻街道二里目の一里塚で、波沢栄一などの努力で、東京二十三区では唯一原形保存されているもの。

二つの塚で当時の街道幅が判る興味深いものでした。

本郷通りを南へ、古河庭園に着く。

コンドルの設計になる洋館と洋風庭園。一段下がったところに和風庭園のある旧古河邸。鹿鳴館以降の政府頭官や財閥家の欧

化生活の雰囲気の色濃く感じられ、華やかな夜会の様子も想像した。ここで昼食。

この庭園より駒込に向って本郷通りのなだらかな下りは、以前は、「くらやみ坂」と呼ばれたところ。

今は四車線の交通繁多な大通りだが、昭和初期までは一車線の砂利道で急勾配。

日本橋から来る荷車の後押しで駄賃を貰う「立ちん棒」がいた。通る車といえば波沢栄一の七七ナンバーのリンカーンか、浅野家のガス灯付二頭立て馬車くらいで、王子製紙の二十五馬力フオードなどは、エンジンを冷やしてから、やっと上がって行ったとのこと。

これも案内の山田先生が昔、土地の古老から聞いた話として紹介された。

この坂の上と、駒込駅寄りの妙義神社あたりの高台が、豊島氏と太田道灌が陣を構へて対峙した位置関係と聞くと、目の前の喧騒に満ちた近代的大街路との対比で、時の流れに感慨を覚える。

平塚神社に向う。豊島氏の城跡といわれるこの神社は、源義家の奥州からの凱旋時、豊島氏へ与えた鎧を埋めた塚が社の裏庭にあり、山田先生の口利きで中に入れていただき拝見。

(それにしても義家伝説は空海や義経同様、各地に多くあるように思われる)

本殿などは変哲のない普通の構えであるが、由緒という歴史の重みを感じた。

次は、上中里西方不動。不動明王と摩利支天の石像がある。江戸中期よりの御嶽信仰の流れで、昭和二年に移転安置されたもので、台石には享保二〇年の銘がある。宅地の小さな一郭にあるが、長い間の信仰の息遣いがしのべれた。

最後が六義園。柳沢吉保の別邸として築造。将軍綱吉や生母桂昌院の来駕を仰いだところ。

明治に入り、岩崎家が復旧使用し、東京市に寄付されたもの。さすがに大名庭園だけあって眺めの優れた作りで、園内のいちばん小高い「藤代峠」に立っての一望は心休まるものだった。入口近くの枝垂山桜が見事で、思い思いに記念撮影する姿は、春の麗らかなものであった。

これより最寄JR駒込駅より帰途につく。万歩計一二、〇〇〇の適度なウォーキングと花名所めぐりは楽しい歴史散歩の一日であった。

## 第二五四回 加須・鷲宮

記録 原島 明

・日時 平成十年四月二十六日(日)

・天候 雨

・参加者数 五十三人

・案内者 鈴木 秀俊

朝から雨が降っていた。実家が足利なのでたびたび通過しているが、どんな所か知らないので期待している。

千方神社、光明院を見る。

龍蔵寺へ行く途中の会の川親水公園は、よく整備され美しい。雨なので、我々のほかは人ひとりいない。

天気の良い日は散歩する人でいっぱいだろう。

龍蔵寺を過ぎた所で、うどん屋が目に入った。

むかし、ゴルフの帰りにうどんを食べた思いが浮かんだ。

加須はうどんで有名な所である。それからうどん屋が目はいると、うどんが食べたくなかった。

総願寺を経て図書館で昼食をとった。二人机が三列並んでいて学生時代の昼食を思い出した。

それにしても、周囲の緑が雨で洗われて綺麗だ。

電車を乗り継ぎ、鷲宮神社に着いた。

大木がおおく荘厳である。郷土研究会で一度、来ている所だが私同様、初めてだという声を何度も聞いた。

晴れた夏の日でもこの場所は涼しいだろうと、皆さん、思いをめぐらしているようだった。

一日中、小雨が降っていた。電車で帰路についた。

頂いた揚げた餅を肴に酒を飲んだ。うまかった。

東武動物公園駅、千間台駅と、会員の方々と別れ、最後に越谷駅に着いた。

いつものとおり酒飲み仲間が居酒屋へ立ち寄った。店を出たころには、雨もやんで、皆さんのすこし赤い笑顔が輝いていた。

記録 高橋 清

・日時 平成十年五月二四日(日)

・天候 曇

・参加者数 七十二人

・案内 小原勘三郎

南越谷駅より武蔵野線經由、蕨駅で下車。

西口より城跡公園に向う。参加者は初めての人もいるが多数の人はすでに顔見知りの人たちで和氣藹々である。

雨さえなければ上々の日だ。

蕨方面は越谷から近距離のわりにあまり知られていない。

親戚も少ないようだ。

それは交通の便が悪かったからだろう。

昭和四八年、武蔵野線が開通して急に近くなった。

まず蕨市立会館を通って城跡公園へ。

案内者は小原勘三郎先生、先生は声が大きくよく通る。

歯切れのよい明快な説明、豊富な話題を駆使しての解説なので聞く人は飽きがない。

公園を出て三学院に至る。立派なお寺だ。

新しい木造三重の塔もある。六地蔵の説明を聞いて旧中山道に出る。宿場町の面影が濃い。

市立歴史民俗資料館に入る。説明者は学芸員の方、明治二年

大政官布告の切支丹禁制の高札に注目する。

次に宿場の模型をみながらの説明をきく。

蕨は幕末から明治にかけて機織の町として経済の基盤を築いてきたという。

隣の旧本陣を見る。「江戸へ五里京へ百三十里」の道標がある。皇女和宮も小休止したとのこと。

これより戸田市に入り、郷土博物館に着く。

ここで昼食とする。食後、館内の展示物を見学する。

戸田は荒川流域湿地帯で、越谷市によく似ている。

出土した四千年前の流木を見る。昔の生活が展示されている。

館を出て新曽の観音堂に着く。板碑がある。

約七百年前の物という。越谷の建長板碑と同時代か。

次に鍛冶谷新田遺跡へ歩む。ここでは宮川進先生の説明があった。墳墓の歴史的な変化「方形周溝墓」の話である。

最後の史跡戸田氷川神社に着く。

ここには越谷出身の力持、三ノ宮卯之助の力石大磐石があった。

高崎先生から特別説明を聞いた。

史跡をめぐって勉強し、身体を使って歩く。

今日の行程は約五㎞であった。

第二五六回 海はたると・横浜

記録 大滝 尉子

・日時 平成十年七月二十六日(日)

・天候 晴

・参加者数 一〇〇人

・案内者 宮川 進

つゆ空の下、雨を心配しながらの出発でした。

船橋から横浜への船の旅でした。対岸のビル群が遠のいて、やがて東京湾横断道路や海ホタルが見えてきました。

巨大な船の形をしたような人工島です。

海の上からだと全体がよく眺められます。

はじめて見る方も多く、窓辺に寄って感嘆の声をあげておりました。

横浜港に近づくとも外国航路の貨物船が数多く往来しており、さすが横浜港だと思いました。

あのコンテナには何が積み込まれているのでしょうか。

埠頭も整然と整備されたきれいな港でした。

大栈橋をおりてから、開港当初の居留地や建物の説明をうかがってから山下公園で弁当を広げました。

海なし県に住む私は、思いきり海の空気を吸い込みました。

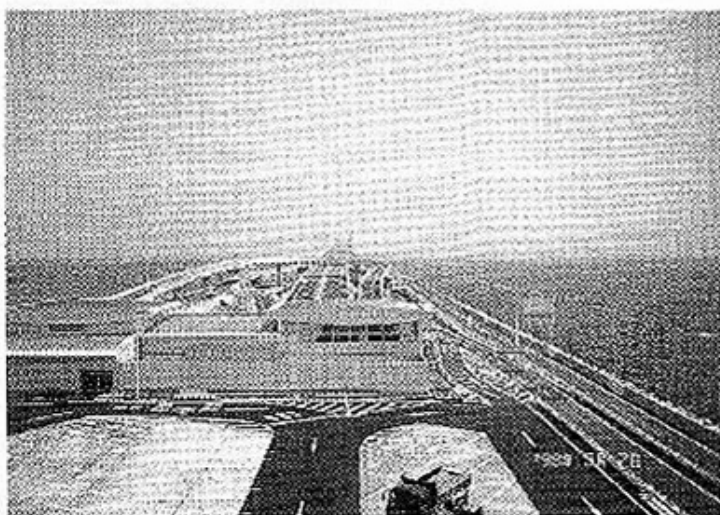
食後、中華街をそぞろ歩きしながら、なにか観光旅行にきたみたいな気分になりました。

そのころ、夏の日ざしになり汗をふきふき歩きました。

横浜開港資料館と神奈川県立博物館を見学しました。

鎖国から西洋文明の幕開けまでの歴史を身近かに感じる展示物がいっぱいでした。

煉瓦造りの重厚で魅力あふれる建物群や、みなとみらい21地区のあたらしいしゅうしゅな建物、歩道には岡蒸気といわれた機関車、馬車、かもめ、船などが描かれたタイルが埋め込まれ、横浜は何とも洒落な街でした。



海はたると

記録 林 佳子

・ 日 時 平成十年九月二十七日(日)

・ 天 候 雨

・ 参加者数 八十八名

・ 案内者 野村 勝八

きょう一日、雨の史跡めぐりとなってしまいました。

東京都内のためか、多数の参加者でおどろきました。

私は明治神宮・東郷神社は初めての参拝・見学でした。

さすが明治の国家というだけあって、歴史の重みを感じる建造物・宝物館でした。

悪天候でのスケジュールのため見学の時間が短く、駆け足でため息しながら見た感じで不満足でした。

近いのだから個人的にまた見学すればよいのでは……と思います。すが、なかなか行けないものです。

東郷神社Ⅱ都心に静寂なたたずまい、ここにも歴史を感じる思いでした。再度、資料を読みたいと思います。

N H K 放送センターは多く時間をとったわりには得るものがあります。

全体的にいつも感じるのですが、研究会としては参加人数が多すぎると思います。単なるハイキングとは内容が違うと思うのですが……。毎回、立派な資料には感謝しております。

担当の先生方は、さぞ、大変な思いをして作成なさっていることと思います。大切に保管して、読ませていただきます。



N H K 見学

記録 酒井 達男

・日時 平成十年十一月八日(日)

・天候 晴

・参加者数 四十八人

・案内者 鈴木 秀俊

十一月八日の史跡めぐりは絶好の日和となった。

地元や近間に関する知識となると、比較的灯台下暗しなので、由緒ある越谷の歴史をたずねるミニ史跡めぐりには、痛めた左脚を庇いながら張り切って参加した。

越谷駅前から有龍邸西側の通りをタブの大木を見上げながら浅間神社に着く。

ここで懸仏などについての説明を承る。大きな榎の木が際立ってそびえている。付近の古老の話では、この大木は浅間様のよい目印であったという。

お祭りは梅雨最中の六月三十日なので、以前この付近はひどく悪路になることが多かった。それでも絵馬や灯籠が飾られて小社ながら大いに賑わったと語っている。

次に元荒川の堤に向かう。

▼建長板碑 板碑は鎌倉期から造られた供養塔といわれ、市内では百基以上も発見されている。

板碑の残存数では埼玉県が最も多く、およそ二万数千基もあるという。

県内最古の板碑は、江南町にある一二二七年のもので、越谷の

はそれよりも二十二年後なので、二番目と思うが、いずれも學術上貴重な資料となっている。

今後は人手に荒らされないよう永く保存されるよう願うのみ。

▼天嶽寺 墓地領域の広さからも中世以来の大寺としての重みが伝わってくる。

今まで何度かお詣りに来たが、一般には見られない市指定文化財木造「釈迦如来涅槃像」を初めて拝観できたことは感激であった。会に所属している有難さを感じる。

境内には市民の誇る地元出身の学者で、方言学の始祖と称された越谷吾山の供養墓石や句碑がある。

境内にある榎友の歌碑の一部が難解であったが、今回の資料のお蔭で漸く判って嬉しい。

山門を入った左手に数多くの無縁墓などが安置されている。この中に越谷御殿の要職にあった方のものがあるが、何んとか陽の目を見る場所で拝したいと思った。

▼アリタキアローレータム たまには小密林を歩くのもよい。

▼久伊豆神社 元荒川沿岸には相当数の同神社があり、中でも越谷は岩槻と共に大きな社とされている。

特に立派な参道を歩くと、おのずと敬虔な気持が湧いてくる。境内には、維新の思想界に多大の影響を与えたといわれる国学者平田篤胤(号は伊吹の屋)の寓居跡が残っている。

篤胤が奉納したと伝えられる大絵馬「天之岩戸開」を拝見することができた。

今から四十年ほど前に、友人がここの本殿で結婚式を挙げた

ので参列した。式のときの座布団が荒縄で編んだものだったから、正座して数分で痺れがはじまり大弱りしたことを想いだす。当時の本殿はこじんまりした構えで、参道の両側は殆んど家もなく静寂で、映画の時代劇にふさわしいたたずまいであった。

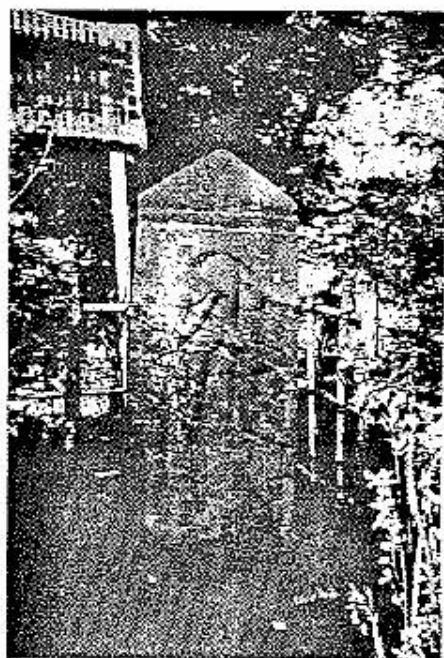
さて板碑については建長元年銘になっている。

この頃は武蔵七党が活躍していたころと思われるので、当然その影響を受けているだろう。

当時、久伊豆神社は鎮座されていたようだが、天嶽寺は未だ創建されていない中世の時代である。

おそらく此の辺は低湿地が続いており、その中の微高地に拠つて人々は営々と生活してきたのであろう。

その風土、環境などと人々の生きざまはどのようなものであったのか。それは問いかけることもないこの建長板碑だけが知っていることであろう。



建長板碑

## 第二五九回 懺悔合会・山門覚見寺

記録 西村 功

・日時 平成十年十二月五日(土)

・天候 曇のち雨

・参加者数 八十六人

・案内者 宮川 進

今にも降りそうな雲行き、肌寒い朝。最初の目的地北鎌倉の円覚寺に予定どおり着いた。寒さに加え雨が降り出す。

トイレが気になる。

山門をくぐると紅葉が目につり、しばし足をとめる。

さらに奥へ行くと、居士林じしりんの前にはなお美しい紅葉が映えて、雨の鎌倉のたたずまいを感じさせられた。

幸せにも未公開の国宝舍利殿や禅堂などを建長寺高井正俊教学部長のお世話で拝観と解説をうけることができた。

建長寺では山門で土曜法話が行われており、竹寺で有名な報国寺の菅原義久住職のお話に聞き入った。

心に残った言葉「よいと思う事を心をこめてくり返す」、何事にも通ずる言葉に感銘をうけた。

高井部長よりお話がある。同寺は開山以来、禅の専門道場として今も厳しい修行を行なっているとのこと。我々も場所を変えて高井部長・村田和尚の指導のもとに参禅した。

まず、姿勢を正しくし、呼吸法を会得して健康を保ち、自分の心の内をみつめることを感じてもらう、とのお話をうけて全員が真剣に座禅をおこなった。



建長寺で参加者全員座禅を行う。

警策で打たれると体内の毒気が抜け、きりっとした心地好い気分を感じさせられた。

別室で一汁一菜の食事を頂く。食事も修行の一環として行わなれている。村田和尚から食事の作法の指導をうける。

子供のころ、親から食事時にやかましく注意をうけたことが懐かしく思い出され、一つひとつ頷かされた。

食後、村田和尚の法話を聞く。

なかでも臘八ろうはちの修行くわげつ（臘月は十二月、八は八日）は今日も行なわれている。

この厳しく苦しい体験談に聞き入り、質問がおおく出た。

参禅と法話により気分を一新して、名月院に向う。

雨足がはげしくなり、残念ながら、雨のあじさい寺の感慨に浸るまでには至らなかつた。

枯山水に山の紅葉が映え、ひとときの安らぎをおぼえた。

北条時頼の墓、やぐらなどについて宮川幹事の熱心な説明を受けた。

鶴岡八幡宮脇の三ノ宮卯之助の力石について高崎先生の解説を聞き、見学して本日の予定を終了する。

案内役の宮川幹事のこまやかな気配り、谷岡会長のご配慮で、全員つつがなくゆっくりと帰ることができた。

改めて感謝の意を表します。寒い雨の中の史跡めぐりでしたが充実できた一日でした。

## 第二六〇回 東海七七福神

記録 中村 哲士

・日時 平成十一年一月三日（日）

・天候 晴

・参加者数 九十九人

・案内者 山田 政信

今年「えと」にちなんで飛躍の年にしようと、二年ぶりに参加しました。会長をはじめ、参加者の顔ぶれは変わりないようにお見受けしました。

車内では正月気分で初詣での人々がおおく、華やかなムードでした。「お雑煮の食べ方」「正月料理」「寝正月」などが、



皆さんの話題で、いつもの史跡めぐりとはちがいます。

最初の品川神社は、五十四段の急な石段で『息をきらせて』昇ると富士山がありました。さっそく昇りました。

むかしは頂上から品川の花がみえたとのことで残念でした。

初夢の前にも昇ったら効き目があつたのではと思いましたが。

境内には七福神がまつられており、ここだけでもよいように思いました。

成田山に行けば四国の八十八ヶ所が、一ヶ所に揃っているなど便利な世の中になりました。

途中、箱根駅伝に出会いました。テレビでみるのとは違って、近くで見ると早く走るものです。偶然とはいえ、よいものを見させていただきました。

鈴ヶ森の処刑場跡は、車でしばしば通っていた道です。全然、気がつきませんでした。やはり郷土研究会です。

「個人で来たら、短時間にこれだけまわれない。連れてきてもらってよかった」。

「みのもんだ」ではないですが、お嬢さんがたの声が聞こえました。今日は初詣でということもあり、皆さん、気分よくまわられたようです。

帰りに浅草での反省会は、初めて出席させていただきました。健康について研究している人がおおく、一度、発表会でもしてほしいと願っています。古文書研究会があり、西田さんを先生として、月に一回、聞いてはとの話も出ていました。

反省会はおもしろく、ためになるものです。できるだけおおく参加させていただきたいと思っています。



一心寺・寿老人（品川区）

第二六一回 松尾持寺・川崎大師

記録 野村勝八

・日時 平成十一年二月二十八日(日)

・天候 晴

・参加者数 一二人

・案内者 水上 清

二月とは思えない暖かな日に恵まれ(行いの良い方が多勢いる証拠)、越谷駅に集合した会員の皆さんの顔には、今日の「史跡めぐり」の期待感に満ちていた。

電車を乗り継いで、第一の目的地・鶴見に到着。

広大な境内を持つ総持寺の格式の高さを思わせる本堂・仏殿・三門等の建物が参拝者を圧倒する。

宝物殿にて寺の縁起等について説明を受ける。

能登にある総持寺を訪ねたことがある私にとって、当時のことを思い出し、感慨深い寺である。

修行僧による諸堂の案内も、普段あまり体験できないことで皆さんは感銘をうけた様子であった。

午後から川崎大師に向う。途中いくつかの史跡を訪ねるが、若宮八幡宮にて三ノ宮卯之助の力石があるとの説明があり、卯之助の行動範囲の広さを思い知らされ改めて興味を感じた。

川崎大師はいつもと変わらない賑わいであり、さすがと思わせる。資料を参考に境内を巡ることとした。

私事で恐縮だが厄除祈願に詣でた寺である。あれから今日まで平安に暮らせたのは、川崎大師の保護のおかげかと感謝の念を

強くする。

本日の史跡めぐりに参加された方の中にも同じ思いを持つ人も何人かいたようで、話に花がさいている。境内に力石があり、川崎大師と越谷がひどく近くなったという感じがしたのも新しい発見である。

門前の土産物店にて名物のくず餅を買い、きょうの史跡めぐりをしめくくる。有意義な一日であったとの声も多く聞こえた。ていねいな資料と説明に改めて感謝する次第である。

第二六二回 光血子・笠立間

・日時 平成十一年三月十一日(木)

・天候 曇のち雨

・参加者数 四十五人

・案内者 宮川 進

暖かい日和を味わったあとの三月にしては、少々寒さを覚える曇り日である。南越谷駅あさひ銀行前七時十五分集合である。常連の皆様は旅馴れて居られるので楽し気にすでに和気藹々である。

資料と参加者名簿を戴き、挨拶もそこそこに眼を通しますと友人のご主人の名前を発見。鈴木先生のお姿もあり、池田先生も居られたのでようやくグループの一員になれたように安堵した。

関根 綾子

バスは定刻発車。「すでにお馴染の方、初めての方もあるかも知れませんが、車中では喧嘩しないで仲よく参りましょう」のユーモラスな挨拶にどっと笑声があがる。

益子参考館の古色蒼然たる頑丈な長屋門は文化財そのもの。広大な邸内は古民家を移築したという茅葺の住居。

工房などが配置よく点在し、美しく手入れされていた。

陶芸メッセの見学。厚板を敷並べられた坂道には、柝の葉の陶板が品よく埋めこまれている。

東門より旧浜田邸に入ると左側は陶芸工房、右側には登の窯が配置され、お邸は江戸時代の格式ある大きな住居であった。

庭前に絵付師皆川マス壺を讃えた昭和天皇の御製碑が輝いていた。

陶芸館はゆかりの作品や日本各地の代表的陶磁器が展示されており、笹島喜平版画家の原板・版画の素晴らしさが心に残った。

益子焼共販センターで昼食と買物。記念に湯吞を購入する。雨が本降りとなってしまった午後は、坂東壺場の西明寺見学で

ある。バスから降り立ち、切り立つような石段に吃驚したが、殿ながら本堂までたどりつく。

説明を伺い数百年前の歴史をしのび、ご朱印を頂いて帰る。

次の笠間稲荷は数十回参詣に来て居るので、門前の酒屋さん

で休憩。皆さんと甘酒をいたゞいた。  
帰りの車中では、工藤様と謡曲、俳句、短歌など語り合い、至福の史跡めぐりで感謝して居ります。

## 第二六三回 元禄縁組乱展

山梨 隆司

・日時 平成十一年三月十三日(土)

・天候 曇

・参加者数 三十四人

・案内者 宮川 進

この度の元禄縁組乱展は、事前申し込みは不要、切符も自分で購入とのことで、参加者は二十名くらいと思っていた。

NHKの大河ドラマで放映され、先取り気分もあってか、資料が足りない始末。江戸東京博物館の立派さと、展示室の絢爛たる元禄文化の立派にタイムスリップの心地。

女性の方は元禄文化にもっと浸っていたい様子で、集合時間に三名行方不明。案内の宮川さん、大忙し。

三味線歌にて昼食をとり、次に常設展で明治・大正・昭和・平成と時代の移り変わりを見学する。

安田庭園で寛ぐ。池には都鳥や鴨が群れ遊び、樹木の管理もよい。東京にもこんな処があったのかと、しばし自分の家の庭を夢見る。さあ、いよいよ本所松阪町の吉良邸へ討入り。

いま見学したばかりの忠臣蔵。

風さそふ花よりもなほ我はまた

春の名残を如何にとかせん 長矩辞世

吉良邸跡を見て拍子ぬけ、わずか十坪位。邸内に首洗いの井戸があり、お稲荷さんが祭られ、日本一小さな公園とのことだった。両国駅で解散し、各自帰途につく。

越谷市郷土研究会 史跡めぐり

回数	実施年月日	行先	案内者
241	平成9年 4月27日	館林市 館林城跡 つつじが丘	鈴木秀俊
242	6月 1日	越谷市 上・下間久里 大里	加藤幸一
243	7月27日	東京ウォーターフロント 築地他	宮川 進
244	9月10日	香取 鹿島 (バス)	宮川 進
245	9月28日	世田谷区 松陰神社 豪徳寺他	野村勝八
246	10月26日	小石川寺町 護国寺 植物園 伝通院	山田政信
247	11月 9日	川口 安行 赤山陣屋跡 西福寺他	平川陽三堤竹宏吉
248	(1班) 11月30日	鎌倉西南 銭洗弁天 長谷観音 大仏	宮川 進
	(2班) 12月 7日	”	”
249	平成10年 1月 3日	柴又七福神めぐり 題経寺 医王寺他	山田政信
250	2月22日	さきたま古墳群	宮川 進
251	3月11日	水戸 偕楽園 旧弘道館 (バス)	水上 清
252	3月29日	越谷市 船渡 大松 大杉 北川崎	加藤幸一
253	4月 5日	名園めぐり 飛鳥山 古河庭園六義園	山田政信
254	4月26日	加須不動尊 鷲宮神社他	鈴木秀俊
255	5月24日	蕨から戸田へ	小原勘三郎
256	7月26日	船で海ほたる・横浜へ 開港資料館他	宮川 進
257	9月27日	NHK 明治神宮 東郷神社	野村勝八
258	11月 8日	越谷 建長板碑 天嶽寺 久伊豆神社	鈴木秀俊
259	12月 5日	鎌倉 円覚寺 建長寺 明月院	宮川 進
260	平成11年 1月 3日	東海七福神めぐり 品川寺他	山田政信
261	2月28日	鶴見総持寺 川崎大師	水上 清
262	3月11日	益子 笠間 (バス)	宮川 進
263	3月13日	江戸東京博物館 元禄繚乱展	宮川 進

越谷市郷土研究会 研究発表会

回数	実施年月日	発表者	テーマ
119	平成9年 6月22日	小島 誠	越谷 暮らしのうつりかわり
120	8月24日	諸岡 勝	中世からのメッセージ建長板碑から750年
121	平成10年 1月25日	高崎 力	越谷出身の江戸力持ち・三ノ宮卯之助
122	6月14日	大村 進	武蔵武士の活躍と馬(建長板碑750年記念)
123	9月13日	馬淵和雄	鉢ノ木・板碑・鎌倉大仏( ” )
124	平成11年 1月24日	高崎 力	甦った250年前の大相模不動尊の景観

# 越谷市市民文化祭 展示出品リスト

展示場所 越谷コミセン

回数	出品年月	出品作品名	*印は市民祭にも展示	出品者
第29回	平成9年11月	1) 旧三野宮・大竹・大道村の石仏 2) 澁口土橋架け替え訴訟の内済 3) *御殿町の建長板碑 4) *越谷出身江戸力持 三ノ宮卯之助 5) 普門品供養の碑 6) 荒川・熊谷築堤へ越谷の寄進 7) 大沢の照光院 8) 追跡・将軍家光の霊柩日光へ葬送 9) 越谷市内の狛犬		加藤幸一 鈴木秀俊 鈴木種雄 高崎 力 高橋 清 谷岡隆夫 堤竹宏吉 堀切祥民 調査グループ 代表宮川進
第30回	平成10年11月	1) 斎藤先生の碑 2) 旧恩間・袋山大林大房村の石仏 3) *越谷市の六地藏 4) 越谷で基督教を広めた吉田兼三郎 5) 明治初期・蒲生村の高齢者表彰 6) 元荒川の四季 7) 野島地藏尊の不思議な伝承 8) 中町・浅間神社の懸仏 9) *越谷市内にある指定文化財の板碑		池田 仁 加藤幸一 菅波昌夫 高橋 清 高橋正澄 平井五六 堀切祥民 水上 清 調査グループ 代表宮川進

越谷市文化連盟  
30周年記念

# 文化芸術祭 展示出品リスト

展示場所 越谷コミセン

回数	出品年月	出品作品名	出品者
	平成11年 3月	1) 大聖寺(大相模不動尊)の板碑 2) 安国寺の古文書 3) 250年前の大相模不動尊全景図 4) 越谷の養鶏と鶏魂碑	加藤幸一 鈴木秀俊 高崎 力 森屋英龍

# 越谷市郷土研究会会則

## 第一章 総則

第一条 本会は越谷市郷土研究会と称する。

第二条 本会の事務所は幹事宅に置く。

第三条 本会は市内の郷土研究者の連絡をはかり、郷土史料の調査研究を目的とする。

## 第二章 事業

第四条 本会は第三条の目的を達成するため左の事業を行なう。

一、郷土史研究の連絡とその啓発。

二、郷土文化財保存の協力。

三、機関誌の発行。

四、その他、本会の目的達成上、必要な事項。

## 第三章 会員

第五条 会員は本会の趣旨に賛同するものを以てする。

第六条 会員は会費として、毎年度初めに金貳千円を納入する。

## 第四章 役員及び職員

第七条 本会に左の役員を置く。

会長 一名

副会長 二名

理事 若十名

幹事長 一名

幹事 一名

監事 二名

常任顧問 若十名

顧問 若十名

会長、副会長は理事会の推薦とする。

理事は総会に於いて、会員の中から選任する。

幹事長及び幹事は会長が委嘱し、理事会の承諾を得る。

監事は理事会で推薦し、会長が委嘱する。

常任顧問は本会に対し、特に功績があつた会員の中から

ら理事会が推薦し、会長が委嘱する。

顧問は理事会で推薦し、会長が委嘱する。

第八条 会長は会務を総理し、本会を代表する。

副会長は会長を補佐し、会長事故あるときこれに代わる。

理事は理事会を組織し、会務の執行に当たる。

幹事長は庶務会計に従事し、これを統括する。

幹事は庶務会計に従事する。

監事は会計を監査する。

常任顧問は理事会に出席し、その諮問に応じる。

顧問は重要な会務につき会長の諮問に応じる。

役員は任期は二年として再任を妨げない。

第九条 役員は二年として再任を妨げない。

## 第五章 会議

第十条 会議を分かつて理事会、総会とする。

第十一条 理事会は必要の都度、会長が招集する。

第十二条 総会は毎年一回、会長が招集する。

第十三条 本会の会議は出席者の過半数をもって議決する。

## 第五章 会計

第十四条 本会の経費は会費、寄付金及び雑収入をこれに充てる。

第十五条 本会の会計年度は、毎年四月一日から始まり三月三十一日に終わる。

附則

1 本会の会則の変更は、総会の議決によるものとする。

2 本会施行のため必要な規定は、会長が別に定める。

3 本会則の施行は、昭和四十年二月二十七日とする。

改訂 昭和五二・五・二二 平成三・六・三〇

平成六・六・二六

越谷市郷土研究会会員名簿

99/4/5

	氏名	自)〒	自)住所1	自)TEL
1	高島英一	3360015	浦和市太田窪5-16-3	048-882-6912
2	新井登美栄	3470027	加須市大室131	0480-65-4476
3	中村哲士	1250061	葛飾区亀有4-19-4ブックセンター亀兎	03-3838-8203
4	木村信次	3390058	岩槻市本丸2-9-3	048-757-6095
5	林 知子	3420056	吉川市平沼1-6-4	0489-82-5913
6	田中きく江	3420045	吉川市木売2-11-1	0489-81-4052
7	鴨脚洋子	3410003	三郷市産成4-3-7-106	0489-59-6256
8	山田順子	3440023	春日部市大枝423-1 シティプラザ千間台貳番館103	048-738-7538
9	林 和江	3440023	春日部市大枝812-5	048-738-3036
10	加藤幸一	3440023	春日部市大枝859-5	048-738-4181
11	坂巻朋子	3440011	春日部市藤塚326-10	048-737-8978
12	石井ふさ	3440032	春日部市備後東5-14-20	048-735-2520
13	捨山克子	3440032	春日部市備後東7-30-16	048-733-0354
14	若松清一	3440066	春日部市豊町3-7-47	048-736-5370
15	小林 登	3320028	川口市宮町8-28	048-252-6722
16	野沢陽子	3320001	川口市朝日1-14-19 シャルム朝日503	048-224-3835
17	酒井達男	3400053	草加市旭町4-4-3	0489-41-9052
18	瀬下さつき	3400041	草加市松原2-B71-405	0489-43-8355
19	後藤千代子	3400006	草加市八幡町1223-13	0489-36-9880
20	斎藤博道	3450831	南埼玉郡宮代町須賀1218-14	0480-34-3926
21	台 実	3491101	北葛飾郡栗横町北2-12-28	0480-52-2392
22	飯塚英志	3430113	北葛飾郡松伏町ゆめみ野5-5-6	0489-92-4082
23	大滝耐子	3430102	北葛飾郡松伏町築比地235	0489-91-5776
24	正岡実子	3430102	北葛飾郡松伏町築比地235-12	0489-92-3856
25	山田政徳	1150054	北区桐ヶ丘1-21 W16-204	03-3906-0725
26	橋本伸二	1310041	墨田区東向島6-3-3	03-3614-2871
27	鈴木英武	1310041	墨田区八広1-18-3	03-3816-3976
28	木原徹也	2780031	野田市中根140-174	0471-22-0654

	氏名	自)〒	自)住所1	自)TEL
181	森屋英龍	3430022	越谷市東大沢5-5-3	0489-65-3390
182	山口美津江	3430805	越谷市神明町3-219	0489-66-9555
183	山崎政隆	3430032	越谷市袋山200-5	0489-74-6401
184	山梨隆司	3430032	越谷市袋山494-1	0489-77-6294
185	山本鉄也	3430041	越谷市千間台西1-19-6-1-405	0489-76-0492
186	横川静江	3430026	越谷市北越谷2-5-8	0489-74-1285
187	吉沢吉子	3430026	越谷市北越谷2-12-9	0489-76-3459
188	吉田敏子	3430032	越谷市袋山192-5	0489-74-3770
189	吉田正代	3430022	越谷市東大沢4-18-11	0489-64-6647
190	吉見美津江	3430015	越谷市花田5-12-11	0489-63-5995
191	渡部義男	3430033	越谷市恩間710	0489-76-6686
192	渡部耕代	3430032	越谷市袋山311-7	0489-75-3854
193	渡部テフ	3430804	越谷市南荻島3709-3	0489-77-3294
194	渡部フミ	3430804	越谷市南荻島3814-15	0489-75-1860
195	和田敏道	3430807	越谷市赤山町2-49-4	0489-66-8730





## 越谷市郷土研究会会員名簿

99/4/4

	氏名	自)〒	自)住所1	自)TEL
136	長野いつ	3430041	越谷市千間台西2-9-11	0489-75-6094
137	名倉さわ	3430852	越谷市新川町1-82	0489-86-2558
138	名倉三津枝	3430852	越谷市新川町1-336	0489-87-9945
139	並木栄子	3430805	越谷市神明町2-380	0489-74-0982
140	成瀬 潔	3430827	越谷市川柳町4-245-1 朝日プラザガーデンシティ122	0489-87-5320
141	新野吉男	3430041	越谷市千間台西2-19-1	0489-77-6453
142	新居佳雄	3430806	越谷市宮本町2-250-4	0489-66-2950
143	西沢許女	3430024	越谷市越ヶ谷2236 事業団宿舎B301	0489-64-9571
144	西田 茂	3430856	越谷市谷中町1-80	0489-62-4537
145	西村 功	3430045	越谷市下間久里1168-1 越谷スカイハイツA-310	0489-78-2927
146	沼倉セツ	3430015	越谷市花田5-19-56	0489-64-4045
147	野口政子	3430032	越谷市袋山235-1	0489-75-0159
148	野村勝八	3430047	越谷市弥十郎272-8	0489-78-1133
149	橋本和雄	3430032	越谷市袋山436-6	0489-79-9708
150	林 佳子	3430003	越谷市船渡367-11	0489-74-2420
151	原島 明	3430807	越谷市赤山町5-7-47 ベアハイツ越谷1-409	0489-64-2614
152	原田熊蔵	3430821	越谷市瓦管根2-11-19	0489-62-1574
153	原田民自	3430047	越谷市弥十郎778-8	0489-76-3710
154	坂東静子	3430821	越谷市瓦管根2-5-25	0489-64-1721
155	樋上貞子	3430041	越谷市千間台西4-8-68	0489-77-8090
156	平井五六	3430805	越谷市神明町2-6-5	0489-64-9887
157	平川陽三	3430851	越谷市七左町8-81-1	0489-62-3885
158	平田博子	3430014	越谷市宮前1-17-14	0489-64-0857
159	藤井忠徳	3430024	越谷市越ヶ谷2686-3	0489-62-3551
160	古沢 孝	3430806	越谷市宮本町2-270	0489-65-2435
161	古谷住江	3430823	越谷市相模町6-443	0489-89-1029
162	古田美雄	3430041	越谷市千間台西5-26-37	0489-76-8161
163	古谷京子	3430831	越谷市伊原2-8-6	0489-87-8033
164	星野昭江	3430011	越谷市増林3557-2	0489-66-0090
165	星野 光	3430818	越谷市越ヶ谷本町3-4	0489-64-0211
166	堀井博之	3430851	越谷市七左町1-332-8	0489-88-1970
167	堀川静二	3430046	越谷市弥栄町3-43-82	0489-75-7899
168	本間清利	3430812	越谷市柳町3-23	0489-62-0210
169	増岡武司	3430023	越谷市東越谷7-129-14	0489-64-7386
170	松沢長次郎	3430015	越谷市花田3-19-4	0489-62-7087
171	真々田央子	3430023	越谷市東越谷4-25-7	0489-66-6368
172	真々田喜代	3430805	越谷市神明町1-33	0489-62-3544
173	水上 清	3430806	越谷市宮本町5-210-10	0489-66-7391
174	宮内和代	3430036	越谷市三野宮1356	0489-75-6848
175	宮川ユミ子	3430022	越谷市東大沢3-2-3	0489-76-8994
176	宮川 進	3430041	越谷市千間台西2-17-16	0489-75-9139
177	向佐清子	3430022	越谷市東大沢2-25-1	0489-74-5734
178	武藤すみ子	3430045	越谷市下間久里886-9	0489-75-2474
179	最上みち子	3430032	越谷市袋山1503-50	0489-75-0343
180	森田三郎	3430034	越谷市大竹535-3	0489-74-7730

## 越谷市郷土研究会会員名簿

99/4/4

	氏名	自)〒	自)住所1	自)TEL
91	鈴木雅雄	3430807	越谷市赤山町2-170	0489-62-2017
92	鈴木千代	3430033	越谷市恩間1070	0489-75-0976
93	鈴木徳治	3430025	越谷市大沢3-14-2	0489-76-6409
94	鈴木とし江	3430033	越谷市恩間984	0489-75-0130
95	鈴木秀俊	3430806	越谷市宮本町2-117-6	0489-64-1009
96	鈴木政子	3430011	越谷市増林3785	0789-63-2005
97	須藤清人	3430852	越谷市新川町1-345-3	0489-64-0393
98	関根綾子	3430825	越谷市大成町6-483-2	0489-89-1477
99	関根正直	3430844	越谷市大間野町5-178	0489-86-5755
100	仙波好江	3430041	越谷市千間台西5-10-20	0489-78-2067
101	染谷耕司	3430024	越谷市越ヶ谷2646	0489-64-6321
102	染谷勇蔵	3430015	越谷市花田1-32-1	0489-64-7940
103	染谷政之助	3430014	越谷市宮前1-8-1	0489-66-6997
104	染谷雪子	3430015	越谷市花田3-12-15	0489-65-6251
105	高崎 力	3430002	越谷市平方1416-1	0489-76-3987
106	高橋 清	3430852	越谷市新川町1-366	0489-87-9254
107	高橋正輝	3430814	越谷市東柳田町10-31	0489-62-5766
108	高橋正澄	3430835	越谷市蒲生西町1-3-4	0489-89-1617
109	高橋とき	3430025	越谷市大沢2-2-30	0489-74-4492
110	高橋良輔	3430846	越谷市登戸町15-17	0489-88-3834
111	高山はつ	3430044	越谷市大泊611-89 佐山様方	0489-75-6803
112	高谷良子	3430807	越谷市赤山町4-6-14	0489-65-9760
113	武井福三郎	3430826	越谷市東町5-23-2	0489-89-5480
114	武田和枝	3430807	越谷市赤山町3-154-13	0489-63-2038
115	竹谷フミ子	3430021	越谷市大林458-4	0489-74-5679
116	田島絹代	3430025	越谷市大沢3-16-45	0489-74-4072
117	立川武夫	3430815	越谷市元柳田町7-26	0489-63-0630
118	田所義朗	3430023	越谷市東越谷5-4-8	0489-65-3313
119	谷岡隆夫	3430806	越谷市宮本町3-117-8	0489-62-7527
120	田村精之	3430855	越谷市西新井1009	0489-74-4911
121	千葉富久子	3430024	越谷市越ヶ谷2679-1 ソフィア越谷709	0489-63-2581
122	土田愛子	3430804	越谷市南荻島4408	0489-74-1531
123	堀竹宏吉	3430806	越谷市宮本町5-210-17	0489-62-1542
124	照井春吉	3430807	越谷市赤山町2-228-3	0489-66-4785
125	豊田 裕	3430845	越谷市南越谷1-6-75 ジュネシオン106	0489-87-4202
126	中沢正夫	3430804	越谷市南荻島3460-1	0489-77-8087
127	中島キヨ子	3430825	越谷市大成町2-135	0489-89-4791
128	中地婦志江	3430033	越谷市恩間217	0489-75-0770
129	中道 康	3430804	越谷市南荻島596-3	0489-77-4860
130	中村和代	3430804	越谷市南荻島3457-4	0489-75-3564
131	中村孝次郎	3430843	越谷市蒲生西町9-1	0489-88-4400
132	中村修平	3430012	越谷市増森1701	0489-66-8917
133	中村 貢	3430825	越谷市大成町6-369	0489-85-6960
134	中村博子	3430047	越谷市弥十郎37-10	0489-74-8361
135	長瀬由木夫	3430045	越谷市下間久里522-4	0489-75-1519

## 越谷市郷土研究会会員名簿

99/4/4

	氏名	自)〒	自)住所1	自)TEL
46	紙谷ひさ子	3430023	越谷市東越谷7-3010-3	0489-65-7626
47	亀田すみ子	3430032	越谷市袋山1629-6	0489-76-0331
48	川上満智	3430805	越谷市神明町1-129	0489-62-0649
49	川添ハルミ	3430807	越谷市赤山町2-238-3	0489-64-5548
50	川田佐一郎	3430811	越谷市御殿町4-30	0489-64-3240
51	川原 実	3430046	越谷市弥栄町2-514-115	0489-77-3688
52	菅野トミ江	3430027	越谷市大房549-58	0489-74-1026
53	木崎キン	3430044	越谷市大泊1060-7	0489-76-0151
54	木曾麻蔵	3430046	越谷市弥栄町1-172-31	0489-76-5549
55	工藤さだ子	3430021	越谷市大林241-10	0489-76-9680
56	工藤松二郎	3430015	越谷市花田733-21	0489-66-0978
57	黒田田男	3430015	越谷市花田4-18-1	0489-64-7944
58	黒田陽一	3430014	越谷市宮前1-9-3	0489-64-2920
59	小出美代子	3430805	越谷市神明町2-150-1	0489-62-5873
60	小島千枝	3430846	越谷市豊戸町30-38	0489-86-5141
61	小島 誠	3430002	越谷市平方150	0489-76-0647
62	小杉勝義	3430032	越谷市袋山1503-12	0489-75-3524
63	小林重蔵	3430044	越谷市大泊712	0489-76-3855
64	小林秀男	3430023	越谷市東越谷9-34-3	0489-62-3704
65	小林まつ	3430015	越谷市花田1-23-3	0489-62-8428
66	小林よしゑ	3430845	越谷市南越谷3-13-9	0489-63-0346
67	近藤ユキ子	3430807	越谷市赤山町2-24	0489-62-8305
68	斉藤友子	3430813	越谷市越ヶ谷1-3-29	0489-62-8554
69	斉藤弘蔵	3430027	越谷市大房549	0489-76-3066
70	坂本弘子	3430806	越谷市宮本町5-210-8	0489-64-7394
71	佐久間朝子	3430034	越谷市大竹755-14	0489-75-0676
72	佐久間サツ	3430033	越谷市恩間1075	0489-75-0992
73	佐々木一塵	3430027	越谷市大房905-2	0489-79-4131
74	佐藤滋子	3430851	越谷市七左町1-250	0489-88-9044
75	佐藤光夫	3430807	越谷市赤山町2-169	0489-62-6544
76	椎橋昭三	3430044	越谷市大泊611-19	0489-77-2602
77	重田さと子	3430846	越谷市豊戸町6-46	0489-87-7537
78	渋谷正芳	3430838	越谷市蒲生1-14-9	0489-86-3146
79	新戸場美	3430015	越谷市花田3-17-6	0489-62-9672
80	須賀幸子	3430011	越谷市増林3322	0489-65-9732
81	菅波昌夫	3430845	越谷市南越谷1-3-18	0489-86-0563
82	須賀美代子	3430033	越谷市恩間972	0489-75-0874
83	菅原秀逸	3430033	越谷市恩間B06-5	0489-75-6204
84	杉島ヨウ子	3430033	越谷市恩間309-3	0489-75-0697
85	杉田サトミ	3430836	越谷市蒲生寿町2-10 ヴィルヌーブ南越谷B-508	0489-87-5056
86	鈴木和雄	3430813	越谷市越ヶ谷5-2-19	0489-64-5450
87	鈴木和子	3430041	越谷市千間台西2-14-5	0489-75-3665
88	鈴木作之助	3430022	越谷市東大沢3-32-5	0489-79-9400
89	鈴木千也子	3430805	越谷市神明町2-407	0489-74-6258
90	鈴木タカネ	3430025	越谷市大沢1579-9	0489-78-3969

## 越谷市郷土研究会会員名簿

99/4/4

	氏名	自)〒	自)住所1	自)TEL
1	会田 俊	3430805	越谷市神明町2-1	0489-62-3300
2	青木祥子	3430856	越谷市谷中町1-71-15	0489-66-4638
3	青木泰英	3430844	越谷市大間野町2-5-6	0489-88-0744
4	青木豊子	3430807	越谷市赤山町3-29-5	0489-62-9871
5	青山栄吉	3430032	越谷市袋山2017-10	0489-76-0558
6	赤川まつ	3430823	越谷市相模町6-442	0489-85-9375
7	荒瀬富美子	3430043	越谷市上間久里448-22	0489-77-4147
8	有瀬龍雄	3430817	越谷市越ヶ谷中町8-26	0489-62-2054
9	安藤トモ子	3430041	越谷市千間台西5-10-11	0489-75-1802
10	一色英子	3430046	越谷市弥栄町1-172-6	0489-78-0382
11	池田 仁	3430823	越谷市相模町2-238-2	0489-86-7765
12	石川辰三郎	3430015	越谷市花田2-6-7	0489-62-1328
13	石川美津江	3430806	越谷市宮本町5-255-15	0489-85-7278
14	石崎一宏	3430023	越谷市東越谷3-5-17	0489-62-0536
15	石塚隆正	3430813	越谷市越ヶ谷2-2-26	0489-62-2604
16	石鍋隆子	3430805	越谷市神明町1-150-1	0489-66-8712
17	和泉エツ	3430033	越谷市恩間545-11	0489-77-4403
18	磯谷知子	3430804	越谷市南荻島2002-4	0489-78-8339
19	井田康雄	3430834	越谷市蒲生愛宕町7-13	0489-87-5682
20	市川巳隆	3430838	越谷市蒲生3-15-4	0489-89-0349
21	一安タミ子	3430021	越谷市大林469-3	0489-76-0345
22	伊藤一男	3430046	越谷市東越谷2-8-34	0489-65-7791
23	伊藤靖二	3430032	越谷市袋山604-13	0489-75-5568
24	稲垣和子	3430805	越谷市神明町1-52	0489-62-1414
25	井上文子	3430805	越谷市神明町1-102	0489-65-3263
26	井上陽子	3430813	越谷市越ヶ谷1-9-9	0489-65-9521
27	岩沢 明	3430842	越谷市蒲生旭町6-8	0489-88-4815
28	岩瀬静江	3430841	越谷市蒲生東町7-52	0489-88-0929
29	宇田川正二	3430805	越谷市神明町3-410	0489-76-5754
30	大河原初男	3430846	越谷市登戸町36-26	0489-86-6778
31	大熊弥平	3430032	越谷市袋山1105	0489-74-7212
32	太田つる	3430806	越谷市宮本町3-177	0489-64-2723
33	岡田和子	3430015	越谷市花田3-5-8	0489-62-3873
34	尾上 力	3430851	越谷市七左町1-365-8	0489-86-1683
35	小川隆雄	3430806	越谷市宮本町4-5-4	0489-65-6339
36	小口久美	3430043	越谷市上間久里603-1	0489-76-7964
37	小原勘三郎	3430806	越谷市宮本町3-50	0489-64-0005
38	鏡 澄子	3430025	越谷市赤山町1-55	0489-62-6822
39	片桐 薫	3430806	越谷市宮本町3-175-10	0489-62-9648
40	加藤きよ	3430014	越谷市宮前1-6-40	0489-64-7619
41	加藤サイ子	3430026	越谷市北越谷1-21-2	0489-75-8303
42	加藤富士代	3430806	越谷市宮本町2-86	0489-62-4878
43	金子久美子	3430041	越谷市千間台西1-6-16	0489-76-1722
44	上郷以満子	3430823	越谷市相模町3-132-2	0489-88-6021
45	上村 透	3430823	越谷市相模町7-184-2	0489-86-7283

常任顧問	小島 誠		
会 長	谷岡隆夫		
副会長	鈴木秀俊		
理 事	有滝龍雄 小原勘三郎 鈴木種雄 名倉さわ 林 和江 山田政信	池田 仁 加藤幸一 高崎 力 西田 茂 平川陽三 山口美津江	一色英子 木原徹也 高山はつ 野村勝八 本間清利
幹 事	宮川 進	堤竹宏吉	
監 事	古田美雄	宇田川正二	

-----

越谷市文化連盟理事

谷岡隆夫 高崎 力

越谷市文化連盟代議員

鈴木種雄 堤竹宏吉 山口美津江

市民まつり及び市民文化祭実行委員(展示)

谷岡隆夫 鈴木秀俊 小原勘三郎

越谷市郷土研究会実行委員

伊藤靖二 森田三郎 原島 明 竹谷フミ子  
高橋正澄 水上 清 佐藤光夫 磯谷知子

◎ お知らせとお願ひ

年会費のお払込について

私達の越谷市郷土研究会は、会則に則り、会員皆様方の年会費を以て基本財源とし、史跡めぐり、講演会、文化祭への出展、会報発行などの活動をさせていただいております。

年会費は、史跡めぐり等の機会を利用し、随時 担当者が受領させていただいておりますので、何卒皆様方が協力をお願い申し上げます。

尚、唯今現在年会費を未払の方は、最寄りの郵便局の窓口にお置かれております「払込取扱票」により、左記の通りのお払込手続きが出来ますのでどうぞ宜しくお願ひします。この時の手数料金七十円は恐縮ですが各自ご負担願ひます。(会費表 四月一日、第三十三頁)

記

(1) 年会費

金二千円也

(2) 払込先

越谷市郷土研究会

(3) 払込方法

(口座番号)0011014164083

払込取扱票により郵便局からお払込下さい。この時手渡されます払込票兼受取票を以て当会の領収証とさせていただきます。

(4) 払込期限

会員継続希望の方で未払いの方は早期のお手続きをお願いします。

(5) 連絡先

会長 谷岡隆夫 (☎0489-82-7524)

〒343-0806

越谷市宮本町3-117-18

◎ 書き方の見本

(1)(2) 何れの用紙でも可。不明な点がありましたら郵便局窓口へお尋ね下さい。

(1)

郵便振替払込金受領証		窓口払込専用
振込先	0011014164083	2000
振込元	越谷市郷土研究会	70-
① 振込額は、振込人によって記入してください。 ② 振込元は、二桁目の振込先に必ず記入してください。 ③ 振込元を誤記した場合は、その振込日翌日に訂正を申し出てください。 ④ この振込は振替で振付しますので、振付に丁寧に記入してください。 ⑤ ①、②、③を誤記した場合は取り消しさせていただきます。		
この受領証は、郵便振替の払込金の証拠となるものですから大切に保管してください。		
ご自分の住所とお名前 (印)		交付振替専用紙

(2)

払込取扱票		払込票兼受領証
振込先	0011014164083	2000
振込元	越谷市郷土研究会	70-
① 振込額は、振込人によって記入してください。 ② 振込元は、二桁目の振込先に必ず記入してください。 ③ 振込元を誤記した場合は、その振込日翌日に訂正を申し出てください。 ④ この振込は振替で振付しますので、振付に丁寧に記入してください。 ⑤ ①、②、③を誤記した場合は取り消しさせていただきます。		
ご自分の住所とお名前 (印)		交付振替専用紙

## あとがき

小原勘三郎

昭和四十七年三月創刊の本会報は、今回で創刊十号を迎えることができました。

これは多くの方の寄稿によって支えられてきた賜物と、厚くお礼申し上げます。

この会報は歴史の好きな方々による地域同人誌です。

わかりやすく、楽しく読んでいただけるよう心がけています。

「会員アンケート」「史跡めぐりの記録」

には、なるべく多くの方が誌面にご登場いただきたいと考えております。

「大沢きき書き」「蒲生きき書き」

は鈴木徳治氏、高橋正澄氏のご配慮により、できたものです。

近年、地域が大きくかわり、古いことが消えつつあります。

今のうちに記録・保存しようかと企画したものです。

今後とも初心を忘れることなく、刊行を続けてまいります。

一層のご支援をお願い申し上げます。

### 編集委員

小原勘三郎	加藤 幸一
鈴木 秀俊	鈴木 種雄
高山 はつ	谷岡 隆夫
堤竹 宏吉	西田 茂
宮川 進	山口美津江

会 報	十号	会員頒布
発行日	平成十一年六月	
発行所	越谷市郷土研究会	
代表者	越谷市宮本町三の一七の八 谷岡 隆夫	
印刷所	三光堂印刷所	
	越谷市大沢一の十五の十四	